

び別れたるパウロ——この福音は神その預言者たちにより、聖書の中に預じめ御子に就きて約し給ひしものなり。御子は肉によれば、ダビデの裔より生れ、^四 潔き靈によれば、死人の復活により大能をもて神の子と定められ給へり、即ち我らの主イエス・キリストなり。我等その御名の爲にもろもろの國人を信仰に従順ならしめんとて、彼より恩恵と使徒の職とを受けたり。汝等もその中にありてイエス・キリストの有とならん爲に召されたるなり——われ書をロマに在りて神に愛せられ、召されて聖徒となりたる凡ての者に贈る。願くは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜ふ恩恵と平安と汝らに在らんことを。

汝らの信仰、全世界に言傳へられたれば、我まづ汝ら一同の爲にイエス・キリストによりて我が神に感謝す。その御子の福音に於て我が靈をもて事ふる神は、わが絶えず祈のうちに汝らを覚え、如何にしてか御意に適ひ、いつか汝らに到るべき途を得んと、常に冀がふことを我がために證し給ふなり。われ汝らを見んことを切に望むは、汝らの堅うせられん爲に靈の賜物を分け與へんとてなり。即ち我なんぢらの中にありて互の信仰により相共に慰められん爲なり。兄弟よ、我ほかの異邦人の中より得しごとく汝らの中よりも實を得んとて屢次なんぢら

に往かんとしたれど、今に至りてなほ妨げらる、此の事を汝らの知らざるを欲せず。我はギリシヤ人にも夷人にも智き者にも愚なる者にも負債あり。この故に我はロマに在る汝らにも福音を宣傳へんことを頻りに願ふなり。我は福音を恥とせず、この福音はユダヤ人を始めギリシヤ人にも、凡て信ずる者に救を得さす神の力たればなり。神の義はその福音のうちに顯れ、信仰より出でて信仰に進ましむ。録して『義人は信仰によりて生くべし』とある如し。

それ神の怒は不義をもて眞理を阻む人の、もろもろの不虔と不義とに對ひて天より顯る。その故は神につきて知り得べきことは彼らに顯著なればなり、神これを顯し給へり。それ神の見るべからざる永遠の能力と神性とは造られたる物により世の創より悟りえて明かに見るべければ、彼ら言ひ遁るる術なし。神を知りつつも尙これを神として崇めず、感謝せず、その念は虚しく、その愚なる心は暗くなれり。自ら智しと稱へて愚となり、朽つることなき神の榮光を易へて朽つべき人および禽獸・匍ふ物に似たる像となす。

この故に神は彼らを其の心の慾にまかせて、互にその身を辱しむる汚穢に付し給へり。彼らは神の眞を易へて虚偽となし、造物主を措きて造られたる物を拜

し、且これに事ふ、造物主は永遠に讃むべき者なり、アアメン。
 之によりて神は彼らを恥づべき慾に付し給へり、即ち女は順性の用を易へて
 逆性の用となし、男もまた同じく女の順性の用を棄てて互に情慾を熾し、男と男
 と恥づることを行ひて、その迷に値すべき報を己が身に受けたり。
 また神を心に存むるを善しとせざれば、神もその邪曲なる心の隨に爲まじき
 事をするに任せ給へり。即ちもろもろの不義・悪・慳貪・惡意にて滿つる者、ま
 た嫉妬・殺意・紛争・詭計・惡念の溢るる者、讒言する者・謗る者・神に憎まる
 る者・侮る者・高ぶる者・誇る者・惡事を企つる者・父母に逆ふ者、無知・違
 約・無情・無慈悲なる者にして、斯る事どもを行ふ者の死罪に當るべき神の定を知
 りながら、啻に自己これらの事を行ふのみならず、また人の之を行ふを可しとせ
 り。

第二章

然れば凡て人を審く者よ、なんぢ言ひ遁るる術なし、他の人を審く
 は、正しく己を罪するなり。人をさばく汝もみづから同じ事を行へば
 なり。斯る事をおこなふ者を罪する神の審判は眞理に合へりと我らは知る。斯
 る事をおこなふ者を審きて自己これを行ふ人よ、なんぢ神の審判を遁れんと思ふ

か。神の仁慈なんぢを悔改に導くを知らずして、その仁慈と忍耐と寛容との豊
 なるを輕んずるか。なんぢ頑固と悔改めぬ心により己のために神の怒を積み
 て、その正しき審判の顯るる怒の日に及ぶなり。神はおのおの所作に隨ひて報
 い、耐忍びて善をおこなひ光榮と尊貴と朽ちざる事を求むる者には永遠の生命
 をもて報い、徒黨により眞理に従はずして不義にしたがふ者には怒と憤恚とをも
 て報い給はん。すべて惡をおこなふ人には、ユダヤ人を始めギリシヤ人にも患難
 と苦難とあり、凡て善をおこなふ人には、ユダヤ人を始めギリシヤ人にも光榮と
 尊貴と平安とあらん。そは神には偏り視給ふこと無ければなり。凡そ律法なく
 して罪を犯したる者は律法なくして滅び。律法ありて罪を犯したる者は律法により
 て審かるべし。律法を聞くもの神の前に義たるにあらず、律法をおこなふ者のみ
 義とせらるべし。律法を有たぬ異邦人、もし本性のまま律法に載せたる所を
 おこなふ時は、律法を有たずとも自から己が律法たるなり。即ち律法の命ずる所
 のその心に録されたるを顯し、おのが良心もこれが證をなして、その念、たがひに
 或は訴へ或は辯明す。是わが福音に云へる如く神のキリスト・イエスによりて
 人々の隠れたる事を審きたまふ日に成るべし。

一七 汝ユダヤ人と稱へられ、律法に安んじ、神を誇り、一八 その御意を知り律法に教へられて善悪を辨へ、一九 また律法のうちに知識と眞理との式を有てりとして盲人の手引、暗黒に在る者の光明、二〇 愚なる者の守役、幼兒の教師なりと自ら信ずる者よ、二一 何ゆゑ人を教へて己を教へぬか、竊む勿れと宣べて自ら竊むか、二二 姦淫する勿れと言ひて姦淫するか、偶像を惡みて宮の物を奪ふか、二三 律法に誇りて律法を破り神を輕んずるか、二四 録して『神の名は汝らの故によりて異邦人の中に瀆さる』とあるが如し、二五 なんぢ律法を守らば割禮は益あり、律法を破らば汝の割禮は無割禮となるなり、二六 割禮なき者も律法の義を守らば、その無割禮は割禮とせらるるにあらずや、二七 本性のまま割禮なくして律法を全うする者は、儀文と割禮とありてなほ律法をやぶる汝を審かん、二八 それ表面のユダヤ人はユダヤ人たるにあらず、肉に在る表面の割禮は割禮たるにあらず、二九 隠なるユダヤ人はユダヤ人なり、儀文によらず、靈による心の割禮は割禮なり、その譽は人よりにあらず神より來るなり。

第三章

然らばユダヤ人に何の優る所ありや、また割禮に何の益ありや。凡ての事に益おほし、先づ第一に彼らは神の言を委ねられたり。されど如何ん、ここに信ぜざる者ありとも、その不信は神の眞實を廢つべきか。

四 決して然らず、人をみな虚偽者とすとも神を誠實とすべし。録して『なんぢは其の言にて義とせられ、審かるとき勝を得給はん爲なり』とあるが如し。然れど若し我らの不義は神の義を顯すとせば何と言はんか、怒を加へたまふ神は不義なるか（こは人の言ふごとく言ふなり）六 決して然らず、若し然らば神は如何にして世を審き給ふべき。七 わが虚偽によりて神の誠實いよいよ顯れ、その榮光とならんには、争て我なほ罪人として審かるる事あらん。八 また『善を來らせん爲に惡をなすは可からずや』（或者われらを譏りて之を我らの言なりといふ）斯る人の罪に定めらるるは正し。

九 さらば如何ん、我らの勝る所ありや、有ることなし。我ら既にユダヤ人もギリシヤ人もみな罪の下に在りと告げたり。一〇 録して『義人なし、一人だになし、聴き者なく、神を求むる者なし。二 みな迷ひて相共に空しくなれり、善をなす者なし、一人だになし。三 彼らの咽は開きたる墓なり、舌には詭計あり、口唇のうちには蝮の毒あり、一四 その口は詛と苦とにて滿つ。一五 その足は血を流すに速し、一六 破壊と艱難とその道にあり、一七 彼らは平和の道を知らず。一八 その眼前に神をおそるる畏なし』とあるが如し。

一九 それ律法の言ふところは律法の下にある者に語ると我らは知る、これは凡ての口ふさがり、神の審判に全世界の服せん爲なり。二〇 律法の行爲によりては、一人だに神のまへに義とせられず、律法によりて罪は知らるるなり。

二一 然るに今や律法の外に神の義は顯れたり、これ律法と預言者とに由りて證せられ、二三 イエス・キリストを信するに由りて凡て信する者に與へたまふ神の義なり。之には何等の差別あるなし。二三 凡ての人、罪を犯したれば神の榮光を受くるに足らず、二四 功なくして神の恩恵により、キリスト・イエスにある贖罪によりて義とせらるるなり。二五 即ち神は忍耐をもて過來しかたの罪を見遁し給ひしが、己の義を顯さんとして、キリストを立て、その血によりて信仰によれる宥の供物となし給へり。二六 これ今おのれの義を顯して、自ら義たらん爲、またイエスを信する者を義とし給はん爲なり。二七 然らば誇るところ何處にあるか、既に除かれたり、何の律法に由りてか、行爲の律法か、然らず、信仰の律法に由りてなり。二八 我らは思ふ、人の義とせらるるは、律法の行爲によらず、信仰に由るなり。二九 神はただユダヤ人のみの神なるか、また異邦人の神ならずや、然り、また異邦人の神なり。三〇 神は唯一にして割禮ある者を信仰によりて義とし、割禮なき者をも信仰によりて義とし給へば

三二 然らば我ら信仰をもて律法を空しくするか、決して然らず、反つて律法を堅うするなり。

第四章

一 然らば我らの先祖アブラハムは肉につきて何を得たりと言はんか。二 アブラハム若し行爲によりて義とせられたらんに誇るべき所あり、然れど神の前には有ることなし。三 聖書に何と云へるか『アブラハム神を信ず、その信仰を義と認められたり』と。四 それ働く者への報酬は恩恵といはず、負債と認めらる。五 されど働く事なくとも、敬虔ならぬ者を義としたまふ神を信する者は、その信仰を義と認めらるるなり。六 ダビデもまた行爲なくして神に義と認めらるる人の幸福につきて斯く云へり。曰く、『不法を免され、罪を蔽はれたる者は幸福なるかな、主が罪を認め給はぬ人は幸福なるかな』九 然れば此の幸福はただ割禮ある者にのみあるか、また割禮なき者にもあるか、我らは言ふ『アブラハムはその信仰を義と認められたり』と。一〇 如何なるときに義と認められたるか、割禮ののちか、無割禮のときか、割禮の後ならず、無割禮の時なり。一一 而して無割禮のときの信仰によれる義の印として割禮の徴を受けたり、これ無割禮にして信する凡ての者の義と認められん爲に、その父となり、二 又また割禮のみに由らず、我らの父

アブラハムの無割禮のときの信仰の跡をふむ割禮ある者の父とならん爲なり。二三
 アブラハム世界の世嗣たるべしとの約束を、アブラハムとその裔との與へられしは、
 律法に由らず、信仰の義に由れるなり。一四
 もし律法による者ども世嗣たらば、信仰
 は空しく約束は廢るなり。一五
 それ律法は怒を招く、律法なき所には罪を犯すことも
 なし。一六
 この故に世嗣たることの恩恵に干らんために信仰に由るなり、是かの約束
 のアブラハムの凡ての裔、すなはち律法による裔のみならず、彼の信仰に效ふ裔に
 も堅うせられん爲なり。一七
 彼はその信したる所の神、すなはち死人を活し、無きも
 のを有るもの如く呼びたまふ神の前にて我等すべての者の父たるなり。録して
 『われ汝を立てて多くの國人の父とせり』とあるが如し。一八
 彼は望むべくもあらぬ
 時になほ望みて信したり、是なんぢの裔は斯の如くなるべしと言ひ給ひしに隨ひて
 多くの國人の父とならん爲なりき。一九
 斯て凡そ百歳に及びて己が身の死にたるがご
 ととき状なると、サラの胎の死にたるが如きとを認むれども、その信仰よわらず、
 不信をもて神の約束を疑はず、信仰により強くなりて神に榮光を歸し、二〇
 し給へることを、成し得給ふと確信せり。二三
 之に由りて其の信仰を義と認められた
 り。二三
 斯く『義と認められたり』と録したるは、アブラハムの爲のみならず、また

我らの爲なり。二四
 我らの主イエスを死人の中より甦へらせ給ひし者を信する我ら
 も、その信仰を義と認められん。二五
 主は我らの罪のために付され、我らの義とせら
 れん爲に甦へらせられ給へるなり。

第五章

一
 斯く我ら信仰によりて義とせられたれば、我らの主イエス・キリス
 トに頼り、神に對して平和を得たり。二
 また彼により信仰によりて
 今、立つところの恩恵に入ることを得、神の榮光を望みて喜ぶなり。三
 然のみなら
 ず患難をも喜ぶ、そは患難は忍耐を生じ、四
 忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ず
 と知ればなり。五
 希望は恥を來らせず、我らに賜ひたる聖靈によりて神の愛、われ
 らの心に注げばなり。六
 我等のなほ弱かりし時、キリスト定りたる日に及びて敬虔
 ならぬ者のために死に給へり。七
 それ義人のために死ぬるもの殆どなし、仁者のた
 めには死ぬることを厭はぬ者もやあらん。八
 然れど我等がなほ罪人たりし時、キリ
 スト我等のために死に給ひしに由りて、神は我らに對する愛をあらはし給へり。九
 斯く今その血に頼りて我ら義とせられたらんには、況て彼によりて怒より救はれ
 ざらんや。一〇
 我等もし敵たりしとき御子の死に頼りて神と和ぐことを得たらんに
 は、況て和ぎて後その生命によりて救はれざらんや。一一
 然のみならず今われらに

和陸を得させ給へる我らの主イエス・キリストに頼りて神を喜ぶなり。

二二 一人の罪によりて罪は世に入り、また罪によりて死は世に入り、凡ての人、罪を犯しし故に死は凡ての人に及べり。二三 律法のきたる前にも罪は世にあり

き、然れど律法なくば罪は認めらるること無し。二四 然るにアダムよりモーセに至るまで、アダムの咎と等しき罪を犯さぬ者の上にも死は王たりき。アダムは來らんと

する者の型なり。二五 然れど恩恵の賜物は、かの咎の如きにあらず、一人の咎によりて多くの人の死にたらんには、況て神の恩恵と一人の人の人イエス・キリストによる

恩恵の賜物とは、多くの人に溢れざらんや。二六 また又この賜物は罪を犯しし一人より來れるものの如きにあらず、審判は一人よりして罪を定むるに至りしが、恩恵の賜物

は多くの咎よりして義とするに至るなり。二七 もし一人の咎のために一人によりて死は王となりたらんには、況て恩恵と義の賜物とを豊かに受くる者は一人のイエス・

キリストにより生命に在りて王たらざらんや。二八 されば一つの咎によりて罪を定むることの凡ての人に及びごとく、一つの正しき行爲によりて義とせられ、生命を

得るに至ることも凡ての人に及べり。二九 それは一人の不従順によりて多くの人の罪人とせられし如く、一人の従順によりて多くの人の義人とせらるるなり。三〇 律法

の來りしは咎の増さんためなり、然れど罪の増すところには恩恵も彌増せり。三一 此れ罪の死によりて王たりし如く、恩恵も義によりて王となり、我らの主イエス・キリストに由りて永遠の生命に至らん爲なり。

第六章

一 されば何をか言はん、恩恵の増さんために罪のうち止るべきか、決して然らず、罪に就きて死にたる我らは争て尙その中に生きんや。三 なんぢら知らぬか、凡そキリスト・イエスに合ふバプテスマを受けたる我ら

は、その死に合ふバプテスマを受けしを。四 我らはバプテスマによりて彼とともに葬られ、その死に合せられたり。これキリスト父の榮光によりて死人の中より甦へ

らせられ給ひしごとく、我らも新しき生命に歩まんためなり。五 我らキリストに接がれて、その死の狀にひとしくば、その復活にも等しかるべし。六 我らは知る、わ

れらの舊き人、キリストと共に十字架につけられたるは、罪の體ほろびて、此ののち罪に事へざらん爲なるを。七 是は死にし者は罪より脱るるなり。八 我等もしキリ

ストと共に死にしなければ、また彼とともに活きんことを信ず。九 キリスト死人の中より甦へりて復死に給はず、死もまた彼に主とならぬを我ら知ればなり。一〇 その死に給へるは罪につきて一たび死に給へるにて、その活き給へるは神につきて活き給

へるなり。二 斯のごとく汝らも己を罪につきては死にたるもの、神につきては、キリスト・イエスに在りて活きたる者と思ふべし。

然れば罪を汝らの死ぬべき體に王たらしめて其の慾に従ふことなく、一三 汝らの肢體を罪に獻げて不義の器となさず、反つて死人の中より活き返りたる者のごとく己を神にささげ、その肢體を義の器として神に獻げよ。一四 汝らは律法の下にあらずして恩恵の下にあれば、罪は汝らに主となる事なきなり。

一五 然らば如何に、我らは律法の下にあらず、恩恵の下にあるが故に罪を犯すべきか、決して然らず。一六 なんぢら知らぬか、己を獻げ僕となりて、誰に従ふとも其の僕たることを。或は罪の僕となりて死に至り、或は從順の僕となりて義にいたる。一七 然れど神に感謝す、汝等のもと罪の僕なりしが、傳へられし教の範に心より從ひ、一八 罪より解放されて義の僕となりたり。一九 斯く人の事をかりて言ふは、汝らの肉よわき故なり。なんぢら舊その肢體をささげ、穢と不法との僕となりて不法に到りしごとく、今その肢體をささげ、義の僕となりて潔に到れ。二〇 なんぢら罪の僕たりしときは義に對して自由なりき。二一 その時に今は恥とする所の事によりて何の實を得しか、これらの事の極は死なり。二三 然れど今は罪より解放されて神の僕とな

りたれば、潔きにいたる實を得たり、その極は永遠の生命なり。二三 それ罪の拂ふ價は死なり、然れど神の賜物は我らの主キリスト・イエスにありて受くる永遠の生命なり。

第七章

一 兄弟よ、なんぢら知らぬか（われ律法を知る者に語る）律法は人の生ける間のみ、之に主たるなり。二 夫ある婦は律法によりて夫の生ける中は之に縛らる。然れど夫、死なば夫の律法より解かるるなり。三 然れば夫の生ける中に他の人に適かば淫婦と稱へらるれど、夫、死なば、その律法より解放さるる故に他の人に適くとも淫婦とはならぬなり。四 わが兄弟よ、斯のごとく汝等もキリストの體により律法に就きて死にたり。これ他のもの、即ち死人の中より甦へらせられ給ひし者に適き、神のために實を結ばん爲なり。五 われら肉に在りしとき、律法に由れる罪の情は我らの肢體のうちにも働きて、死のために實を結ばせたり。六 然れど縛られたる所に就きて我等いま死にて律法より解かれたれば、儀文の舊きによらず、靈の新しきに従ひて事ふることを得るなり。

七 然らば何をか言はん、律法は罪なるか、決して然らず、律法に由らば、われ罪を知らず、律法に『貪る勿れ』と言はずば、慳貪を知らざりき。八 然れど罪は

機に乘じ誠命によりて各様の慳貪を我がうちに起せり、律法なくば罪は死にたるものなり。^九 われ曾て律法なくして生きてたれど、誠命きたりし時に罪は生き、我は死にたり。^{一〇} 而して我は生命にいたるべき誠命の反つて死に到らしむるを見出せり。^二 これ罪は機に乘じ誠命によりて我を欺き、かつ之によりて我を殺せり。^三 それ律法は聖なり、誠命もまた聖にして正しく、かつ善なり。^三 然れば善なるもの我に死となりたるか。決して然らず、罪は罪たることの現れんために善なる者によりて我が内に死を來らせたるなり。これ誠命によりて罪の甚だしき惡とならん爲なり。^四 われら律法は靈なるものと知る、されど我は肉なる者にて罪の下に賣られたり。^五 わが行ふことは我しらず、我が欲する所は之をなさず、反つて我が憎むところは之を爲すなり。^六 わが欲せぬ所を爲すときは律法の善なるを認む。^七 然れば之を行ふは我にあらざ、我が中に宿る罪なり。^八 我はわが中、すなはち我が肉のうちに善の宿らぬを知る、善を欲すること我にあれど、之を行ふ事なければなり。^九 わが欲する所の善は之をなさず、反つて欲せぬ所の惡は之をなすなり。^{一〇} 我もし欲せぬ所の事をなさば、之を行ふは我にあらざ、我が中に宿る罪なり。^{一一} 然れば善をなさんと欲する我に惡ありとの法を、われ見出せり。^{一二} われ中なる人にては神の律法を悦

べど、^{一三} わが肢體のうちに他の法ありて我が心の法と戦ひ、我を肢體の中にある罪の法の下に虜とするを見る。^{一四} 噫われ惱める人なるかな、此の死の體より我を救はん者は誰ぞ。^{一五} 我らの主イエス・キリストに頼りて神に感謝す、然れば我みづから心にては神の律法につかへ、肉にては罪の法に事ふるなり。

第八章

この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。^一 キリスト・イエスに在る生命の御靈の法は、なんぢを罪と死との法より解放したればなり。^二 肉によりて弱くなれる律法の成し能はぬ所を神は成し給へり、即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまへり。^三 これ肉に従はず、靈に従ひて歩む我らの中に律法の義の完うせられん爲なり。^四 肉にしたがふ者は肉の事をおもひ、靈にしたがふ者は靈の事をおもふ。^五 肉の念は死なり、靈の念は生命なり、平安なり。^六 肉の念は神に逆ふ、それは神の律法に服はず、否したがふこと能はず、^七 また肉に居る者は神を悦ばすこと能はざるなり。^八 然れど神の御靈なんぢらの中に宿り給はば、汝らは肉に居らて靈に居らん、キリストの御靈なき者はキリストに屬する者にあらず。^九 若しキリスト汝らに在さば體は罪によりて死にたる者なれど靈は義によりて生命に在らん。^{一〇} 若しイエスを

死人の中より甦へらせ給ひし者の御霊なんぢらの中に宿り給はば、キリスト・イエスを死人の中より甦へらせ給ひし者は、汝らの中に宿りたまふ御霊によりて汝らに死ねべき體をも活し給はん。

されば兄弟よ、われらは負債あれど、肉に負ふ者ならねば、肉に従ひて活くべきにあらず。汝等もし肉に従ひて活きなば、死なん。もし靈によりて體の行爲を殺さば活くべし。すべて神の御霊に導かるる者は、これ神の子なり。汝らは再び懼を懐くために僕たる靈を受けしにあらず、子とせられたる者の靈を受けたり、之によりて我らはアバ父と呼ぶなり。御霊みづから我らの靈とともに我らが神の子たることを證す。もし子たらば世嗣たらん、神の嗣子にしてキリストと共に世嗣たるなり。これはキリストとともに榮光を受けん爲に、その苦難をも共に受くるに因る。

われ思ふに、今の時の苦難は、われらの上に顯れんとする榮光にくらぶるに足らず。それ造られたる者は切に慕ひて神の子たちの現れんことを待つ。造られたるものの虚無に服せしは、己が願によるにあらず、服せしめ給ひし者によるなり。然れどなほ造られたる者にも滅亡の僕たる状より解かれて、神の子たちの光

榮の自由に入る望は存れり。我らは知る、すべて造られたるものの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを。然のみならず、御霊の初の實をもつ我らも自ら心のうちに嘆きて子とせられんこと、即ちおのが體の贖はれんことを待つなり。

我らは望によりて救はれたり、眼に見ゆる望は望にあらず、人その見るところを争てなほ望まんや。我等もし其の見ぬところを望まば、忍耐をもて之を待たん。斯のごとく御霊も我らの弱を助けたまふ。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みづから言ひ難き歎をもて執成し給ふ。また人の心を極めたまふ者は御霊の念をもしりたまふ。御霊は神の御意に適ひて聖徒のために執成し給へばなり。神を愛する者、すなはち御旨によりて召されたる者の爲には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知る。神は預じめ知りたまふ者を御子の像に象らせんと預じめ定め給へり。これ多くの兄弟のうちに、御子を嫡子たらせんが爲なり。又その預じめ定めたる者を召し、召したる者を義とし、義としたる者には光榮を得させ給ふ。

然れば此等の事につきて何をか言はん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。己の御子を惜まずして我ら衆のために付し給ひし者は、などか之に

そへて萬物を我らに賜はざらんや。誰か神の選び給へる者を訴へん、神は之を義とし給ふ。誰か之を罪に定めん、死にて甦へり給ひしキリスト・イエスは神の右に在して、我らの爲に執成し給ふなり。我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、劍か、録して、『汝のために我らは、終日、殺されて屠らるべき羊の如きものと爲られたり』とあるが如し。然れど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したまふ者に頼り、勝ち得て餘あり。われ確く信ず、死も生命も、御使も、權威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。

第九章

我キリストに在りて眞をいひ虚偽を言はず、我に大なる憂あることと心に絶えざる痛あることを我が良心も聖靈によりて證す。もし我が兄弟わが骨肉の爲にならんには、我みづから誣はれてキリストに棄てらるるも亦ねがふ所なり。彼等はイスラエル人にして、彼らには神の子とせられたることと、榮光と、もろもろの契約と、授けられたる律法と、禮拜と、もろもろの約束とあり。先祖たちも彼等のものなり、肉によれば、キリストも彼等より出て給ひ

たり。キリストは萬物の上にあり、永遠に讃むべき神なり、アアメン。それ神の言は廢りたるに非ず、イスラエルより出づる者みなイスラエルなるに非ず、また彼等はアブラハムの裔なればとて皆その子たるに非ず『イスラクより出づる者は、なんぢの裔と稱へらるべし』とあり。即ち肉の子らは神の子らにあらず、ただ約束の子等のみ其の裔と認めらるるなり。約束の御言は是なり、曰く『時ふたたび巡り來らば、我きたりてサラに男子あらん』と。然のみならず、レベカも我らの先祖イサク一人によりて孕りたる時、その子いまだ生れず、善も悪もなさぬ間に神の選の御旨は動かず、行爲によらて召す者によらん爲に『兄は次弟に事ふべし』と、レベカに宣給へり。『われヤコブを愛しエサウを憎めり』と録されたる如し。然らば何をか言はん、神には不義あるか、決して然らず。モーセに言ひ給ふ『われ憐まんとする者をあはれみ、慈悲を施さんとする者に慈悲を施すべし』と。然れば欲する者にも由らず、走る者にも由らず、ただ憐みたまふ神に由るなり。パロにつきて聖書に言ひ給ふ、『わが汝を起したるは此の爲なり、即ち我が能力を汝によりて顯し、且わが名の全世界に傳へられん爲なり』と。されば神はその憐まんと欲する者を憐み、その頑固にせんを頑固にし給ふなり。

然らば汝あるひは我に言はん『神なんぞなほ人を咎め給ふか、誰かその御定に悖る者あらん』^{二〇} ああ人よ、なんぢ誰なれば神に言ひ逆ふか、造られしもの、造りたる者に對ひて『なんぢ何ぞ我を斯く造りし』^{二一}と言ふべきか。陶工は同じ土塊をもて此を貴きに用ふる器とし、彼を賤きに用ふる器とするの權なからんや。もし神、怒をあらはし權力を示さんと思しつつも、なほ大なる寛容をもて、滅亡に備れる怒の器を忍び、また光榮のために預じめ備へ給ひし憐憫の器に對ひて、その榮光の富を示さんと爲給ひしならば如何に。^{二四}この憐憫の器は我等にしてユダヤ人の中より而已ならず、異邦人の中よりも召し給ひしものなり。^{二五}ホゼヤの書に、『我わが民たらざる者を我が民と呼び、愛せられざる者を愛せらるる者と呼ばん、^{二六}「なんぢら我が民にあらず」と言ひし處にて、彼らは活ける神の子と呼ばるべし』と宣給へる如し。^{二七}イザヤもイスラエルに就きて叫べり『イスラエルの子孫の數は海の砂のごとくなりとも救はるるは、ただ殘の者のみならん。^{二八}主、地の上に御言を成し了へ、これを遂げ、これを速かに爲給はん』^{二九}また『萬軍の主、われらに裔を遺し給はずば、我等ソドムの如くになり、ゴモラに等しかりしならん』とイザヤの預言せしが如し。^{三〇}然らば何をか言はん、義を追求めざりし異邦人は義を得

たり、即ち信仰による義なり。^{三一}イスラエルは義の律法を追求めたれど、その律法に到らざりき。^{三二}何の故か、かれらは信仰によらず、行爲によりて追求めたる故なり。彼らは蹟く石に蹟きたり。^{三三}録して、『視よ、われ蹟く石、礙ぐる岩をシオンに置く、之に依頼む者は辱しめられじ』と、あるが如し。

第一〇章

兄弟よ、わが心のねがひ、神に對する祈は、彼らの救はれんことなり。^一われ彼らが神のために熱心なることを證す、されど其の熱心は知識によらざるなり。^二それは神の義を知らず、己の義を立てんとして、神の義に服はざればなり。^三キリストは凡て信ずる者の義とせられん爲に律法の終となり給へり。^四モーセは、律法による義をおこなふ人は之によりて生くべしと録したり。^五然れど信仰による義は斯くいふ『なんぢ心に「誰か天に昇らん」と言ふなかれ』^六と。これキリストを引下さんとするなり『また「たれか底なき所に下らん」と言ふなかれ』と。是キリストを死人の中より引上げんとするなり。^七さらば何と言ふか『御言は、なんぢに近し、なんぢの口にあり、汝の心にある』と。これ我らが宣ぶる信仰の言なり。^八即ち、なんぢ口にてイエスを主と言ひあらはし、心にて神の之を死人の中より甦へらせ給ひしことを信ぜば、救はるべし。^九それ人は心に信じ

て義とせられ、口に言ひあらはして救はるるなり。一聖書にいふ『すべて彼を信ずる者は辱しめられじ』と。二ユダヤ人とギリシヤ人との區別なし、同一の主は萬民の主にましまして、凡て呼び求むる者に對して豊なり。三『すべて主の御名を呼び求むる者は救はるべし』とあればなり。四然れど未だ信ぜぬ者を争て呼び求むることをせん、未だ聽かぬ者を争て信ずることをせん、宣傳ふる者なくば争て聽くことをせん。五遣されずば争て宣傳ふることを爲ん『ああ美しきかな、善き事を告ぐる者の足よ』と録されたる如し。

然れど、みな福音に従ひしにはあらず、イザヤいふ『主よ、われらに聞きたる言を誰か信ぜし』一七斯く信仰は聞くにより、聞くはキリストの言による。一八されど我いふ、彼ら聞えざりしか、然らず『その聲は全地にゆきわたり、其の言は世界の極にまで及べり』一九我また言ふ、イスラエルは知らざりしか、先づモーセ言ふ、『われ民ならぬ者をもて汝らに嫉を起させ、愚なる民をもて汝らを怒らせん』三〇またイザヤ憚らずして言ふ、『我を求めざる者に、われ見出され、我を尋ねざる者に我あらはれたり』三一更にイスラエルに就きては『われ服はずして言ひさからふ民に終日、手を伸べたり』と云へり。

第一一章

然れば我いふ、神はその民を棄て給ひしか、決して然らず、我もイ
 スラエル人にしてアブラハムの裔ベニヤミンの族の者なり。二神はその
 預じめ知り給ひし民を棄て給ひしにあらず、汝らエリヤに就きて聖書に云へるこ
 とを知らぬか、彼イスラエルを神に訴へて言ふ、『主よ、彼らは汝の預言者たちを
 殺し、なんぢの祭壇を毀ち、我ひとり遣りたるに、亦わが生命をも求めんとするな
 り』と。四然るに御答は何と云へるか『われバアルに膝を屈めぬ者、七千人を我が
 ために遣し置けり』と。五斯のごとく今もなほ恩恵の選によりて遣れる者あり。
 六もし恩恵によるとせば、もはや行爲によるにあらず、然らずば恩恵は、もはや
 恩恵たらざるべし。七然らば如何に、イスラエルはその求むる所を得ず、選ばれた
 る者は之を得たり、その他の者は鈍くせられたり。八『神は今日に至るまで彼らに眠
 れる心、見えぬ目、聞えぬ耳を與へ給へり』と録されたるが如し。九ダビデも亦い
 ふ、『かれらの食卓は糶となれ、網となれ、躓物となれ、報となれ、一〇その眼は眩
 みて見えずなれ、常にその背を屈めしめ給へ』一一然れば我いふ、彼らの躓きしは倒
 れんが爲なりや、決して然らず、反つて其の落度によりて救は異邦人に及べり、こ
 れイスラエルを勵さん爲なり。一二もし彼らの落度、世の富となり、その衰微、異邦

人の富となりたらんには、況て彼らの數滿るに於てをや。

二三

われ異邦人なる汝等にいふ、我は異邦人の使徒たるによりて己が職を重ん

ず。

これ或は我が骨肉の者を勵し、その中の幾許かを救はん爲なり。もし彼ら

の棄てらるること世の和平となりたらんには、其の受け納れらるるは、死人の中よ

り活くると等しからずや。

もし初穂の粉潔くば、パンの團塊も潔く、樹の根潔く

ば、その枝も潔からん。

若しオリブの幾許の枝きり落されて野のオリブなる汝、

その中に接がれ、共にその樹の液汁ある根に與らば、

かの枝に對ひて誇るな、たとひ誇るとも汝は根を支へず、根は反つて汝を支ふるなり。

『枝の折られしは我が接がれん爲なり』と。

實に然り、彼らは不信によりて折られ、汝は信仰によりて立てるなり、高ぶりたる思をもたず、反つて懼れよ。もし

神、原樹の枝を惜み給はざりしならば、汝をも惜み給はじ。

神の仁慈と、その嚴肅とを見よ。嚴肅は倒れし者にあり、仁慈はその仁慈に止る汝にあり、若しその仁慈に止らずば、汝も切り取らるべし。

彼らも若し不信に止らずば、接がることあらん、神は再び彼らを接ぎ得給ふなり。

なんぢ生來の野のオリブより切り取られ、その生來に悖りて善きオリブに接がれたらんには、況て原樹のままなる枝は

己がオリブに接がれざらんや。

兄弟よ、われ汝らが自己を聰しとする事なからん爲に、この奥義を知らざる

を欲せず、即ち幾許のイスラエルの鈍くなれるは、異邦人の入り來りて數滿つるに

及ぶ時までなり。

斯してイスラエルは悉とく救はれん。録して、『救ふ者シオン

より出て來りて、ヤコブより不虔を取り除かん、

我その罪を除くときに彼らに立つる我が契約は是なり』とあるが如し。

福音につきて云へば汝等のために彼らは

敵とせられ、選につきて云へば、先祖たちの爲に彼らは愛せらるるなり。それ神の賜物と召とは變ることなし。

汝ら前には神に従はざりしが、今は彼らの不順によりて憐まれたる如く、

彼らも汝らの受くる憐憫によりて憐まれん爲に今は従はざるなり。

神は凡ての人を憐まんために凡ての人を不順の中に取籠め給ひたり。

ああ神の智慧と知識との富は深いか、その審判は測り難く、その途は尋ね難し。『たれか主の心を知りし、誰かその議士となりし。たれか先づ主に與へて其の報を受けんや』

これ凡ての物は神より出て神によりて成り、神に歸すればなり、榮光とこしへに神にあれ、アアメン。

第一二章

されば兄弟よ、われ神のもろもろの慈悲によりて汝らに勸む、己が

身を神の悦びたまふ潔き活ける供物として獻げよ、これ靈の祭なり。又この世に效ふな、神の御意の善にして悦ぶべく、かつ全きことを辨へ知らんために心を更へて新にせよ。

三 われ與へられし恩恵によりて、汝等おのおのに告ぐ、思ふべき所を超えて自己を高しとすな。神のおのおのに分ち給ひし信仰の量にしたがひ慎みて思ふべし。人は一つ體におほくの肢あれども、凡ての肢その運用を同じうせぬ如く、我らも多くあれど、キリストに在りて一つ體にして各人たがひに肢たるなり。六 われらが有てる賜物はおのおの與へられし恩恵によりて異なる故に、或は預言あらば信仰の量にしたがひて預言をなし、或は務あらば務をなし、或は教をなす者は教をなし、或は勸をなす者は勸をなし、施す者はをしみなく施し、治むる者は心を盡して治め、憐憫をなす者は喜びて憐憫をなすべし。愛には虚偽あらざれ、悪はにくみ、善はしたしみ、兄弟の愛をもて互に愛しみ、禮儀をもて相譲り、勤めて怠らず、心を熱くし、主につかへ、望みて喜び、患難にたへ、祈を恒にし、聖徒の缺乏を賑し、旅人を懇ろに待せ。汝らを責むる者を祝し、これを祝して詛ふな。喜ぶ者と共によろこび、泣く者と共になけ。相互に心を同じう

し、高ぶりたる思をなさず、反つて卑きに附け。なんぢら己を聴しと爲な。悪をもて惡に報いず、凡ての人のまへに善からんことを圖り、汝らの爲し得るかぎり力めて凡ての人と相和げ。愛する者よ、自ら復讐すな、ただ神の怒に任せまつれ。録して『主いひ給ふ、復讐するは我にあり我これを報いん』とあり。『もし汝の仇飢ゑなば之に食はせ、渴かば之に飲ませよ、なんぢ斯するは熱き火を彼の頭に積むなり』。惡に勝たるることなく、善をもて惡に勝て。

第一三章

一 凡ての人、上にある權威に服ふべし。それは神によらぬ權威なく、あらゆる權威は神によりて立てらる。この故に權威にさからふ者は神の定に悖るなり、悖る者は自らその審判を招かん。長たる者は善き業の懼にあらざ、惡き業の懼なり、なんぢ權威を懼れざらんとするか、善をなせ、然らば彼より譽を得ん。かれは汝を益せんための神の役者なり、然れど惡をなさば懼れよ、彼は徒らに劍をおびず、神の役者にして惡をなす者に怒をもて報ゆるなり。然れば服はざるべからず、誓に怒の爲のみならず、良心のためなり。また之がために汝ら貢を納む、彼らは神の仕人にして此の職に勵むなり。汝等その負債をおのおのに償へ、貢を受くべき者に貢ををさめ、税を受くべき者に税ををさめ、畏るべき者

をおそれ、尊ぶべき者をたふとべ。

汝等たがひに愛を負ふのほか何をも人に負ふな。人を愛する者は、律法を全うするなり。九 それ『姦淫する勿れ、殺すなかれ、盗むなかれ、貪るなかれ』と云へるこの他なほ誠命ありとも『おのれの如く隣を愛すべし』といふ言の中にみな籠るなり。一〇 愛は隣を害はず、この故に愛は律法の完全なり。

二 なんぢら時を知る故に、いよいよ然なすべし。今は眠より覺むべき時なり、始めて信ぜし時よりも今は我らの救近ければなり。三 夜ふけて日近づきぬ、然れば我ら暗黒の業をすてて光明の甲を著るべし。四 晝のごとく正しく歩みて宴樂・酔酒に、淫樂・好色に、争闘・嫉妬に歩むべきに非ず。ただ汝ら主イエス・キリストを衣よ、肉の慾のために備すな。

第一四章

一 なんぢら信仰の弱き者を容れよ、その思ふところを詰るな。二 或人は凡ての物を食ふを可しと信じ、弱き人はただ野菜を食ふ。三 食ふ者は食はぬ者を蔑すべからず、食はぬ者は食ふ者を審くべからず、神は彼を容れ給へばなり。四 なんぢ如何なる者なれば、他人の僕を審くか、彼が立つも倒るるも其の主人に由れり。彼は必ず立てられん、主は能く之を立たせ給ふべし。五 或人は此の

日を彼の日に勝ると思ひ、或人は凡ての日を等しとおもふ、各人おのが心の中に確く定むべし。六 日を重んずる者は主のために之を重んず。食ふ者は主のために食ふ、これ神に感謝すればなり。七 食はぬ者も主のために食はず、かつ神に感謝するなり。八 我等のうち己のために生ける者なく、己のために死ぬる者なし。九 われら生くるも主のために生き、死ぬるも主のために死ぬ。然れば生くるも死ぬるも我らは主の有なり。一〇 それキリストの死にて復生し給ひしは、死にたる者と生ける者との主とならん爲なり。一一 なんぢ何ぞその兄弟を審くか、汝なんぞ其の兄弟を蔑するか、我等はみな神の審判の座の前に立つべし。一二 録して、『主いひ給ふ、我は生くるなり、凡ての膝は、わが前に屈み、凡ての舌は、神を讚稱へん』とあり。一三 我等

一四 然れば今より後、われら互に審くべからず、寧ろ兄弟のまへに妨碍または躓物を置かぬやうに心を決めよ。一五 われ如何なる物も自ら潔からぬ事を主イエスに在りて知り、かつ確く信ず。ただ潔からずと思ふ人にもみ潔からぬなり。一六 し食物によりて兄弟を憂ひしめば、汝は愛によりて歩まざるなり、キリストの代りて死に給ひし人を汝の食物によりて亡すな。一七 汝らの善きことの譏られぬやうに爲

よ。一七 それ神の國は飲食にあらざ、義と平和と聖靈によれる歡喜とに在るなり。
 一八 斯してキリストに事ふる者は神に悦ばれ、人々に善しと爲らるるなり。然れば
 我ら平和のことに互に徳を建つる事とを追求むべし。二〇 なんぢ食物のために神の御
 業を毀つな。凡ての物は潔し、されど之を食ひて人を躓かする者には惡とならん。
 二一 肉を食はず、葡萄酒を飲まず、その他なんぢの兄弟を躓かする事をせぬは善し。
 二三 なんぢの有てる信仰を己みづから神の前に保て。善しとする所につきて自ら咎な
 き者は幸福なり。疑ひつつ食ふ者は罪せらる。これ信仰によらぬ故なり、凡て信
 仰によらぬ事は罪なり。

第一五章

一 われら強き者はおのれを喜ばせずして、力なき者の弱を負ふべし。
 二 おのおの隣人の徳を建てん爲に、その益を圖りて、之を喜ばすべ
 し。三 キリストだに己を喜ばせ給はざりき。録して『なんぢを誇る者の誇は我に及
 べり』とあるが如し。四 夙くより録されたる所は、みな我らの教訓のために録しし
 ものにして聖書の忍耐と慰安とによりて希望を保たせんとしてなり。五 願くは忍耐と
 慰安との神、なんぢらをしてキリスト・イエスに效ひ、互に思を同じうせしめ給は
 ん事を。六 これ汝らが心を一つにし口を一つにして我らの主イエス・キリストの父
 なる神を崇めん爲なり。

なる神を崇めん爲なり。
 七 此の故にキリスト汝らを容れ給ひしごとく、汝らも互に相容れて神の榮光を
 彰すべし。八 われ言ふ、キリストは神の眞理のために割禮の役者となり給へり。こ
 九 れ先祖たちの蒙りし約束を堅らし給はん爲、また異邦人も憐憫によりて神を崇め
 一〇 んためなり。録して、『この故に、われ異邦人の中にて汝を讃めたたへ、又なんぢ
 一〇 の名を謳はん』とあるが如し。また曰く、『異邦人よ、主の民とともに喜べ』
 一三 又
 一四 いはく、『もろもろの國人よ、主を讃め奉れ、もろもろの民よ、主を稱へ奉れ』
 一五 又
 一六 イザヤ言ふ、『エツサイの萌蘗生じ、異邦人を治むる者、興らん。異邦人は彼に望
 一七 をおかん』
 一八 願くは希望の神、信仰より出づる凡ての喜悦と平安とを汝らに満し
 一九 め、聖靈の能力によりて希望を豊ならしめ給はんことを。
 二〇 わが兄弟よ、われは汝らが自ら善に満ち、もろもろの知識に満ちて、互に訓
 二一 戒し得ることを確く信ず。然れど我なほ汝らに憶ひ出させん爲に、ここかしこ少
 二二 しく憚らずして書きたる所あり、これ神の我に賜ひたる恩恵に因る。即ち異邦人
 二三 のためにキリスト・イエスの仕人となり、神の福音につきて祭司の職をなす。これ
 二四 異邦人の聖靈によりて潔められ、御心に適ふ獻物とならん爲なり。然れば、われ

神の事につきては、キリスト・イエスによりて誇る所あり。一八
 我はキリストの異邦人を服はせん爲に我を用ひて言と業と、一九
 また徴と不思議との能力、および聖靈の能力にて働き給ひし事のほかは敢て語らず、エルサレムよりイルリコの地方に到るまで徧くキリストの福音を充たせり。二〇
 我は努めて他人の置ゑたる基礎のうへに建てじとて未だキリストの御名の稱へられぬ所にのみ福音を宣傳へたり。二一
 録して、『未だ彼のことを傳へられざりし者は見、いまだ聞かざりし者は悟るべし』とあるが如し。

三三 この故に、われ汝らに往かんと爲しが、しばしば妨げられたり。三三
 然れど今は此の地方に働くべき處なく、且なんぢらに往かんと多年、切に望みおたれば、二四
 イスパニヤに赴かんと立寄りて汝らを見、ほほ意に満つるを得てのち汝らに送られんことを望むなり。三五
 されど今、聖徒に事へん爲にエルサレムに往かんとす。二六
 マケドニヤとアカヤとの人々はエルサレムに在る聖徒の貧しき者に幾許かの施與をするを善しとせり。二七
 實に之を善しとせり、また聖徒に對して斯する負債あり。二八
 異邦人もし彼らの靈の物に與りたらんには、肉の物をもて彼らに事ふべきなり。二八
 されば此の事を成し了へ、この果を付してのち、汝らを歴てイスパニヤに往かん。

二九 われ汝らに到るときは、キリストの満ち足れる祝福をもて到らんことを知る。三〇
 兄弟よ、我らの主イエス・キリストにより、また御靈の愛によりて汝らに勧む、なんぢらの祈のうち、我とともに力を盡して我がために神に祈れ。三一
 これユダヤに在る從はぬ者の中より我が救はれ、又エルサレムに對する我が務の聖徒の心に適ひ、三二
 かつ神の御意により、歡喜をもて汝等にいたり、共に安んぜん爲なり。三三
 願くは平和の神なんぢら衆と偕に在さんことを、アアメン。

第一六章

一 我ケンクレヤの教會の執事なる我らの姉妹フィベを汝らに薦む。二
 なんぢら主に在りて聖徒たるに相應しく、彼を容れ、何にても其の要する所を助けよ、彼は夙くより多くの人の保護者また我が保護者たり。三
 プリスカとアクラとに安否を問へ、彼らはキリスト・イエスに在る我が同勞者にして、四
 わが生命のために己の首をも惜まざりき。彼らに感謝するは、ただ我のみならず、異邦人の諸教會もまた然り。五
 又その家にある教會にも安否を問へ。又わが愛するエパネトに安否を問へ、彼はアジヤにて結べるキリストの初の實なり。六
 汝等のために甚く勞せしマリヤに安否を問へ。七
 我とともに囚人たりし我が同族アンデロニコとユニアスとに安否を問へ、彼らは使徒たちの中に名聲あり、か

つ我に先だちてキリストに歸せし者なり。主にありて我が愛するアンブリアに安否を問へ。キリストにある我らの同勞者ウルバノと我が愛するスタキストに安否を問へ。キリストに在りて鍊達せるアペレに安否を問へ。アリストプロの家の者に安否を問へ。わが同族へロデオンに安否を問へ。ナルキノの家なる主に在る者に安否を問へ。主に在りて勞せしツルバナとツルポサとに安否を問へ、主にありて甚く勞せし愛するペルシスに安否を問へ。主に在りて選ばれたるルポスと其の母とに安否を問へ、彼の母は我にもまた母なり。アスンクリト、フレゴン、ヘルメス、パトロバ、ヘルマス及び彼らと偕に在る兄弟たちに安否を問へ。ピロロゴ、及びユリヤ、ネレオ及びその姉妹、またオルンバ及び彼らと偕に在る凡ての聖徒に安否を問へ。潔き接吻をもて互に安否を問へ、キリストの諸教會みな汝らに安否を問ふ。

兄弟よ、われ汝らに勸む、おほよそ汝らの學びし教に背きて分離を生じ、顛蹟をおこす者に心して之に遠かれ。斯る者は我らの主キリストに事へず、反つて己が腹に事へ、また甘き言と媚諂とをもて質朴なる人の心を欺くなり。汝らの從順は凡ての人に聞えたれば、我なんぢらの爲に喜べり。而して我が欲する所は

汝らが善に智く、惡に疎からんことなり。平和の神は速かにサタンを汝らの足の下に碎き給ふべし。

願くは我らの主イエスの恩恵、なんぢらと偕に在らんことを。
 一 二 一 わが同勞者テモテ及び我が同族ルキヨ、ヤソン、ソシパテロ汝らに安否を問ふ。
 一 三 二 この書を書ける我テルテオも主にありて汝らに安否を問ふ。我と全教會との家主ガイオ汝らに安否を問ふ。町の庫司エラストと兄弟クワルトと汝らに安否を問ふ。
 一 三 三 願くは長き世のあひだ隠れたれども、今顯れて、永遠の神の命にしたがひ、預言者たちの書によりて信仰の從順を得しめん爲に、もろもろの國人に示されたる奧義の黙示に循へる我が福音と、イエス・キリストを宣ぶる事とによりて、汝らを堅うし得る、唯一の智き神に榮光、世々限りなくイエス・キリストに由りて在らんことを、アアメン。

コリント人への前の書

第一章

神の御意により召されてイエス・キリストの使徒となれるパウロ及

び兄弟ソステネ、書を、コリントに在る神の教會、即ちいづれの處にありても、
 我らの主、ただに我等のみならず彼らの主なるイエス・キリストの名を呼求むる者
 とともに聖徒となるべき召を蒙り、キリスト・イエスに在りて潔められたる汝らに
 贈る。願くは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜ふ恩恵と平安と汝
 らに在らんことを。

われ汝らがキリスト・イエスに在りて神より賜はりし恩恵に就きて常に神に
 感謝す。汝らはキリストに在りて、諸般のこと即ち凡ての言と凡ての悟とに富み
 たればなり。これキリストの證、なんぢらの中に堅うせられたるに因る。斯く
 汝らは凡ての賜物に缺くる所なくして我らの主イエス・キリストの現れ給ふを待て
 り。彼は汝らを終まで堅うして我らの主イエス・キリストの日に責むべき所なか
 らしめ給はん。汝らを召して其の子われらの主イエス・キリストの交際に入らし
 め給ふ神は眞實なる哉。

兄弟よ、我らの主イエス・キリストの名に頼りて汝らに勸む、おのおの語る
 ところを同じうし、分争する事なく同じ心、おなじ念にて全く一つになるべし。
 わが兄弟よ、クロエの家の者、なんぢらの中に紛争あることを我に知らせたり。

即ち汝等おのおの『我はパウロに屬す』『我はアポロに』『我はケバに』『我は
 キリストに』と言ふこれなり。キリストは分たる者ならんや、パウロは汝らの
 爲に十字架につけられしや、汝らパウロの名に頼りてバプテスマを受けしや。我
 は感謝す、クリスポとガイオとの他には、我なんぢらの中の一人にもバプテスマを
 施さざりしを。是わが名に頼りて汝らがバプテスマを受けしと人の言ふ事なから
 ん爲なり。またステパノの家族にバプテスマを施しし事あり、此の他には我バプ
 テスマを施しし事ありや知らざるなり。そはキリストの我を遣し給へるはバプテ
 スマを施させん爲にあらず、福音を宣傳へしめんとしてなり。而して言の智慧をもつ
 てせず、是キリストの十字架の虚しくならざらん爲なり。

それ十字架の言は亡ぶる者には愚なれど、救はるる我らには神の能力なり。
 録して、『われ智者の智慧をほろぼし、慧き者の慧を空しうせん』とあればなり。
 智者いづくにか在る、學者いづくにか在る、この世の論者いづくにか在る、神は
 世の智慧をして愚ならしめ給へるにあらずや。世は己の智慧をもて神を知らず
 (これ神の智慧に適へるなり)この故に神は宣教の愚をもて、信ずる者を救ふを善
 しと爲給へり。ユダヤ人は徴を請ひ、ギリシヤ人は智慧を求む。されど我らは

十字架に釘けられ給ひしキリストを宣傳ふ。これはユダヤ人に蹟物となり、異邦人に愚となれど、召されたる者にはユダヤ人にもギリシヤ人にも神の能力、また神の智慧たるキリストなり。神の愚は人よりも智く、神の弱は人よりも強ければなり。

兄弟よ、召を蒙れる汝らを見よ、肉によれる智き者おほからず、能力ある者おほからず、貴きもの多からず。されど神は智き者を辱かしめんとて世の愚なる者を選び、強き者を辱かしめんとて弱き者を選び、有る者を亡さんとて世の卑しきもの、輕んぜらるる者、すなはち無きが如き者を選び給へり。これ神の前に人の誇る事なからん爲なり。汝らは神に頼りてキリスト・イエスに在り、彼は神に立てられて汝らの智慧と義と聖と救贖とに爲り給へり。これ『誇る者は主に頼りて誇るべし』と録されたる如くならん爲なり。

第二章

兄弟よ、われ曩に汝らに到りしとき、神の證を傳ふるに言と智慧との優れたるを用ひざりき。イエス・キリスト及びその十字架に釘けられ給ひし事のほかは、汝らの中にありて何をも知るまじと心を定めたればなり。我なんぢらと偕に居りし時に弱く、かつ懼れ、甚く戦けり。わが談話も、宣教

も、智慧の美しき言によらずして、御靈と能力との證明によりたり。これ汝らの信仰の、人の智慧によらず、神の能力に頼らん爲なり。

然れど我らは成人したる者の中にて智慧を語る。これ此の世の智慧にあらず、又この世の廢らんとする司たちの智慧にあらず、我らは奥義を解きて神の智慧を語る、即ち隠れたる智慧にして神われらの光榮のために世の創の先より預じめ定め給ひしものなり。この世の司には之を知る者なかりき、もし知らば榮光の主を十字架に釘けざりしならん。録して、『神のおのれを愛する者のために備へ給ひし事は、眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心いまだ思はざりし所なり』と有るが如し。然れど我らには神これを御靈によりて顯し給へり。御靈は、すべての事を究め、神の深き所まで究むればなり。それ人のことは己が中にある靈のほか誰か知る人あらん、斯のごとく神のことは神の御靈のほかに知る者なし。我らの受けし靈は世の靈にあらず、神より出づる靈なり、是われらに神の賜ひしものを知らんためなり。又われら之を語るに人の智慧の教ふる言を用ひず、御靈の教ふる言を用ふ、即ち靈の事に靈の言を當つるなり。性來のままなる人は神の御靈の事を受けて、彼には愚なる者と見ゆればなり。また之を悟ること能はず、御靈の

ことは靈によりて辨ふべき者なるが故なり。一五
 をわきまふ、而して己は人に辨へらるる事なし。一六
 者あらんや。然れど我らはキリストの心を有てり。誰か主の心を知りて主を教ふる

第三章

兄弟よ、われ靈に屬する者に對する如く汝らに語ること能はず、反
 つて肉に屬するもの、即ちキリストに在る幼兒に對する如く語れり。
 二 われ汝らに乳のみ飲ませて堅き食物を與へざりき。汝等そのとき食ふこと能はず
 三 今もなほ食ふこと能はず、今もなほ肉に屬する者なればなり。汝ら
 四 の中に嫉妬と紛争とあるは、これ肉に屬する者にして世の人の如くに歩むならざ
 五 や。或者は『われパウロに屬す』といひ、或者は『われアポロに屬す』と言ふ、
 六 これ世の人の如くなるにあらずや。アポロは何者ぞ、パウロは何者ぞ、彼等はお
 七 のおの主の賜ふところに隨ひ、汝らをして信ぜしめたる役者に過ぎざるなり。我
 八 は種ゑ、アポロは水灌げり、されど育てたるは神なり。されば種うる者も、水灌
 九 ぐ者も數ふるに足らず、ただ尊きは育てたまふ神なり。種うる者も、水灌ぐ者も
 一〇 歸する所は一つなれど、各自おのが勞に隨ひて其の値を得べし。我らは神と共に
 一〇 働く者なり。汝らは神の畠なり、また神の建築物なり。

一〇 我は神の賜ひたる恩恵に隨ひて熟練なる建築師のごとく基を据ゑたり、而し
 一〇 他人の上に建つるなり。然れど如何にして建つべきか、おのおの心して爲す
 二〇 べし。既に置きたる基のほかは誰も据うるること能はず、この基は即ちイエス・キ
 三〇 リストなり。人もし此の基の上に金・銀・寶石・木・草・藁をもつて建てなば、
 四〇 各人の工は顯るべし、かの日これを明かにせん、かの日は火をもつて顯れ、その
 五〇 火おのおの工の如何を驗すべければなり。その建つる所の工、もし保たば値を
 六〇 得、もし其の工、焼けば損すべし。然れど己は火より脱れ出づる如くして救は
 七〇 れん。汝ら知らずや、汝らは神の宮にして神の御靈なんぢらの中に住み給ふを。
 八〇 人もし神の宮を毀たば神かれを毀ち給はん。それ神の宮は聖なり、汝らも亦かく
 九〇 の如し。

一八 誰も自ら欺くな、汝等のうち此の世にて自ら智しと思ふ者は、智くならんた
 一九 めに愚なる者となれ。そは此の世の智慧は神の前に愚なればなり。録して『彼は
 二〇 智者をその悪巧によりて捕へ給ふ』また『主は智者の念の虚しきを知り給ふ』と
 二一 あるが如し。さらば誰も人を誇とすな、萬の物は汝らの有なればなり。或はバ
 二二 ウロ、或はアポロ、或はケバ、或は世界、あるひは生、あるひは死、あるひは現在

のもの、或は未來のもの、皆なんぢらの有なり。 汝等はキリストの有、キリストは神のものなり。

第四章

人、宜しく我らをキリストの役者また神の奥義を掌どる家司のごとく思ふべし。 さて家司に求むべきは忠實ならん事なり。 我は汝らに審かれ、或は人の審判によりて審かるることを最小き事とし、また自らも己を審かず。 我みづから責むべき所あるを覚えねど、之に由りて義とせらるる事なければなり。 我を審きたまふ者は主なり。 然れば主の來り給ふまでは時に先だちて審判すな。 主は暗にある隠れたる事を明かにし、心の謀計をあらはし給はん。 その時のおの神より其の譽を得べし。

兄弟よ、われ汝等のために此等のことを我とアポロとの上に當てて言へり。

これ汝らが『録されたる所を踰ゆまじき』を我らの事によりて學び、この人をあげ、かの人を貶して誇らざらん爲なり。 汝をして人と異らしむる者は誰ぞ、なんぢの有てる物に何か受けぬ物あるか。 もし受けしならば、何ぞ受けぬごとく誇るか。 なんぢら既に飽き、既に富めり、我らを差措きて王となれり。 われ實に汝らが王たらんことを願ふ、われらも共に王たることを得んが爲なり。 我おもふ、神は

使徒たる我らを死に定められし者のごとく、後の者として見せ給へり。 實に我らは宇宙のもの、即ち御使にも、衆人にも、觀物にせられたるなり。 我等はキリストのために愚なる者となり、汝等はキリストに在りて慧き者となれり。 我らは弱く汝らは強し、汝らは尊く我らは卑し。 今の時にいたるまで我らは飢ゑ、渴き、また裸となり、また打たれ、定まれる住家なく、手づから働きて勞し、罵らるるときは祝し、責めらるるときは忍び、 譏らるるときは勸をなせり。 我らは今に至るまで世の塵芥のごとく、萬の物の垢のごとく爲られたり。

わが斯く書すは汝らを辱かしめんとにあらず、我が愛する子として訓戒せんためなり。 汝等にはキリストに於ける守役一萬ありとも、父は多くあることなし。 そはキリスト・イエスに在りて福音により汝らを生みたるは、我なればなり。

この故に汝らに勸む、我に效ふ者とならんことを。 之がために主にありて忠實なる我が愛子テモテを汝らに遣せり。 彼は我がキリストにありて行ふところ、即ち常に各地の教會に教ふる所を汝らに思ひ出さしむべし。 わが汝らに到ること無しとして誇る者あり。 されど主の御意ならば速かに汝等にいたり、誇る者の言にはあらで、その能力を知らんとす。 神の國は言にあらず、能力にあればなり。 汝

第五章

ら何を欲するか、われ答をもて到らんか、愛と柔和の心をもて到らんか。
 現に聞く所によれば、汝らの中に淫行ありと、而してその淫行は異邦人の中にもなき程にして、或人その父の妻を有てりと云ふ。斯てもなほ汝ら誇ることをなし、斯る行爲をなしし者の除かれんことを願ひて悲しまざるか。われ身は汝らを離れ居れども、心は偕に在りて其處に居ることく、斯ることを行ひし者を既に審きたり。即ち汝ら及び我が靈の、我らの主イエスの能力をもて偕に集らんとき、主イエスの名によりて、斯のごとき者をサタンに付さんとす、是の肉は亡されて、其の靈は主イエスの日に救はれん爲なり。汝らの誇は善からず、少しのパン種の、粉の團塊をみな膨れしむるを知らぬか。なんぢら新しき團塊とならんために舊きパン種を取り除け、汝らはパン種なき者なればなり。夫われらの過越の羔羊、即ちキリスト既に屠られ給へり。されば我らは舊きパン種を用ひず、また悪と邪曲とのパン種を用ひず、眞實と眞との種なしパンを用ひて祭を行ふべし。

われ前の書にて淫行の者と交るなと書き贈りしは、此の世の淫行の者、または貪欲のもの、奪ふ者、または偶像を拜む者と更に交るなと言ふにあらざ（もし

第六章

然せば世を離れざるを得ず。ただ兄弟と稱ふる者の中に或は淫行のもの或は貪欲のもの或は偶像を拜む者、あるひは罵るもの或は酒に酔ふもの或は奪ふ者あらば、斯る人と交ることなく、共に食する事だにすなどの意なり。外の者を審くことは我の干る所ならんや、汝らの審くは、ただ内の者ならずや。外にある者は神これを審き給ふ、かの悪しき者を汝らの中より退けよ。

汝等のうち互に事あるとき、之を聖徒の前に訴へずして正しからぬ者の前に訴ふることを敢てする者あらんや。汝ら知らぬか、聖徒は世を審くべき者なるを。世もし汝らに審かれんには、汝ら最小き事を審くに足らぬ者ならんや。なんぢら知らぬか、我らは御使を審くべき者なるを、況てこの世の事をや。然るに汝ら審くべき此の世の事のあるとき、教會にて輕しむる所の者を審判の座に坐らしむるか。わが斯く言ふは汝らを辱しめんとてなり。汝等のうちに兄弟の間のことを審き得る智きもの一人だになく、兄弟は兄弟を、而も不信者の前に訴ふるか。互に相訴ふるは既に當しく汝らの失態なり。何ゆゑ寧ろ不義を受けぬか、何ゆゑ寧ろ欺かれぬか。然るに汝ら不義をなし、詐欺をなし、兄弟にも之を爲す。汝ら知らぬか、正しからぬ者の神の國を嗣ぐことなきを。自ら欺く

な、淫行のもの、偶像を拜むもの、姦淫をなすもの、男娼となるもの、男色を行ふ者、^{一〇}盗するもの、貪欲のもの、酒に酔ふもの、罵るもの、奪ふ者などは、みな神の國を嗣ぐことなきなり。^二汝等のうち曩には斯のごとき者ありしかど、主イエス・キリストの名により、我らの神の御靈によりて、己を洗ひ、かつ潔められ、かつ義とせらるることを得たり。

^三一切のもの我に可からざるなし、然れど一切のもの益あるにあらず。一切のもの我に可からざるなし、然れど我は何物にも支配せられず。^{一三}食物は腹のため、腹は食物のためなり。然れど神は之をも彼をも亡し給はん。身は淫行をなさん爲にあらず、主の爲なり、主はまた身の爲なり。^{一四}神は既に主を魅へらせ給へり、又その能力をもて我等をも魅へらせ給はん。^{一五}汝らの身はキリストの肢體なるを知らぬか、然らばキリストの肢體をとりて遊女の肢體となすべきか、決して然すべからず。^{一六}遊女につく者は彼と一つ體となることを知らぬか『二人のもの一體となるべし』と言ひ給へり。^{一七}主につく者は之と一つ靈となるなり。^{一八}淫行を避けよ、人のかす罪はみな身の外にあり、されど淫行をなす者は己が身を犯すなり。^{一九}汝らの身はその内にある、神より受けたる聖靈の宮にして汝らは己の者にあらざるを知ら

ぬか。^{二〇}汝らは價をもて買はれたる者なり、然らばその身をもて神の榮光を顯せ。

第七章

汝らが我に書きおくりし事に就きては、男の女に觸れぬを善しとす。^二然れど淫行を免れんために、男はおのおの其の妻をもち、女はおのおの其の夫を有つべし。^三夫はその分を妻に盡し、妻もまた夫に然すべし。^四妻は己が身を支配する權をもたず、之をもつ者は夫なり。斯のごとく夫も己が身を支配する權を有たず、之を有つ者は妻なり。^五相共に拒むな、ただ祈に身を委ぬるため合意にて暫く相別れ、後また偕になるは善し。これ汝らが情の禁しがたきに乘じてサタンの誘ふことなからん爲なり。^六されど我が斯くいふは命ずるにあらず、許すなり。^七わが欲する所は、すべての人の我が如くならん事なり。然れど神より各自おのが賜物を受く、此は此のごとく、彼は彼のごとし。^八我は婚姻せぬ者および寡婦に言ふ。もし我が如くにして居らば、彼等のため善し。^九もし自ら制すること能はずば、婚姻すべし、婚姻するは胸の燃ゆるよりも勝ればなり。^{一〇}われ婚姻したる者に命ず（命ずる者は我にあらず主なり）妻は夫と別るべからず。^{一一}もし別るる事あらば、嫁がずして居るか、又は夫と和げ。夫もまた妻を去るべからず。^{一二}その外の人に我いふ（主の言ひ給ふにあらず）もし或る

兄弟に不信者なる妻ありて偕に居ることを可しとせば、之を去るな。一三 また女に不信者なる夫ありて偕に居ることを可しとせば、夫を去るな。一四 そは不信者なる夫は妻によりて潔くなり。不信者なる妻は夫によりて潔くなりたればなり。然なくば汝らの子供は潔からず、然れど今は潔き者なり。一五 不信者みづから離れ去らば、その離るるに任せよ。斯のごとき事あらば、兄弟または姉妹、もはや繋がるる所なし。神の汝らを召し給へるは平和を得させん爲なり。一六 妻よ、汝いかで夫を救ひ得るや否やを知らん。夫よ汝いかで妻を救ひ得るや否やを知らん。一七 唯おのおの主の分ち賜ふところ、神の召し給ふところに循ひて歩むべし。凡ての教會に我が命ずるは斯のごとし。一八 割禮ありて召されし者あらんか、その人、割禮を廢つべからず。割禮なくして召されし者あらんか、その人、割禮を受くべからず。一九 割禮を受くるも受けぬも數ふるに足らず、ただ貴きは神の誠命を守ることなり。二〇 おのおの召されし時の状に止るべし。二一 なんぢ奴隷にて召されたるか、之を思ひ煩ふな（もし釋さるることを得ばゆるされよ）二二 召されて主にある奴隷は、主につける自主の人なり。斯のごとく自主にして召されたる者は、キリストの奴隷なり。二三 なんぢ汝らは價をもて買はれたる者なり。人の奴隷となるな。二四 兄弟よ、おのおの召されし時の状に止りて

神と偕に居るべし。二五 處女のことにつきては主の命を受けず、然れど主の憐愍によりて忠實の者となりたれば、我が意見を告ぐべし。二六 われ思ふに、目前の患難のためには、人その在るが隨にて止るぞ善き。二七 なんぢ妻に繋がるる者なるか、釋くことを求むな。妻に繋かれぬ者なるか、妻を求むな。二八 たとひ妻を娶るとも罪を犯すにはあらず。處女もし嫁ぐとも罪を犯すにあらず。然れど斯る者はその身、苦難に遭はん、我なんぢらを苦難に遭はすに忍びず。二九 兄弟よ、われ之を言はん、時は縮れり。されば此よりのち妻を有てる者は有たぬが如く、泣く者は泣かぬが如く、喜ぶ者は喜ばぬが如く、買ふ者は有たぬが如く、三〇 世を用ふる者は用ひ盡さぬが如くすべし。此の世の状態は過行くべければなり。三一 わが欲する所は汝らが思ひ煩はざらん事なり。婚姻せぬ者は如何して主を喜ばせんと主のことを慮ばかり、三二 婚姻せし者は如何して妻を喜ばせんと世のことを慮ばかりて心を分つなり。三三 婚姻せぬ女と處女とは身も靈も潔くならんために主のことを慮ばかり、婚姻せし者は如何してその夫を喜ばせんと世のことを慮ばかりなり。三四 わが之を言ふは汝らを益せん爲にして汝らに絆を置かんとするにあらず、寧ろ汝らを宜しきに適はせ、餘念なく只管、主に

事へしめんとなり。人もし處女たる己が娘に對すること宜しきに適はずと思ひ、年の頃もまた過ぎんとし、かつ然せざるを得ずば、心のままに行ふべし。これ罪を犯すにあらず、婚姻せさすべし。されど人もし其の心を堅くし、止むを得ざる事もなく、又おのが心の隨になすを得て、その娘を留め置かんと心のうちに定めたらば、然するは善きなり。されば其の娘を嫁がする者の行爲は善し。されど之を嫁がせぬ者の行爲は更に善し。妻は夫の生ける間は繋がるるなり。然れど夫もし死なば、欲するままに嫁ぐ自由を得べし、ただ主にある者にのみ適くべし。然れど我が意見にては、その儘に止らば殊に幸福なり。我もまた神の御靈に感じたりと思ふ。

第八章

偶像の供物に就きては我等みな知識あることを知る。知識は人を誇らしめ、愛は徳を建つ。もし人みづから知れりと思はば、知るべき程の事をも知らぬなり。然れど人もし神を愛せば、その人、神に知られたるなり。偶像の供物を食ふことに就きては、我ら偶像の世になき者なるを知り、また唯一の神の外には神なきを知る。神と稱ふるもの、或は天に或は地にありて、多くの神、おほくの主あるが如くなれど、我らには父なる唯一の神あるのみ、萬物

これより出て、我らも亦これに歸す。また唯一の主イエス・キリストあるのみ、萬物これに由り、我らも亦これに由れり。然れど人もみな此の知識あるにあらず、或人は今もなほ偶像に慣れ、偶像の獻物として食する故に、その良心、弱くして汚さるるなり。我らを神の前に立たしむるものは食物にあらず。されば食するも益なく、食せざるも損なし。然れど心して汝らの有てる此の自由を弱き者の蹟物とな。人もし知識ある汝が偶像の宮にて食事するを見んに、その人弱きときは良心。そそのかされて偶像の獻物を食せざらんや。然らばキリストの代りて死に給ひし弱き兄弟は、汝の知識によりて亡ぶべし。斯のごとく汝ら兄弟に對して罪を犯し、その弱き良心を傷めしむるは、キリストに對して罪を犯すなり。この故に、もし食物わが兄弟を躓かせんには、兄弟を躓かせぬ爲に、我は何時までも肉を食はじ。

第九章
 我は自主の者ならずや、使徒にあらずや、我らの主イエスを見しに
 ならずとも汝らには使徒なり。汝らは主に在りて我が業ならずや、われ他の人には使徒
 三 われを審く者に對する我が辯明は斯のごとし。我らは飲食する權なきか。我
 らは他の使徒たち、主の兄弟たち及びケバのごとく姉妹たる妻を携ふる權なきか。

ただ我とバルナバとのみ工を止むる權なきか。誰か己の財にて兵卒を務むる者あらんや。誰か葡萄酒を作りてその果を食はぬ者あらんや。誰か群を牧ひてその乳を飲まぬ者あらんや。我ただ人の思にのみ由りて此等のことを言はんや、律法も亦かく言ふにあらずや。モーセの律法に「穀物を碾す牛には口籠を繋ぐべからず」と録したり。神は牛のために慮ばかり給へるか、また専ら我等のために之を言ひ給ひしか、然り我らのために録されたり。それ耕す者は望をもて耕し、穀物をこなす者は之に與る望をもて碾すべきなり。もし我ら靈の物を汝らに蒔きしならば、汝らの肉の物を刈り取るは過分ならんや。もし他の人なんぢらに對してこの權あらんには、況て我らをや。然れど我等はこの權を用ひざりき。唯キリストの福音に障碍なきやうに一切のことを忍ぶなり。なんぢら知らぬか、聖なる事を務むる者は宮のものを食し、祭壇に事ふる者は祭壇のものに與るを。斯のごとく主もまた福音を宣傳ふる者の福音によりて生活すべきことを定め給へり。されど我は此等のことを一つだに用ひし事なし、また自ら斯く爲られたために之を書き贈るにあらず、斯くせられんよりは寧ろ死ぬるを善しとすればなり。誰もわが誇を空しく爲ざるべし。われ福音を宣傳ふとも誇るべき所なし、已むを得ざるなり。もし福

音を宣傳へずば、我は禍害なるかな。若し、われ心より之をなさば報を得ん、たとひ心ならずとも我はその務を委ねられたり。然らば我が報は何ぞ、福音を宣傳ふるに、人をして費なく福音を得しめ、而も福音によりて我が有てる權を用ひ盡さぬこと是なり。われ凡ての人に對して自主の者なれど、更に多くの人を得んために、自ら凡ての人の奴隷となれり。我ユダヤ人にはユダヤ人の如くなれり、これユダヤ人を得んが爲なり。律法の下にある者には——律法の下に我はあらねど——律法の下にある者の如くなれり。これ律法の下にある者を得んが爲なり。律法なき者には——われ神に向ひて律法なきにあらず、反つてキリストの律法の下にあれど——律法なき者の如くなれり、これ律法なき者を得んが爲なり。弱き者には弱き者となれり、これ弱き者を得んためなり。我すべての人には凡ての人の狀に従へり、これ如何もして幾許かの人を救はんためなり。われ福音のために凡ての事をなす、これ我も共に福音に與らん爲なり。なんぢら知らぬか、馳場を走る者はみな走れども、褒美を得る者の、ただ一人なるを。汝らも得んために斯く走れ。すべて勝を争ふ者は何事をも節し慎む、彼らは朽つる冠冕を得んが爲なれど、我らは朽ちぬ冠冕を得んがために之をなすなり。斯く我が走るは目標なきが如きに

あらず、我が拳闘するは空を撃つが如きにあらず。わが體を打擲きて之を服従せしむ。恐らくは他人に宣傳へて自ら棄てらるる事あらん。

第一〇章

兄弟よ、我なんぢらが之を知らぬを好まず。即ち我らの先祖はみな雲の下にあり、みな海をとほり、みな雲と海とにてバプテスマを受

けてモーセにつけり。而して皆おなじく、靈なる食物を食し、みな同じく靈なる飲物を飲めり。これ彼らに隨ひし靈なる岩より飲みたるなり、その岩は即ちキリストなりき。然れど彼らのうち多くは神の御意に適はず、荒野にて亡されたり。

此等のことは我らの鑑にして彼らが貪りし如く惡を貪らざらん爲なり。彼らの

中の或者に效ひて偶像を拜する者となるな、即ち『民は坐して飲食し立ちて戯る』

と録されたり。又かれらの中の或者に效ひて我ら姦淫すべからず、姦淫を行ひし

もの一日に二萬三千人、死にたり。また彼等のうちの或者に效ひて我ら主を試む

べからず、主を試みしもの、蛇に亡されたり。又かれらの中の或者に效ひて咳く

な、咳きしもの、亡す者に亡されたり。彼らが遭へる此等のことは鑑となれり、

かつ末の世に遭へる我らの訓戒のために録されたり。然らば自ら立てりと思ふ者

は倒れぬやうに心せよ。汝らが遭ひし試煉は人の常ならぬはなし。神は眞實なれ

ば、汝らを耐へ忍ぶこと能はぬほどの試煉に遭はせ給はず。汝らが試煉を耐へ忍ぶ

ことを得んために之と共に遁るべき道を備へ給はん。

さらば我が愛する者よ、偶像を拜することを避けよ。われ慧き者に言ふと

とく言はん、我が言ふところを判断せよ。我らが祝ふところの祝の酒杯は、これ

キリストの血に與るにあらずや、我らが擧ぐ所のパンは、これキリストの體に與る

にあらずや。パンは一つなれば、多くの我らも一體なり、皆ともに一つのパンに

與るに因る。肉によるイスラエルを視よ、供物を食ふ者は祭壇に與るにあらず

や。然らば我が言ふところは何ぞ、偶像の供物はあるものと言ふか、また偶像は

あるものと言ふか。否われは言ふ、異邦人の供ふる物は神に供ふるにあらず、惡

鬼に供ふるなりと。我なんぢらが惡鬼と交るを欲せず。なんぢら主の酒杯と惡鬼

の酒杯とを兼飲むこと能はず。主の食卓と惡鬼の食卓とに兼與ること能はず。わ

れら主の妬を惹起さんとするか、我らは主よりも強き者ならんや。

一切のもの可からざるなし、然れど一切のもの益あるにあらず。一切のもの

可からざるなし、然れど一切のもの徳を建つるにあらず。各人おのが益を求むる

ことなく、人の益を求めよ。すべて市場にて賣る物は良心のために何をも問はず

して、食せよ。 二六 彼は地と之に満つる物とは主の物なればなり。 二七 もし不信者に招かれて往かんとせば、凡て汝らの前に置く物を良心のために何をも問はずして食せよ。 二八 人もし此は犠牲にせし肉なりと言はば告げし者のため、また良心のために食すな。 二九 良心とは汝の良心にあらず、かの人の良心を言ふなり。何ぞ、わが自由を他の人の良心によりて審かるる事をせん。 三〇 もし感謝して食する事をせば、何ぞ、わが感謝する所のものに就きて譏らるる事をせん。 三一 さらば食ふにも飲むにも何事をなすにも、凡て神の榮光を顯すやうに爲よ。 三二 ユダヤ人にもギリシヤ人にも、また神の教會にも躓物となるな。 三三 我も凡ての事を、すべての人の心に適ふやうに力め、人々の救はれんために、己の益を求めずして多くの人の益を求むるなり。

第一一章 三四 我がキリストに效ふ者なる如く、なんぢら我に效ふ者となれ。 三五 汝らは凡ての事につきて我を憶え、且わが傳へし所をそのまま守るに因りて、我なんぢらを譽む。 三六 されど我なんぢらが之を知らんことを願ふ。凡ての男の頭はキリストなり、女の頭は男なり、キリストの頭は神なり。 三七 すべて男は祈をなし、預言をなすとき、頭に物を被るは其の頭を辱しむるなり。 三八 すべて女は祈をなし、預言をなすとき頭に物を被らぬは、其の頭を辱しむるなり。 三九 此れ薙髮と

異なる事なし。 四〇 女もし物を被らずば、髪をも剪るべし。 四一 然れど髪を剪り、或は薙ることを女の恥とせば物を被るべし。 四二 男は神の像、神の榮光なれば、頭に物を被るべきにあらず、然れど女は男の榮光なり。 四三 男は女より出でずして、女は男より出で、男は女のために造られずして、女は男のために造られたればなり。 四四 この故に女は御使たちの故によりて頭に權の徽を戴くべきなり。 四五 されど主に在りては、女は男に由らざるなく、男は女に由らざるなし。 四六 女の男より出でしごとく、男は女によりて出づ。 四七 而して萬物はみな神より出づるなり。 四八 汝等みづから判断せよ、女の物を被らずして神に祈るは宜しき事なるか。 四九 なんぢら自然に知るにあらずや、男もし長き髪を被らば、恥づべきことにして、女もし長き髪を被らば、その榮光なるを。 五〇 それ女の髪は、被物として賜はりたるなり。 五一 假令これを抗辯ふ者ありとも斯のごとき例は我らにも神の諸教會にもある事なし。 五二 我これらの事を命じて汝らを譽めず。 五三 汝らの集ること、益を受けずして損を招けばなり。 五四 先づ汝らが教會に集るとき分争ありと聞く、われ畧ぼこれを信ず。 五五 それは汝等のうちに是とせらるべき者の現はれんために黨派も必ず起るべければなり。 五六 なんぢら一處に集るとき主の晚餐を食すること能はず。 五七 食する時、おの

おの^ひ人に先^{さき}だちて己^{おのれ}の晩餐^{ばんさん}を食^{しょく}するにより、饑^ううる者^{もの}あり、醉^あ飽^あける者^{もの}あればな
 り。^{三三} 汝^{なんぢ}ら飲食^{のんじき}すべき家^{いへ}なきか、神^{かみ}の教^{けう}會^{かい}を輕^{かろ}んじ、また乏^さしき者^{もの}を辱^{はづ}しめんとす
 るか、我^{われ}なにを言^いふべきか、汝^{なんぢ}らを譽^ほむべきか、之^{これ}に就^つきては譽^ほめぬなり。^{三三} わが
 汝^{なんぢ}らに傳^{つた}へしことは主^{しゆ}より授^{さづ}けられたるなり。即^{すなは}ち主^{しゆ}イエス付^つされ給^{たま}ふ夜^よ、パンを
 取^とり、^{三四} 祝^{しゆく}して之^{これ}を擘^さき、而^{しか}して言^いひ給^{たま}ふ『これは汝^{なんぢ}等^らのため我^{われ}が體^{からだ}なり。我^{われ}が
 記念^{きねん}として之^{これ}を行^{おこな}へ』^{三五} 夕餐^{ゆふけ}のち酒杯^{さかづき}をも前^{まへ}の如^{ごと}くして言^いひたまふ『この酒杯^{さかづき}は
 我^{われ}が血^ちによれる新^{あら}しき契^{けい}約^{やく}なり。飲^のむごとに我^{われ}が記念^{きねん}として之^{これ}をおこなへ』^{二六} 汝^{なんぢ}等^ら
 このパンを食^{しょく}し、この酒杯^{さかづき}を飲^のむごとに、主^{しゆ}の死^しを示^{しめ}して其^その來^{きた}りたまふ時^{とき}にまで
 及^{およ}ぶなり。^{二七} 然^{しか}れば宜^{よろ}しきに適^{かな}はずして主^{しゆ}のパンを食^{しょく}し、主^{しゆ}の酒杯^{さかづき}を飲^のむ者は、主^{しゆ}
 の體^{からだ}と血^ちとを犯^{をか}すなり。^{二八} 人^{ひと}みづから省^{かへり}みて後^{のち}、そのパンを食^{しょく}し、その酒杯^{さかづき}を飲^のむ
 べし。^{二九} 御^み體^{からだ}を辨^わきまへずして飲^のむ者は、その飲^のむによりて自^{みづか}ら審^さ判^{はん}を招^{まね}くべけれ
 ばなり。^{三〇} この故^{ゆゑ}に汝^{なんぢ}等^らのうち弱^{よわ}きもの、病^やめるもの多^{おほ}くあり、また眠^{ねむり}に就^つきた
 る者^{もの}も少^{すくな}からず。^{三一} 我^{われ}等^らもし自^{みづか}ら己^{おのれ}を辨^わきまへなば審^さ判^{はん}かるる事^{こと}なからん。^{三二} されど審^さ判^{はん}
 する事^{こと}のあるは、我^{われ}らを世^よの人^{ひと}とともに罪^{つみ}に定^{さだ}めじとて主^{しゆ}の懲^{こら}しめ給^{たま}ふなり。^{三三} こ
 の故^{ゆゑ}に、わが兄^{きやうだい}弟^{たい}よ、食^{しょく}せんとして集^{あつ}まるときは互^{たがひ}に待^{まち}合^あせよ。^{三四} もし飢^ううる者^{もの}あら

ば、汝^{なんぢ}らの集^{あつ}まりの審^さ判^{はん}を招^{まね}くこと無^なからん爲^{ため}に己^{おのれ}が家^{いへ}にて食^{しょく}すべし。^{三五} その他^{ほか}のこ
 とは我^{われ}いたらん時^{とき}これを定^{さだ}めん。

第一二章

兄弟^{きやうだい}よ、靈^{れい}の賜^{たま}物^{もの}に就^つきては、我^{われ}なんぢらが知^しらぬを好^{この}まず。^一 な
 んぢら異^い邦^{ぱうじん}人^{じん}なりしとき、誘^{いざな}はるるままに物^{もの}を言^いはぬ偶^{ぐう}像^{ざう}のもとに導^{みちび}
 き往^ゆかれしは、汝^{なんぢ}らの知^しる所^{ところ}なり。^二 然^{しか}れば我^{われ}なんぢらに示^{しめ}さん、神^{かみ}の御^み靈^{たま}に感^{かん}じ
 て語^{かた}る者^{もの}は誰^{だれ}も『イエスは誑^{のろ}はるべき者^{もの}なり』と言^いはず、また聖^{せい}靈^{れい}に感^{かん}ぜざれば、
 誰^{だれ}も『イエスは主^{しゆ}なり』と言^いふ能^{あた}はず。^四 賜^{たま}物^{もの}は殊^{こと}なれども、御^み靈^{たま}は同^{おな}じ。^五 務^{つと}め
 殊^{こと}なれども、主^{しゆ}は同^{おな}じ。^六 活^{はたら}きは殊^{こと}なれども、凡^{すべ}ての人^{ひと}のうち凡^{すべ}ての活^{はたら}きを爲^なし
 たまふ神^{かみ}は同^{おな}じ。^七 御^み靈^{たま}の顯^{あら}現^はれをおののに賜^{たま}ひたるは、益^{えき}を得^えさせんためなり。^八
 或^{ある}人は御^み靈^{たま}によりて知^ち慧^{えい}の言^{ことば}を賜^{たま}ひ、或^{ある}人は同^{おな}じ御^み靈^{たま}によりて知^ち識^{しき}の言^{ことば}、^九 或^{ある}人^{ひと}
 は同^{おな}じ御^み靈^{たま}によりて信^{しん}仰^{かう}、ある人^{ひと}は一^{ひと}つ御^み靈^{たま}によりて病^{やまひ}を醫^いす賜^{たま}物^{もの}、^{一〇} 或^{ある}人は異^い能^{ちから}
 ある業^{わざ}、ある人^{ひと}は預^よ言^{げん}、ある人^{ひと}は靈^{れい}を辨^わきまへ、或^{ある}人は異^い言^{げん}を言^いひ、或^{ある}人は異^い言^{げん}を釋^さく
 能力^{ちから}を賜^{たま}はる。^{一二} 凡^{すべ}て此^{これ}等^らのこは同^{おな}じ一^{ひと}つ御^み靈^{たま}の活^{はたら}きにして、御^み靈^{たま}その心^{こころ}に隨^{したが}
 ひて各^{おの}人に分^{わけ}與^{あた}へたまふなり。^{一二}
 體^{からだ}は一^{ひと}つにして肢^{えだ}は多^{おほ}し、體^{からだ}の肢^{えだ}は多^{おほ}くとも一^{ひと}つ體^{からだ}なるが如^{ごと}く、キリス

も亦然り。一三 我らはユダヤ人・ギリシヤ人・奴隸・自主の別なく、一體とならん爲に、みな一つ御靈にてバプテスマを受けたり。而して、みな一つ御靈を飲めり。一四 體は一枝より成らず、多くの肢より成るなり。一五 足もし「我は手にあらぬ故に體に屬せず」と云ふとも、之によりて體に屬せぬにあらず。一六 耳もし「われは眼にあらぬ故に體に屬せず」と云ふとも、之によりて體に屬せぬにあらず。一七 もし全身、眼ならば、聴くところ何れか。もし全身、聴く所ならば、臭ぐところ何れか。一八 げに神は御意のままに、肢をおのおの體に置き給へり。一九 若しみな一枝ならば、體は何れか。二〇 げに肢は多くあれど、體は一つなり。二一 眼は手に對ひて「われ汝を要せず」と言ひ、頭は足に對ひて「われ汝を要せず」と言ふこと能はず。二二 否、からだの中にて最も弱しと見ゆる肢は、反つて必要なり。二三 體のうちにて尊からずと思はるる所に、物を纏ひて殊に之を尊ぶ。斯く我らの美しからぬ所は、一層すぐれて美しくすれども、二四 美しき所には、物を纏ふの要なし、神は劣れる所に殊に尊榮を加へて人の體を調和したまへり。二五 これ體のうちに分争なく、肢々一致して、互に相顧みんためなり。二六 もし一つの肢苦しまば、もろもろの肢ともに苦しむ、一つの肢尊ばれなば、もろもろの肢ともに喜ぶなり。二七 乃ち汝らはキリストの體にして各自

その肢なり。二八 神は第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、その次に異能ある業、次に病を醫す賜物、補助をなす者、治むる者、異言などを教會に置きたまへり。二九 是みな使徒ならんや、みな預言者ならんや、みな教師ならんや、みな異能ある業を行ふ者ならんや、みな病を醫す賜物を有てる者ならんや、みな異言を語る者ならんや、みな異言を釋く者ならんや。三一 なんぢら優れたる賜物を慕へ、而して我さらに善き道を示さん。

第一三章

一 たとひ我もろもろの國人の言および御使の言を語るとも、愛なくば鳴る鐘や響く鏡鍔の如し。二 假令われ預言する能力あり、又すべての奥義と凡ての知識とに達し、また山を移すほどの大なる信仰ありとも、愛なくば數ふるに足らず。三 たとひ我わが財産をことごとく施し、又わが體を焼かる爲に付すとも、愛なくば我に益なし。四 愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は誇らず、驕らず、五 非禮を行はず、己の利を求めず、憤ほらず、人の惡を念はず、不義を喜ばずして、眞理の喜ぶところを喜び、七 凡そ事忍び、おほよそ事信じ、おほよそ事望み、おほよそ事耐ふるなり。八 愛は長久までも絶ゆることなし。然れど預言は廢れ、異言は止み、知識もまた廢らん。九 それ我らの知るところ全からず、我

らの預言も全からず、^{一〇}全き者の來らん時は全からぬもの廢らん。^二われ童子の時は語ることも童子のごとく、思ふことも童子の如く、論ずる事も童子の如くなりしが、人と成りては童子のことを棄てたり。^三今われらは鏡をもて見るごとく見るところ臙なり。然れど、かの時には我が知られたる如く全く知るべし。^四今わが知るところ全からず、然れど、かの時には我が知られたる如く全く知るべし。^五げに信仰と希望と愛と此の三つの者は限りなく存らん、而して其のうち最も大なるは愛なり。

第一四章

愛を追ひ求めよ、また靈の賜物、ことに預言する能力を慕へ。^一異言を語る者は人に語るにあらずして神に語るなり。そは靈にて奧義を語るとも、誰も悟る者なければなり。^二されど預言する者は人に語りて其の徳を建て、勸をなし、慰安を與ふるなり。^三異言を語る者は己の徳を建て、預言する者は教會の徳を建つ。^四われ汝等がみな異言を語らんことを欲すれど、殊に欲するは預言せん事なり。異言を語る者、もし釋きて教會の徳を建つるにあらずば、預言する者のかた勝るなり。^五然らば兄弟よ、我もし汝らに到りて異言をかたり、或は默示、あるひは知識、あるひは預言、あるひは教をもて語らずば、何の益かあらん。^六生命なくして聲を出すもの、或は笛、あるひは立琴、その音もし差別なくば、争

で吹くところ、弾くところの何たるを知らん。^七ラツパ若し定まりなき音を出さば、誰か戦鬪の備をなさん。^八斯のごとく汝らも舌をもて明かなる言を出さずば、争て語るところの何たるを知らん、これ汝等ただ空氣に語るのみ。^九世には國語の類おほかれど、一つとして意義あらぬはなし。^{一〇}我もし國語の意義を知らずば、語る者に對して夷人となり、語る者も我に對して夷人とならん。^{一一}然らば汝らも靈の賜物を慕ふ者なれば、教會の徳を建つる目的にて賜物の豊ならん事を求めよ。^{一二}この故に異言を語る者は自ら釋き得んことをも祈るべし。^{一三}我もし異言をもて祈らば、我が靈は祈るなれど、我が心は果を結ばず。^{一四}然らば如何にすべきか、我が靈をもて祈り、また心をもて祈らん。我は靈をもて謳ひ、また心をもて謳はん。^{一五}汝もし然せずば靈をもて祝するとき、凡人は汝の語ること知らねば、その感謝に對し如何にしてアアメンと言はんや。^{一六}なんぢの感謝はよし、然れど、その人の徳を建つることなし。^{一七}我なんぢら衆の者よりも多く異言を語ること神に感謝す。^{一八}然れど我は教會にて異言をもて一萬言を語るよりも、寧ろ人を教へんために我が心をもて五言を語らんことを欲するなり。^{一九}

兄弟よ、智慧に於ては子供となるな。惡に於ては幼兒となり、智慧に於ては

成人となれ。三二 律法に録して『主、宣給はく、他し言の民により、他し國人の口唇をもて此の民に語らん、然れど尙かれらは我に聴かじ』とあり。三三 されば異言は、信者の爲ならず不信者のための徴なり。預言は、不信者の爲ならず信者のためなり。三三 もし全教會一處に集れる時、みな異言にて語らば、凡人または不信者いり來らんに、汝らを狂へる者と言はざらんや。二四 然れど若しみな預言せば、不信者または凡人の入りきたるとき、會衆のために自ら責められ、會衆のために是非せられ、三五 その心の秘密あらはるる故に伏して神を拜し『神は實に汝らの中に在す』と言はん。

兄弟よ、さらば如何にすべきか、汝らの集る時はおのおの聖歌あり、教あり、黙示あり、異言あり、釋く能力あり、みな徳を建てん爲にすべし。二七 もし異言を語る者あらば、二人、多くとも三人、順次に語りて一人これを釋くべし。二八 もし釋く者なき時は教會にては黙し、而して己に語り、また神に語るべし。二九 預言者は二人もしくは三人かたり、その他の者はこれを辨ふべし。三〇 もし坐しをる、他のもの黙示を蒙らば、先のもの黙すべし。三一 汝らは皆すべての人に學ばせ、勸を受けしめんために一人一人、預言することを得べければなり。三二 また預言者の靈は預言者

に制せらる。三三 それ神は亂の神にあらず、平和の神なり。

聖徒の諸教會のすることく、女は教會にて黙すべし、彼らは語ることを許されず、律法に云へることく順ふべき者なり。三五 何事か學ばんとする事あらば、家にて己が夫に問ふべし、女の教會にて語るは恥づべき事なればなり。三六 神の言は汝等より出でしか、また汝等にのみ來りしか。

人もし自己を預言者とし、或は御靈に感したる者と思はば、わが汝らに書きおくる言を主の命なりと知れ、三八 もし知らずば其の知らざるに任せよ。三九 されば我が兄弟よ、預言することを慕ひ、また異言を語ることを禁ずな。

四〇 凡ての事、宜しきに適ひ、かつ秩序を守りて行へ。

第一五章

兄弟よ、曩にわが傳へし福音を更に復なんぢらに示す。汝らは之を受け、之に頼りて立ちたり。二 なんぢら徒らに信ぜずして我が傳へし

ままを堅く守らば、この福音に由りて救はれん。三 わが第一に汝らに傳へしは、我が受けし所にしてキリスト聖書に應じて我らの罪のために死に、四 また葬られ、聖書に應じて三日めに甦へり、五 ケバに現れ、後に十二弟子に現れ給ひし事なり。六 次に五百人以上の兄弟に同時にあらはれ給へり。その中には既に眠りたる者もあ

れど、多くは今なほ世にあり。次にヤコブに現れ、次にすべての使徒に現れ、
 最終には月足らぬ者のごとき我にも現れ給へり。我は神の教會を迫害したれ
 ば、使徒と稱へらるるに足らぬ者にて使徒のうち最小き者なり。然るに我が今の
 如くなるは、神の恩恵に由るなり。斯てその賜はりし御恵は空しくならずして、凡
 ての使徒よりも我は多く働けり。これ我にあらず、我と偕にある神の恩恵なり。
 二 されば我にもせよ、彼等にもせよ、宣傳ふる所は斯の如くにして、汝らは斯のご
 とく信じたるなり。

キリストは死人の中より甦へり給へりと宣傳ふるに、汝等のうちに、死人の
 復活なしと云ふ者のあるは何ぞや。もし死人の復活なくば、キリストも、また甦
 へり給はざりしならん。もしキリスト甦へり給はざりしならば、我らの宣教も空
 しく、汝らの信仰もまた空しからん、かつ我らは神の偽證人と認められん。我ら
 神はキリストを甦へらせ給へりと證したればなり。もし死人の甦へることなくば、
 神はキリストを甦へらせ給はざりしならん。もし死人の甦へる事なくば、キリス
 トも甦へり給はざりしならん。若しキリスト甦へり給はざりしならば、汝らの信
 仰は空しく、汝等なほ罪に居らん。然ればキリストに在りて眠りたる者も亡びし

ならん。我等この世にあり、キリストに頼りて空しき望を懐くに過ぎずば、我ら
 は凡ての人の中に最も憫むべき者なり。
 二〇 然れど正しくキリストは死人の中より甦へり、眠りたる者の初穂となり給へ
 り。それ人によりて死の來りし如く、死人の復活もまた人によりて來れり。凡
 ての人、アダムに由りて死ぬることく、凡ての人、キリストに由りて生くべし。
 二三 而して各人その順序に隨ふ。まづ初穂なるキリスト、次はその來り給ふときキリ
 ストに屬する者なり。次には終きたらん、その時キリストは、もろもろの權能・
 權威・權力を亡して國を父なる神に付し給ふべし。彼は凡ての敵をその足の下に
 置き給ふまで、王たらざるを得ざるなり。最終の敵なる死もまた亡されん。『神
 は萬の物を彼の足の下に服はせ給ひ』たればなり。萬の物を彼に服はせたりと宣給
 ふときは、萬の物を服はせ給ひし者の中になきこと明かなり。萬の物かれに
 服ふときは、子も亦みづから萬の物を己に服はせ給ひし者に服はん。これ神は萬の
 物に於て萬の事となり給はん爲なり。
 二九 もし復活なくば、死人の爲にバプテスマを受くるもの何をなすか、死人の甦
 へること全くなくば、死人のためにバプテスマを受くるは何の爲ぞ。また我らが

何時も危険を冒すは、何の爲ぞ。三二 兄弟よ、われらの主イエス・キリストに在りて、汝等につき我が有てる誇によりて誓ひ、我は日々死すと云ふ。三三 我がエペソにて獸と闘ひしこと若し人のごとき思にて爲ししならば、何の益あらんや。死人もし甦へる事なくば『我等いざ飲食せん、明日死ぬべければなり』三三 なんぢら欺かるな、悪しき交際は善き風儀を害ふなり。三四 なんぢら醒めて正しうせよ、罪を犯すな。汝等のうちに神を知らぬ者あり、我が斯く言ふは汝らを辱しめんとてなり。三五 然れど人あるひは言はん、死人いかにして甦へるべきか、如何なる體をもて來るべきかと。三六 愚なる者よ、なんぢの播く所のもの先づ死なずば生さず。三七 又その播く所のものは後に成るべき體を播くにあらず、麥にても、他の穀にても、ただ種粒のみ。三八 然るに神は御意に隨ひて之に體を予へ、おのおの種にその體を予へたまふ。三九 凡ての肉、おなじ肉にあらず、人の肉あり、獸の肉あり、鳥の肉あり、魚の肉あり。四〇 天上の體あり、地上の體あり、されど天上の物の光榮は地上の物と異なり。四一 日の光榮あり、月の光榮あり、星の光榮あり、此の星は彼の星と光榮を異にす。四二 死人の復活もまた斯のごとし。朽つる物にて播かれ、朽ちぬものに甦へらせられ、卑しき物にて播かれ、光榮あるものに甦へらせられ、弱きものにて播

かれ、強きものに甦へらせられ、血氣の體にて播かれ、靈の體に甦へらせられん。血氣の體ある如く、また靈の體あり。四三 録して始の人アダムは、活ける者となれりとあるが如し。而して終のアダムは、生命を與ふる靈となれり。四四 靈のものは前にあらず、反つて血氣のもの前にありて靈のもの後にあり。四五 第一の人は地より出でて土に屬し、第二の人は天より出でてたる者なり。四六 この土に屬する者に、すべて土に屬する者は似、この天に屬する者に、すべて天に屬する者は似るなり。四七 我ら土に屬する者の形を有てるごとく、天に屬する者の形をも有つべし。四五 兄弟よ、われ之を言はん、血肉は神の國を嗣ぐこと能はず、朽つるものは朽ちぬものを嗣ぐことなし。五一 視よ、われ汝らに奥義を告げん、我らは悉く眠るにはあらず、終のラツパの鳴らん時みな忽ち瞬間に化せん。ラツパ鳴りて死人は朽ちぬ者に甦へり、我らは化するなり。五二 是此の朽つる者は朽ちぬものを著、この死ぬる者は死なぬものを著るべければなり。五三 此の朽つるものは朽ちぬものを著、この死ぬる者は死なぬものを著るとき『死は勝に吞まれたり』と録されたる言は成就すべし。五五 『死よ、なんぢの勝は何處にかある。死よ、なんぢの刺は何處にかある』 死の刺は罪なり、罪の力は律法なり。五七 されど感謝すべきかな、神は我らの主イエス・

キリストによりて勝を興へたまふ。然れば我が愛する兄弟よ、確くして揺くことなく、常に勵みて主の事を務めよ、汝等その勞の、主にありて空しからぬを知らばなり。

第一六章

一 聖徒たちの爲にする寄附の事に就きては、汝らも我がガラテヤの諸教會に命ぜしごとく爲よ。二 一週の首の日ごとに、各人その得る所に

したがひて己が家に貯へ置け、これ我が到らるとき始めて寄附を集むる事なからん爲なり。三 われ到らば、汝らが選ぶところの人々に添書をあたへ、汝らの恵む物を

エルサレムに携へ往かしめん。四 もし我も往くべきならば、彼らは我と共に往くべし。五 我マケドニヤを通らんとすれば、マケドニヤを過ぎて後に、汝らの許にゆか

ん。六 斯て汝らの中に留りて或は冬を過すこともあらん、是わが何處に往くも汝らに送られん爲なり。七 我は今なんぢらを途の次に見ることを欲せず、主ゆるし給

はば、暫く汝らと偕に留らんことを望む。八 われ五旬節まではエペソに留らんとす。九 そは活動のために大なる門、わが前にひらけ、また逆ふ者も多ければなり。

一〇 テモテもし到らば慎みて汝等のうちに懼なく居らしめよ、彼は我と同じく主の業を務むる者なり。一一 されば誰も之を卑むることなく、安らかに送りて我が許に

來らしめよ、我かれが兄弟たちと共に來るを待てるなり。一二 兄弟アポロに就きては我かれに兄弟たちと共に汝らに到らんことを懇ろに勧めたりしが、今は往くことを更に欲せず、然れど好き機を得ば往くべし。一三 目を覺し、堅く信仰に立ち、雄々しく、かつ剛かれ。一四 一切のこと愛をもて行へ。

一五 兄弟よ、ステパナの家はアカヤの初穂にして、彼らが身を委ねて聖徒に事へたることは、汝らの知る所なり。一六 われ汝らに勸む、斯のごとき人々また凡て之と

ともに働きて勞する者に服せよ。一七 我ステパナとポルトナトとアカイコとの來るを喜ぶ。かれらは汝らの居らぬを補ひたればなり。一八 彼らは我が心と汝らの心とを安

んじたり、斯のごとき者を認めよ。一九 ア ज्याの諸教會なんぢらに安否を問ふ。アクラとブリスカ及びその家の教

會、主に在りて懇ろに汝らに安否を問ふ。二〇 すべての兄弟なんぢらに安否を問ふ。なんぢら潔き接吻をもて互に安否を問へ。

二一 我パウロ自筆をもて汝らに安否を問ふ。二二 もし人、主を愛せずば詛はるべし、我らの主きたり給ふ。二三 願くは主イエスの恩恵、なんぢらと偕にあらんこと

を。二四 わが愛はキリスト・イエスに在りて汝等すべての者ととも在るなり。

コリント人への後の書

第一章

神の御心によりてイエス・キリストの使徒となれるパウロ及び兄弟
テモテ、書をコリントに在る神の教會ならびにアカヤ全國に在る凡て
の聖徒に贈る。願くは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜ふ恩恵と
平安と汝らに在らんことを。

讃むべき哉、われらの主イエス・キリストの父なる神、即ちもろもろの慈悲
の父、一切の慰安の神、われらを凡ての患難のうちに慰め、我等をして自ら神に
慰めらるる慰安をもて、諸般の患難に居る者を慰むることを得しめ給ふ。そはキ
リストの苦難われらに溢るる如く、我らの慰安も亦キリストによりて溢るればな
り。我ら或は患難を受くるも汝らの慰安と救とのため、或は慰安を受くるも汝ら
の慰安の爲にして、その慰安は汝らの中に働きて我らを受くる如き苦難を忍ぶこと

を得しむるなり。斯て汝らが苦難に與ることく、また慰安にも與ることを知れ
ば、汝らに對する我らの望は堅し。兄弟よ、我らがアジャにて遭ひし患難を汝ら
の知らざるを好まず、即ち壓せらるること甚だしく力耐へがたくして生くる望を失
ひ、心のうちに死を期するに至れり。これ己を頼まずして、死人を甦へらせ給ふ
神を頼まん爲なり。神は斯る死より我らを救ひ給へり、また救ひ給はん。我らは
後もなほ救ひ給はんことを望みて神を頼み、汝らも我らの爲に祈をもて助く。こ
れ多くの人の願望によりて賜る恩恵を多くの人の感謝するに至らん爲なり。

われら世に在りて殊に汝らに對し、神の清淨と眞實とをもて、また肉の智慧
によらず、神の恩恵によりて行ひし事は我らの良心の證する所にして、我らの誇な
り。我らの書き贈ることは、汝らの讀むところ知る所の他ならず。而して我は
汝等のうち或者の既に知れる如く、我らの主イエスの日に我らが汝らの誇、なんぢ
らが我らの誇たるを終まで知らんことを望む。
この確信をもて先づ汝らに到り、再び益を得させ、斯て汝らを経てマケド
ニヤに往き、マケドニヤより更に復なんぢらに到り、而して汝らに送られてユダヤ
に往かんことを定めたり。斯く定めたるは浮きたる事ならんや。わが定むるとこ

ろ肉によりて定め、然り然り、否々と言ふが如きこと有らんや。一八
 神は眞實にて在せば、我らが汝らに對する言も、然りまた否と言ふが如きにあらず。一九
 我ら即ちパウロ、シルワノ、テモテが汝らの中に傳へたる神の子キリスト・イエスは、然りまた否と言ふが如き者にあらず、然りと云ふことは彼によりて成りたるなり。二〇
 神の約束は多くありとも、然りと云ふことは彼によりて成りたれば、彼によりてアアメンあり、我ら神に榮光を歸するに至る。二一
 汝らと共に我らをキリストに堅くし、且われらに膏を注ぎ給ひし者は神なり。二三
 神はまた我らに印し、保證として御靈を我らの心に賜へり。二三

我わが靈魂を賭けて神の證を求む。我がコリントに往くことの遅きは、汝らを寛うせん爲なり。二四
 されど我らは汝らの信仰を掌どる者にあらず、汝らの喜悅を助くる者なり、汝らは信仰によりて立てばなり。

第二章

われ再び憂をもて汝らに到らじと自ら定めたり。二五
 我もし汝らを憂ひしめば、我が憂ひしむる者のほかに誰か我を喜ばせんや。二六
 われ前に此の事を書き贈りしは、我が到らんとき我を喜ばすべきもの、反つて我を憂ひしむる事のなからん爲にして、汝らは皆わが喜悅を喜悅とするを信ずるに因りてな

り。四
 われ大なる患難と心の悲哀とにより、多くの涙をもて汝らに書き贈れり。これ汝らを憂ひしめんとにあらず、我が汝らに對する愛の溢るるばかりなるを知らしめん爲なり。五

もし憂ひしむる人あらば我を憂ひしむるにあらず、幾許か汝ら衆を憂ひしむるなり。(幾許かと云へるは、われ激しく責むるを好まぬ故なり) 六
 斯る人の多數の者より受けたる懲罰は足れり、七
 されば汝ら寧ろ彼を恕し、かつ慰めよ、恐らくは其の人、甚だしき愁に沈まん。八
 この故に我なんぢらの愛を彼に顯さんことを勸む。九
 前に書き贈りしは、凡ての事につきて汝らが従順なりや否やをも試み知らん爲なり。一〇
 なんぢら何事にて人を恕さば我も亦これを恕さん、われ恕したる事あらば、汝らの爲にキリストの前に恕したるなり。一一
 これサタンに欺かれざらん爲なり、我等はその詭謀を知らざるにあらず。一二

我キリストの福音の爲にトロアスに到り、主われに門を開き給ひたれど、一三
 我が兄弟テトスに逢はぬによりて心に平安をえず、彼處の者に別を告げてマケドニヤに往けり。一四
 感謝すべきかな、神は何時にてもキリストにより、我らを執へて凱旋し何處にても我等によりて、キリストを知る知識の馨をあらはし給ふ。一五
 救は

るる者にも亡ぶる者にも、我らは神に對してキリストの香ばしき馨なり。一六 この人には死よりいづる馨となりて死に至らしめ、かの人には生命より出づる馨となりて生命に至らしむ。誰か此の任に耐へんや。一七 我らは多くの人のごとく神の言を曲げず、眞實により神による者のごとく、神の前にキリストに在りて語るなり。

第三章

我等ふたび己を薦め始めんや、また或人のごとく人の推薦の書を汝らに齎し、また汝等より受くることを要せんや。二 汝らは即ち我らの書にして我らの心に録され、又すべての人に知られ、かつ讀まるるなり。三 汝らは明かに我らの職によりて書かれたるキリストの書なり。而も墨にあらで活ける神の御靈にて録され、石碑にあらで心の肉碑に録されたるなり。

我らはキリストにより、神に對して斯る確信あり。五 されど己は何事をも自ら定むるに足らず、定むるに足るは神によるなり。六 神は我らを新約の役者となるに足らしめ給へり、儀文の役者にあらず、靈の役者なり。そは儀文は殺し、靈は活せばなり。七 石に彫り書されたる死の法の職にも光榮ありて、イスラエルの子等は、その頓て消ゆべきモーセの顔の光榮を見つめ得ざりし程ならんには、八 況て靈の職は光榮なからんや。九 罪を定むる職もし光榮あらんには、況て義とする職は光榮に

溢れざらんや。一〇 もと光榮ありし者も更に勝れる光榮に比ぶれば、光榮なき者となれり。二 もし消ゆべき者に光榮ありしならんには、況て永存ふるものに光榮なからんや。

一三 我らは斯のごとき希望を有つゆゑに更に臆せずして言ひ、一四 又モーセの如くせざるなり。彼は消ゆべき者の消えゆくをイスラエルの子らに見せぬために面帕を顔におほひたり。一五 然れど彼らの心鈍くなれり。キリストによりて面帕の廢るべきを悟らねば、今日に至るまで舊約を讀む時その面帕なほ存れり。一六 今日に至るまでモーセの書を讀むとき、面帕は彼らの心のうへに置かれたり。一七 然れど主に歸する時、その面帕は取り除かるべし。一八 主は即ち御靈なり、主の御靈のある所には自由あり。一九 我等はみな面帕なくして鏡に映ることく、主の榮光を見、榮光より榮光にすすみ、主たる御靈によりて主と同じ像に化するなり。

第四章

この故に我ら憐憫を蒙りて此の職を受けたれば、落膽せず、二 恥づべき隠れたる事をすて、悪巧に歩まず、神の言をみださず、眞理を顯して神の前に己を凡ての人の良心に薦むるなり。三 もし我らの福音おほはれ居らば、亡ぶる者に覆はれをるなり。四 この世の神は此等の不信者の心を暗まして神の

像なるキリストの榮光の福音の光を照さざらしめたり。我らは己の事を宣べず、ただキリスト・イエスの主たる事と我らがイエスのために汝らの僕たる事とを宣ぶ。光、暗より照り出でてよと宣ひし神は、イエス・キリストの顔にある神の榮光を知る知識を輝かしめんために我らの心を照し給へるなり。

我等この寶を土の器に有てり、これ優れて大なる能力の我等より出でずして神より出づることの顯れんためなり。われら四方より患難を受くれども窮せず、爲ん方つくれども希望を失はず、責めらるれども棄てられず、倒さるれども亡びず、常にイエスの死を我らの身に負ふ。これイエスの生命の我らの身にあらはれん爲なり。それ我ら生ける者の常にイエスのため死に付さるるは、イエスの生命の我らの死ぬべき肉體にあらはれん爲なり。さらば死は我等のうちに働き、生命は汝等のうちに働くなり。録して『われ信ずるによりて語れり』とあるごとく、我等にも同じ信仰の靈あり、信ずるに因りて語るなり。これ主イエスを甦へらせ給ひし者の我等をもイエスと共に甦へらせ、汝らと共に立たしめ給ふことを我ら知ればなり。凡ての事は汝らの益なり。これ多くの人によりて御惠の増し加はり、感謝いや増りて神の榮光の顯れん爲なり。

この故に我らは落膽せず、我らが外なる人は壞るれども、内なる人は日々新なり。それ我らが受くる暫くの輕き患難は極めて大なる永遠の重き光榮を得しむるなり。我らの顧みる所は見ゆる者にあらず見えぬ者なればなり。見ゆる者は暫時にして、見えぬ者は永遠に至るなり。

第五章

我らは知る、我らの幕屋なる地上の家、壞るれば、神の賜ふ建造物、すなはち天にある、手にて造らぬ、永遠の家あることを。我等はその幕屋にありて歎き、天より賜ふ住所をこの上に著んことを切に望む。之を著るときは裸にてある事なからん。我等この幕屋にありて重荷を負へる如くに歎く、之を脱がんとにあらで此の上に著んことを欲すればなり。これ死ぬべき者の生命に吞まれん爲なり。我らを此の事に適ふものとなし、その證として御靈を賜ひし者は神なり。この故に我らは常に心強し、かつ身に居るうちは主より離れ居るを知る。見ゆる所によらず、信仰によりて歩めばなり。斯く心強し、願ふところは寧ろ身を離れて主と偕に居らんことなり。然れば身に居るも身を離るるも、ただ御心に適はんことを力む。我等はみな必ずキリストの審判の座の前にあらはれ、善にもあれ、惡にもあれ、各人その身になしたる事に隨ひて報を受くべければ

なり。

斯く主の畏るべきを知るによりて人々に説き勧む。われら既に神に知られたり、亦なんぢらの良心にも知られたりと思ふ。我らは再び己を汝らに薦むるにあらず、ただ我等をもて誇とする機を汝らに與へ、心によらず外貌によりて誇る人々に答ふることを得させんと爲るなり、我等もし心狂へるならば、神の爲なり、心慥ならば、汝らの爲なり。キリストの愛われらに迫れり。我ら思ふに、一人すべての人に代りて死にたれば、凡ての人すべてに死にたるなり。その凡ての人に代りて死に給ひしは、生ける人の最早おのれの爲に生きず、己に代り死にて甦へり給ひし者のために生きん爲なり。されば今より後われ肉によりて人を知るまじ、曾て肉によりてキリストを知りしが、今より後は斯の如くに知ることをせじ。人もしキリストに在らば新に造られたる者なり、古きは既に過去り、視よ新しくなりたり。これらの事はみな神より出づ、神はキリストによりて我らを己と和がしめ、かつ和がしむる職を我らに授け給へり。即ち神はキリストに在りて世を己と和がしめ、その罪を之に負はせず、かつ和がしむる言を我らに委ね給へり。されば我等はキリストの使者たり、恰も神の我等によりて汝らを勧め給ふがなり。

ごとし。我等キリストに代りて願ふ、なんぢら神と和げ。神は罪を知り給はざりし者を我らの代に罪となし給へり、これ我らが彼に在りて神の義となるを得んためなり。

第六章

我らは神とともに働く者なれば、神の恩恵を汝らが徒らに受けざらんことを更に勧む。(神いひ給ふ、『われ恵の時に汝に聴き、救の日に汝を助けたり』と。視よ今は恵のとき、視よ今は救の日なり)我等この職の謗られぬ爲に何事にも人を踏かせず。反つて凡ての事において神の役者のごとく己をあらはす、即ち患難にも、窮乏にも、苦難にも、打たるるにも、獄に入るにも、騷擾にも、労働にも、眠らぬにも、斷食にも、大なる忍耐を用ひ、また廉潔と知識と寛容と仁慈と聖靈と虚偽なき愛と、眞の言と神の能力と左右に持ちたる義の武器とにより、また光榮と恥辱と惡名と美名とによりて表す。我らは人を惑はす者の如くなれども眞、人に知られぬ者の如くなれども人に知られ、死なんとする者の如くなれども、視よ、生ける者、懲さるる者の如くなれども殺されず、憂ふる者の如くなれども常に喜び、貧しき者の如くなれども多くの人を富ませ、何も有たぬ者の如くなれども凡ての物を有てり。

二 コリント人よ、我らの口は汝らに向ひて開け、我らの心は廣くなれり。^{二二} 汝らの狭くせらるるは、我らに因るにあらず、反つて己が心に因るなり。^{二三} 汝らも心を廣くして我に報をせよ、(我わが子に對する如く言ふなり)^{二四}
 不信者と軛を同じうすな、釣合はぬなり、義と不義と何の干與かあらん、光と暗と何の交際かあらん。^{二五} キリストとベリアルと何の調和かあらん、信者と不信者と何の關係かあらん。^{二六} 神の宮と偶像と何の一致かあらん、我らは活ける神の宮なり、即ち神の言ひ給ひしが如し。曰く、『われ彼らの中に住み、また歩まん。我かれらの神となり、彼等わが民とならん』と。^{二七} この故に、『主いひ給ふ、汝等かれらの中より出て、之を離れ、穢れたる者に觸るなかれと。さらば我なんぢらを受け、^{二八} われ汝らの父となり、汝等わが息子・娘とならんと全能の主いひ給ふ』とあるなり。

第七章

一 されば愛する者よ、われら斯る約束を得たれば、肉と靈との汚穢より全く己を潔め、神を畏れてその清潔を成就すべし。
 二 我らを受け容れよ、われら誰にも不義をなしし事なく、誰をも害ひし事なく、誰をも掠めし事なし。
 三 わが斯く言ふは、汝らを咎めんとにあらず、そは我が

既に言へる如く、汝らは我らの心にありて共に死に、共に生くればなり。^四 我なんぢらを信ずること大なり、また汝等をもて誇とすること大なり、我は慰安にみち、凡ての患難の中にも喜悅あふるるなり。^五

マケドニヤに到りしとき、我らの身になほ聊かも平安を得ずして様々の患難に遭ひ、外には分争、内には恐懼ありき。^六 然れど哀なる者を慰むる神は、テトスの來るによりて我らを慰め給へり。^七 唯その來るに因りてのみならず、彼が汝らによりて得たる慰安をもて慰め給へり。即ち汝らの我を慕ふこと、歎くこと、我に對して熱心なることを我らに告ぐるによりて我ますます喜べり。^八 われ書をもて汝らを憂ひしめたれども悔いず、その書の汝らを暫く憂ひしめしを見て、前には悔いたれども今は喜ぶ。^九 わが喜ぶは汝らの憂ひしが故にあらず、憂ひて悔改に至りし故なり。汝らは神に従ひて憂ひたれば、我等より聊かも損を受けざりき。^{一〇} それ神にしたがふ憂は、悔なきの救を得るの悔改を生じ、世の憂は死を生ず。^{一一} 視よ、汝らが神に従ひて憂ひしことは、如何許の奮勵・辨明・憤激・恐懼・愛慕・熱心・罪を責むる心などを汝らの中に生じたりしかを。汝等かの事に就きては全く潔きことを表せり。^{一二} されば前に書を汝らに書き贈りしも、不義をなしたる人の爲にあらず、ま

た不義を受けたる人の爲にあらざ、我らに對する汝らの奮勵の、神の前にて汝らに
 顯れん爲なり。二三 この故に我らは慰安を得たり。慰安を得たる上にテトスの喜悅に
 よりて更に喜べり。そは彼の心なんぢら一同によりて安んぜられたればなり。二四 わ
 れ曩に彼の前に汝らに就きて誇りたれど恥づることなし、我らが汝らに語りし事の
 みな誠實なりし如く、テトスの前に誇りし事もまた誠實となれり。一五 彼は汝等みな
 從順にして畏れ戦き、己を迎へしことを思ひ出して、心を汝らに寄すること増々
 深し。一六 われ凡ての事に汝らに就きて心強きを喜ぶ。

第八章

兄弟よ、我らマケドニヤの諸教會に賜ひたる神の恩恵を汝らに知ら
 す。二 即ち患難の大なる試練のうちには彼らの喜悅あふれ、又その甚だ
 しき貧窮は吝なく施す富の溢るるに至れり。四三 われ證す、彼らは聖徒に事ふること
 に與る恵を切に我らに請ひ求め、みづから進みて力に應じ、否これに過ぎて施濟を
 なせり。五 我らの望のほかに先づ己を主にささげ、神の御意によりて我らにも身を
 委ねたり。六 されば我らはテトスが前に此の慈惠のことを汝らの中に始めたれば、
 又これを成就せんことを勧めたり。七 汝等もろもろの事、すなはち信仰に、言に、
 知識に、凡ての奮勵に、また我らに對する愛に富めるごとく、此の慈惠にも富むべ

し。八 われ斯く言ふは汝らに命ずるにあらず、ただ他の人の奮勵によりて、汝らの
 愛の眞實を試みん爲なり。九 汝らは我らの主イエス・キリストの恩恵を知る。即ち
 富める者にて在したれど、汝等のために貧しき者となり給へり。これ汝らが彼の
 貧窮によりて富める者とならん爲なり。一〇 施濟のことに就きて我ただ意見を述べ、
 これは汝らの益なり。汝らは此の事をただに一年前より人に先だちて行ひしのみな
 らず、又これを願ひ始めし事なれば、一一 今これを成遂げよ、汝らが心より願ひしご
 とく、所有に應じて成遂げよ。一二 人もし志望あらば其の有たぬ所に由るにあらず、
 其の有つ所に由りて嘉納せらるるなり。一三 これ他の人を安くして汝らを苦しめんと
 にあらず、均しくせんと爲るなり。一四 即ち今なんぢらの餘るところは彼らの足らざ
 るを補ひ、後また彼らの餘る所は汝らの足らざるを補ひて均しくなるに至らんため
 なり。一五 録して『多く集めし者にも餘る所なく、少く集めし者にも足らざる所な
 りき』とあるが如し。

汝らに對する同じ熱心をテトスの心にも賜へる神に感謝す。一七 彼はただに勸
 を容れしのみならず、甚だ熱心にして、自ら進んで汝らに往くなり。一八 我等また彼
 とともに一人の兄弟を遣す。この人は福音をもて諸教會のうちに譽を得たる上に、

一九 主の榮光と我らの志望とを顯さんがために掌どれる此の慈恵に就きて諸教會より
 我らの道伴として選ばれたる者なり。二〇 彼を遣すは此の大なる醜金を掌どるに人に
 咎めらるる事を避けんためなり。二一 彼は主の前のみならず、人の前にも善からんこ
 とを慮ばかりてなり。二二 また一人の兄弟を彼らと共につかはす、我らは多くの事に
 つきて屢次かれの熱心なるを認めたり。而して今は彼が汝らを深く信するに因り
 て、その熱心の更に加はるを認む。二三 テトスのことを言へば我が友なり、汝らに對
 して我が同勞者なり。この兄弟たちの事をいへば彼らは諸教會の使なり、キリスト
 の榮光なり。二四 されば汝らの愛と我らが汝らに就きて誇れる事との證を諸教會の前
 にて彼らに顯せ。

第九章

一 聖徒に施すことに就きては汝らに書きおくるに及ばず、我なんぢ
 二 らの志望あるを知ればなり。その志望につき汝らの事をマケドニヤ人
 三 人に誇りて、アカヤは既に一年前に準備をなせりと云へり。斯て汝らの熱心は多くの
 四 人を勵したり。然れど、われ兄弟たちを遣すは、我が言ひしごとく汝らに準備を
 五 なさしめ、之につきて我らの誇りし事の空しくならざらん爲なり。もしマケドニ
 六 ヤ人、われと共に來りて汝らの準備なきを見れば、汝らは言ふに及ばず、我らも確信

せしによりて恐らくは恥を受けん。五 この故に兄弟たちを勧めて、先づ汝らに往か
 しめ、曩に汝らが約束したる慈恵を吝むが如くせずして、恵む心より爲んために預
 じめ調へしむるは、必要のことと思へり。

六 それ少く播く者は少く刈り、多く播く者は多く刈るべし。七 おのおの吝むこ
 となく、強ひてすることなく、その心に定めし如くせよ。神は喜びて與ふる人を愛
 八 し給へばなり。神は汝等をして常に凡ての物に足らざることなく、凡ての善き業
 九 に溢れしめんために、凡ての恩恵を溢るるばかり與ふることを得給ふなり。録し
 一〇 て、『彼は散らして貧しき者に與へたり。その正義は永遠に存らん』とある如し。
 一一 播く人に種と食するパンとを與ふる者は、汝らにも種をあたへ、且これを殖し、
 一二 また汝らの義の果を増し給ふべし。汝らは一切に富みて吝みなく施すことを得、
 一三 かくて我らの事により人々、神に感謝するに至るなり。此の施濟の務は、ただに
 一四 聖徒の窮乏を補ふのみならず、充ち溢れて神に對する感謝を多からしむ。即ち彼
 一五 らは此の務を證據として、汝らがキリストの福音に對する言明に順ふことと彼ら
 一六 にも凡ての人にも吝みなく施すこととに就きて、神に榮光を歸し、かつ神の汝ら
 一七 に賜ひし優れたる恩恵により汝らを慕ひて汝等のために祈らん。言ひ盡しがたき

神の賜物につきて感謝す。

第一〇章

汝らに對し面前にては謙だり、離れゐては勇ましき我パウロ、自ら
 キリストの柔和と寛容とをもて汝らに勸む。我らを肉に従ひて歩む
 ごとき思ふ者あれば、斯る者に對しては雄々しく爲んと思へど、願ふ所は我が汝ら
 に逢ふとき斯く勇ましく爲ざらん事なり。我らは肉にありて歩めども、肉に従ひ
 て戦はず。四 それ我らの戦争の武器は肉に屬するにあらず、神の前には城砦を破る
 ほどの能力あり、我等はもろもろの論説を破り、神の示教に逆ひて建てたる凡て
 の櫓を毀ち、凡ての念を虜にしてキリストに服はしむ。且なんぢらの從順の全く
 ならん時、すべての不從順を罰せんと覺悟せり。汝らは外貌のみを見る、若し
 人みづからキリストに屬する者と信ぜば、己がキリストに屬する如く、我らも亦キ
 リストに屬する者なることを更に考ふべし。假令われ汝らを破る爲ならずして建
 つる爲に、主が我らに賜ひたる權威につきて誇ること稍過ぐとも恥とはならじ。
 九 われ書をもて汝らを嚇すと思はざれ。彼らは言ふ『その書は重く、かつ強し、
 その逢ふときの容貌は弱く、言は鄙し』と。斯のごとき人は思ふべし。我らが離
 れる時おくる書の言のごとく、逢ふときの行爲も亦然るを。二三 我らは己を譽むる

人と敢て並び、また較ぶる事をせず、彼らは己によりて己を度り、己をもて己に較
 ぶれば智なき者なり。二三 我らは範圍を踰えて誇らず、神の我らに分ち賜ひたる範圍
 にしたがひて誇らん。その範圍は汝らに及べり。汝らに及ばぬ者のごとく範圍を
 踰えて身を延すに非ず、キリストの福音を傳へて汝等にまで到れるなり。一五 我らは
 己が範圍を踰えて他の人の勞を誇らず、唯なんぢらの信仰の彌増すにより我らの範
 圍に循ひて汝等のうちに更に大なることを望む。一六 これ他の人の範圍に既に備り
 たるものを誇らず、汝らを踰えて外の處に福音を宣傳へん爲なり。一七 誇る者は主に
 よりて誇るべし。一八 そは是とせらるるは己を譽むる者にあらず、主の譽め給ふ者な
 ればなり。

第一一章

願くは汝等わが少しの愚を忍ばんことを。請ふ我を忍べ。二 われ神
 の熱心をもて汝らを慕ふ、われ汝らを潔き處女として一人の夫なるキ
 リストに獻げんとて、之に許嫁したればなり。三 されど我が恐るるは蛇の悪巧によ
 りてエバの惑されし如く、汝らの心害はれてキリストに對する眞心と貞操とを失
 はん事なり。四 もし人きたりて我らの未だ宣べざる他のイエスを宣ぶる時、また汝
 らが未だ受けざる他の靈を受け、未だ受け容れざる他の福音を受くるときは汝ら能

く之を忍ばん。我は何事にも、かの大使徒たちに劣らずと思ふ。われ言に拙けれども知識には然らず、凡ての事にて全く之を汝らに顯せり。われ汝らを高うせんために自己を卑うし、價なくして神の福音を傳へたるは罪なりや。我は他の教會より奪ひ取り、その俸給をもて汝らに事へたり。又なんぢらの中に在りて乏しかりしとき、誰をも煩はさず、マケドニヤより來りし兄弟たち我が窮乏を補へり。斯く凡ての事に汝らを煩はすまじと慎みたるが、此の後もなほ慎まん。我に在るキリストの誠實によりて言ふ、我この誇をアカヤの地方にて阻まるる事あらじ。これ何故ぞ、汝らを愛せぬに因るか、神は知りたまふ。我わが行ふ所をなほ行はん、これ機會をうかがふ者の機會を斷ち、彼等をしてその誇る所につき我らの如くならしめん爲なり。斯の如きは僞使徒また詭計の労働人にして、己をキリストの使徒に扮へる者どもなり。これ珍しき事にあらず、サタンも己を光の御使に扮へば、その役者らが義の役者のごとく扮ふは大事にはあらず、彼らの終局はその業に適ふべし。

われ復いはん、誰も我を愚と思ふな、もし然おもふとも少しく誇る機を我にも得させん爲に愚なる者として受容れよ。今いふ所は主によりて言ふにあらず、

愚なる者として大膽に誇りて言ふなり。多くの肉によりて誇れば我も誇るべし。汝らは智き者なれば喜びて愚なる者を忍ぶなり。人もし汝らを奴隷とすとも、食ひ盡すとも、掠めとるとも、驕るとも、顔を打つとも、汝らは之を忍ぶ。われ恥ぢて言ふ、我らは弱き者の如くなりき。然れど人の雄々しき所は我もまた雄々し、われ愚にも斯く言ふなり。彼らへブル人なるか、我も然り、彼らイスラエル人なるか、我も然り、彼らアブラハムの裔なるか、我も然り。彼らキリストの役者なるか、われ狂へる如く言ふ、我はなほ勝れり。わが勞は更におほく、獄に入れられしこと更に多く、鞭うたれしこと更に夥だしく、死に瀕みたりしこと屢次なりき。ユダヤ人より四十に一つ足らぬ鞭を受けしこと五度、笞にて打たれしこと三たび、石にて打たれしこと一たび、破船に遭ひしこと三度に於て一晝夜、海にありき。しばしば旅行して河の難、盜賊の難、同族の難、異邦人の難、市中の難、荒野の難、海上の難、僞兄弟の難にあひ、勞し、苦しみ、しばしば眠らず、飢ゑ渴き、しばしば斷食し、凍え、裸なりき。ここに擧げざる事もあるに、なほ日々われに迫る諸教會の心勞あり。誰か弱りて我弱らざらんや、誰か躓きて我燃えざらんや。もし誇るべくば、我が弱き所につきて誇らん。永遠に讃むべき

者、すなはち主イエスの神また父は、我が僞らざるを知り給ふ。三三 ダマスコにてアレタ王の下にある總督われを捕へんとてダマスコ人の町を守りたれば、三三 我は籠にて窓より石垣傳ひに縋下されて其の手を脱れたり。

第一二章

わが誇るは益なしと雖も止むを得ざるなり、茲に主の顯示と黙示とに及ばん。二 我はキリストにある一人の人を知る。この人、十四年前に第三の天にまで取り去られたり（肉體にてか、われ知らず、肉體を離れてか、われ知らず、神しり給ふ）三 われ斯のごとき人を知る、（肉體にてか、肉體の外にてか、われ知らず、神しり給ふ）四 かれパラダイスに取り去られて言ひ得ざる言、人の語るまじき言を聞けり。五 われ斯のごとき人のために誇らん、然れど我が爲には弱き事のほか誇るまじ。六 もし自ら誇るとも我が言ふところ誠實なれば、愚なる者とならじ。然れど之を罷めん。恐らくは人の我を見、われに聞くところに過ぎて我を思ふことあらん。七 我は我が蒙りたる黙示の鴻大なるによりて高ぶることの莫らんとために肉體に一つの刺を與へらる、即ち高ぶること莫らんとために我を撃つサタンの使なり。八 われ之がために三度まで之を去らしめ給はんことを主に求めたるに、言ひたまふ、『わが恩恵なんぢに足れり、わが能力は弱きうちに全うせらるれば

なり』然ればキリストの能力の我を庇はんために、寧ろ大に喜びて我が微弱を誇らん。一〇 この故に我はキリストの爲に微弱・恥辱・艱難・迫害・苦難に遭ふことを喜ぶ、そは我よわき時に強ければなり。

二 われ汝らに強ひられて愚になれり、我は汝らに譽めらるべかりしなり。我は數ふるに足らぬ者なれども、何事にもかの大使徒たちに劣らざりしなり。三 我は微と不思議と能力ある業とを行ひ、大なる忍耐を用ひて汝等のうちに使徒の徴をなせり。四 なんぢら他の教會に何の劣る所かある、唯わが汝らを煩はさざりし事のみならずや、此の不義は請ふ我に恕せ。

五 視よ、茲に三度なんぢらに到らんとして準備したれど、尙なんぢらを煩はすまし。我は汝らの所有を求めず、ただ汝らを求む。それ子は親のために貯ふべきにあらず、親は子のために貯ふべきなり。六 我は大に喜びて汝らの靈魂のために物を費し、また身をも費さん。我なんぢらを多く愛するによりて汝ら我を少く愛するか。七 或人いはん、我なんぢらを煩はさざりしも、狡猾にして詭計をもて取りしなりと。八 然れど我なんぢらに遣しし者のうちの誰によりて汝らを掠めしや。九 我テトスを勧めて汝らに遣し、これと共にかの兄弟を遣せり、テトスは汝らを掠めし

や。我らは同じ御靈によりて歩み、同じ足跡を踏みにあらずや。
 一九 汝らは夙くより我等なんぢらに對して辯明すと思ひしならん。されど我らは
 キリストに在りて神の前にて語る。愛する者よ、これ皆なんぢらの徳を建てん爲な
 二〇 り。わが到りて汝らを見ん時、わが望の如くならず、汝らが我を見んとき、亦な
 んぢらの望の如くならざらんことを恐れ、かつ分争・嫉妬・憤恚・徒黨・誹謗・讒
 言・驕傲・騷亂などの有らんことを恐る。二一 また重ねて到らん時、わが神われを汝
 等のまへにて辱しめ、且おほくの人の、前に罪を犯して行ひし不潔と姦淫と好色と
 を悔改めざるを悲しましめ給ふことあらん乎と恐る。

第一三章

一 今われ三度なんぢらに到らんとす、二三の證人の口によりて凡ての
 こと慥めらるべし。二 われ既に告げたれど、今離れをりて、二度なん
 ぢらに逢ひし時のごとく、前に罪を犯したる者とその他の凡ての人々とに預じめ告
 ぐ、われ復いたらば決して宥さじ。三 汝らはキリストの我にありて語りたまふ證據
 を求むればなり。キリストは汝らに對ひて弱からず、汝等のうちに強し。四 微弱に
 よりて十字架に釘けられ給ひたれど、神の能力によりて生き給へばなり。我等もキ
 リストに在りて弱き者なれど、汝らに向ふ神の能力によりて彼と共に生きん。五

んぢら信仰に居るや否や、自ら試み、自ら驗しむ。汝等みづから知らざらんや、
 若し棄てらるる者ならずば、イエス・キリストの汝らの中に在す事を。六 我は我ら
 の棄てらるる者ならぬを汝らの知らんことを望む。七 我らは汝らの少しにても惡を
 行はざらんことを神に祈る。これ我らの是とせらるるを顯さん爲にあらず、縦われ
 らは棄てらるる者の如くなるとも、汝らの善を行はん爲なり。八 我らは眞理に逆ひ
 て能力なく、眞理のためには能力あり。九 われら弱くして汝らの強きことを喜ぶ、
 また之に就きて祈るは汝らの全くならん事なり。一〇 われ離れ居りて此等のことを書
 き贈るは、汝らに逢ふとき、主の破る爲ならずして建つる爲に我に賜ひたる權威に
 随ひて厳しくせざらん爲なり。一一 終に言はん、兄弟よ汝ら喜べ、全くなれ、慰安を受けよ、心を一つにせよ、
 睦み親しめ、然らば愛と平和との神なんぢらと偕に在さん。一二 潔き接吻をもて相互
 に安否を問へ、凡ての聖徒なんぢらに安否を問ふ。一三 願くは主イエス・キリストの恩恵・神の愛・聖靈の交感、なんぢら凡ての者
 と偕にあらんことを。

ガラテヤ人への書

第一章

人よりに非ず、人に由るにも非ず、イエス・キリスト及び之を死人の中より甦へらせ給ひし父なる神に由りて使徒となれるパウロ、及び我と偕にある凡ての兄弟、書をガラテヤの諸教會に贈る。願くは、我らの父なる神および主イエス・キリストより賜ふ恩恵と平安と汝らに在らんことを。我らの父なる神の御意に隨ひて、我らを今の悪しき世より救ひ出さんとて、己が身を我らの罪のために與へたまへり。願くは榮光、世々限りなく神にあらん事を、アアメン。

我は汝らが斯くも速かにキリストの恩恵をもて召し給ひし者より離れて異なる福音に移りゆくを怪しむ。此は福音と言ふべき者にあらず、ただ或る人々が汝らを擾してキリストの福音を變へんとするなり。されど我等にもせよ、天よりの御使にもせよ、我らの曾て宣傳へたる所に背きたる福音を汝らに宣傳ふる者あらば詛はるべし。われら前に言ひし如く、今また言はん、汝らの受けし所に背きたる福音を宣傳ふる者あらば詛はるべし。

我いま人に喜ばれんとするか、或は神に喜ばれんとするか、抑もまた人を喜ばせんことを求むるか。もし我なほ人を喜ばせをらば、キリストの僕にあらじ。

兄弟よ、われ汝らに示す、わが傳へたる福音は、人に由れるものにあらず。我は人より之を受けず、また教へられず、唯イエス・キリストの黙示に由れるなり。

我がユダヤ教に於ける曩の日の舉動は、なんぢら既に聞けり、即ち烈しく神の教會を責め、かつ暴したり。又わが國人のうち、我と同じ年輩なる多くの者にも勝りてユダヤ教に進み、わが先祖たちの言傳に對して甚だ熱心なりき。然れども母の胎を出てしより我を選び別ち、その恩恵をもて召し給へる者、御子を我が内に顯して其の福音を異邦人に宣傳へしむるを可しとし給へる時、われ直ちに血肉と謀らず、我より前に使徒となりし人々に逢はんとてエルサレムにも上らず、アラビヤに出で往きて遂にまたダマスコに返れり。

その後三年を歴てケバを尋ねんとエルサレムに上り、十五日の間かれと偕に留りしが、主の兄弟ヤコブのほか孰の使徒にも逢はざりき。(茲に書きおくる事は、視よ神の前にて偽らざるなり)その後シリヤ、キリキヤの地方に往けり。キリストにあるユダヤの諸教會は我が顔を知らざりしかど、ただ人々の『われ

らを前に責めし者、曾て暴したる信仰の道を今は傳ふ』といふを聞き、^{二四} わが事に
よりにて神を崇めたり。

第二章

その後十四年を歴てバルナバと共に、テトスをも連れて、復エルサ
レムに上れり。^二 我が上りしは黙示に因りてなり。斯て異邦人の中に
宣ぶる福音を彼らに告げ、また名ある者どもに私かに告げたり、これは我が走るこ
と、又すでに走りしことの空しからざらん爲なり。^三 而して我と偕なるギリシヤ人
テトスすら割禮を強ひられざりき。^四 これ私かに入りたる僞兄弟あるに因りてな
り。彼らの忍び入りたるは、我らがキリスト・イエスに在りて有てる自由を窺ひ、
且われらを奴隷とせん爲なり。^五 然れど福音の眞理の汝らの中に留らんために、我
ら一時も彼らに譲り従はざりき。^六 然るに、かの名ある者どもより——彼らは如何
なる人なるにもせよ、我には關係なし、神は人の外面を取り給はず——實にかの名
ある者どもは我に何を加へず、^七 反つてペテロが割禮ある者に對する福音を委ね
られたる如く、我が割禮なき者に對する福音を委ねられたるを認め、^八 (ペテロに
能力を與へて割禮ある者の使徒となし給ひし者は、我にも異邦人のために能力を與
へ給へり) ^九 また我に賜りたる恩恵をさとりて、柱と思はるるヤコブ、ケバ、ヨハ

ネは、交誼の印として我とバルナバとに握手せり。これは我らが異邦人にゆき、彼
らが割禮ある者に往かん爲なり。^{一〇} 唯その願ふところは我らが貧しき者を顧みんこ
となり、我も固より此の事を勵みて行へり。

然れどケバがアンテオケに來りしとき責むべき事のありしをもて、^{一一} 面前これ
と諍ひたり。^{一二} その故は或る人々のヤコブの許より來るまでは、かれ異邦人と共に
食しゐたるに、かの人々の來りてよりは、割禮ある者どもを恐れ、退きて異邦人と
別れたり。^{一三} 他のユダヤ人も彼とともに僞行をなし、バルナバまでもその僞行に
誘はれゆけり。^{一四} 然れど我かれらが福音の眞理に循ひて正しく歩まざるを見て、會
衆の前にてケバに言ふ『なんぢユダヤ人なるにユダヤ人の如くせず、異邦人のごと
く生活せば、何ぞ強ひて異邦人をユダヤ人の如くならしめんとするか』^{一五} 我らは
生來のユダヤ人にして罪人なる異邦人にあらざれども、^{一六} 人の義とせらるるは
律法の行爲に由らず、唯キリスト・イエスを信ずる信仰に由るを知りて、キリスト
・イエスを信じたり。これ律法の行爲に由らず、キリストを信ずる信仰に由りて義
とせられん爲なり。律法の行爲によりては義とせらるる者、一人だになし。^{一七} 若し
キリストに在りて義とせられんことを求めて、なほ罪人と認められなば、キリスト

は罪の役者なるか、決して然らず。一八われもし前に毀ちしものを再び建てなば、己みづから犯罪者たるを表す。一九われは神に生きんために、律法によりて律法に死にたり。二〇我キリストと偕に十字架につけられたり。最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。今われ肉體に在りて生くるは我を愛して我がために己が身を捨て給ひし神の子を信ずるに由りて生くるなり。二一我は神の恩恵を空しくせず、もし義とせらるること律法に由らば、キリストの死に給へるは徒然なり。

第三章

愚なる哉、ガラテヤ人よ、十字架につけられ給ひしままなるイエス・キリスト、汝らの眼前に顯されたるに、誰が汝らを誑かししぞ。我は汝等より唯この事を聞かんと欲す。汝らが御靈を受けしは律法の行爲に由るか、聽きて信じたるに由るか。汝らは斯くも愚なるか、御靈によりて始りしに、今肉によりて全うせらるるか。四 斯程まで多くの苦難を受けしことは徒然なるか、徒然にはあるまじ。然らば汝らに御靈を賜ひて汝らの中に能力ある業を行ひ給へるは、律法の行爲に由るか、聽きて信ずるに由るか。六 録して『アブラハム神を信じ、その信仰を義とせられたり』とあるが如し。七 されば知れ、信仰に由る者は、是アブラハムの子なるを。八 聖書は神が異邦

人を信仰に由りて義とし給ふことを知りて、預じめ福音をアブラハムに傳へて言ふ『なんぢに由りて、もろもろの國人は祝福せられん』と。九 この故に信仰による者は、信仰ありしアブラハムと共に祝福せらる。一〇 されど凡て律法の行爲による者は、詛の下にあり。録して『律法の書に記されたる凡ての事を常に行はぬ者はみな詛はるべし』とあればなり。二 律法に由りて神の前に義とせらるる事なきは明かなり『義人は信仰によりて生くべし』とあればなり。三 律法は信仰に由るにあらず、反つて『律法を行ふ者は之に由りて生くべし』と云へり。四 一三 キリストは我等のために詛はるる者となりて律法の詛より我らを贖ひ出し給へり。録して『木に懸けらるる者は凡て詛はるべし』と云へばなり。一四 これアブラハムの受けたる祝福のイエス・キリストによりて異邦人におよび、且われらが信仰に由りて約束の御靈を受けん爲なり。

一五 兄弟よ、われ人の事を藉りて言はん、人の契約すら既に定むれば、之を廢し、また加ふる者なし。一六 かの約束はアブラハムと其の裔とに與へ給ひし者なり、多くの者を指すごとく『裔々に』とは云はず、一人を指すごとく『なんぢの裔に』と云へり、これ即ちキリストなり。一七 然れば我いはん、神の預じめ定め給ひし契約

は、その後四百三十年を歴て起りし律法に廢せらるることなく、その約束も空しくせらるる事なし。もし嗣業を受くること律法に由らば、もはや約束には由らず、然るに神は約束に由りて之をアブラハムに賜ひたり。然れば律法は何のためぞ。これ罪の爲に加へ給ひしものにて、御使たちを経て中保の手によりて立てられ、約束を與へられたる裔の來らん時にまで及ぶなり。(中保は一方のみの者にあらず、然れど神は唯一に在せり) 然らば律法は神の約束に悖るか、決して然らず。もし人を生かすべき律法を與へられたらんに、實に義とせらるるは律法に由りしならん。然れど聖書は凡ての者を罪の下に閉ぢ籠めたり。これ信ずる者のイエス・キリストに對する信仰に由れる約束を與へられん爲なり。

信仰の出來らぬ前は、われら律法の下に守られて、後に顯れんとする信仰の時まで閉ぢ籠められたり。斯く信仰によりて我らの義とせられん爲に、律法は我らをキリストに導く守役となれり。されど信仰の出來りし後は、我等もはや守役の下に居らず。汝らは信仰によりキリスト・イエスに在りて、みな神の子たり。凡そバプテスマに由りてキリストに合ひし汝らは、キリストを衣たるなり。今はユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隸も自主もなく、男も女もなし、汝らは皆キリ

スト・イエスに在りて一體なり。汝等もしキリストのものならば、アブラハムの裔にして約束に循へる世嗣たるなり。

第四章

われ言ふ、世嗣は全業の主なれども、成人とならぬ間は僕と異なることなく、父の定めし時の至るまでは後見者と家令との下にあり。

斯のごとく我らも成人とならぬほどは、世の小學の下にありて僕たりしなり。然れど時満つるに及びては、神その御子を遣し、これを女より生れしめ、律法の下に生れしめ給へり。これ律法の下にある者をあがなひ、我等をして子たることを得しめん爲なり。斯く汝ら神の子たる故に、神は御子の御靈を我らの心に遣して『アバ、父』と呼ばしめ給ふ。然れば最早なんぢは僕にあらず、子たるなり。既に子たらば亦神に由りて世嗣たるなり。

然れど汝ら神を知らざりし時は、その實神にあらざる神々に事へたり。今は神を知り、寧ろ神に知られたるに、何ぞ復かの弱くして賤しき小學に還りて、再びその僕たらんと爲るか。汝らは日と月と季節と年とを守る。我は汝らの爲に働きし事の或は無益にならんことを恐る。

兄弟よ、我なんぢらに請ふ、われ汝等のごとく成りたれば、汝ら我がごとく

成れ。汝ら何事にも我を害ひしことなし。わが初め汝らに福音を傳へしは、肉體の弱かりし故なるを汝ら知る。わが肉體に汝らの試練となる者ありたれど汝ら之を卑しめず、又きはらず、反つて我を神の使の如く、キリスト・イエスの如く迎へたり。汝らの其の時の幸福はいま何處に在るか。我なんぢらに就きて證す、もし爲し得べくば己が目を抉りて我に與へんとまで思ひしを。然るに我なんぢらに眞を言ふによりて仇となりたるか。かの人々の汝らに熱心なるは善き心にあらず、汝らを我らより離して己らに熱心ならしめんとてなり。善き心より熱心に慕はるるは、當に我が汝らと偕に在る時のみならず、何時にても宜しき事なり。幼兒よ、汝らの衷にキリストの形成るまでは、我ふたたび産の苦痛をなす。今なんぢらに到りて我が聲を易へんことを願ふ、汝らに就きて惑へばなり。律法の下にあらんと願ふ者よ、我にいへ、汝ら律法をきかぬか。即ちアブラハムに子二人あり、一人は婢女より、一人は自主の女より生れたりと録されたり。婢女よりの子は肉によりて生れ、自主の女よりの子は約束による。この中に譬あり、二人の女は二つの契約なり、その一つはシナイ山より出でて、奴隷たる子を生む、これハガルなり。このハガルはアラビヤに在るシナイ山にして今のエ

ルサレムに當る。エルサレムはその子らとともに奴隷たるなり。然れど上なるエルサレムは、自主にして我らの母なり。録していふ、『石女にして産まぬものよ、喜べ。産の苦痛せぬ者よ、聲をあげて呼はれ。獨住の女の子は多し、夫ある者の子よりも多し』とあり。兄弟よ、なんぢらはイサクのごとく約束の子なり。然るに其の時、肉によりて生れし者、御靈によりて生れし者を責めしごとく今なほ然り。されど聖書は何と云へるか『婢女とその子とを逐ひいだせ、婢女の子は自主の女の子と共に業を嗣ぐべからず』とあり。されば兄弟よ、われらは婢女の子ならず、自主の女の子なり。

第五章

キリストは自由を得させん爲に我らを釋き放ちたまへり。然れば堅く立ちて再び奴隷の軛に繋がるな。

ニミ 視よ我パウロ汝らに言ふ、もし割禮を受けば、キリストは汝らに益なし。三また 又さらに凡て割禮を受くる人に證す、かれは律法の全體を行ふべき負債あり。四 律法に由りて義とせられんと思ふ汝らは、キリストより離れたり、恩恵より墮ちたり。五 我らは御靈により、信仰によりて希望をいだき、義とせらるることを待てるなり。六 キリスト・イエスに在りては割禮を受くるも割禮を受けぬも益なく、た

だ愛に由りてはたらく信仰のみ益あり。七 なんぢら前には善く走りたるに、誰が汝らの眞理に従ふを阻みしか。八 斯る勸は汝らを召したまふ者より出づるにあらず。九 少しのパン種は粉の團塊をみな膨れしむ。一〇 われ汝らに就きては、その聊かも異念を懐かぬことを主によりて信ず。されど汝らを擾す者は、誰にもあれ、審判を受けん。一一 兄弟よ、我もし今も割禮を宣傳へば、何ぞなほ迫害せられんや。もし然せば十字架の顛頭も止みしならん。一二 願くは汝らを亂す者どもの自己を不具にせんことを。

兄弟よ、汝らの召されたるは自由を與へられん爲なり。ただ其の自由を肉に従ふ機會となさず、反つて愛をもて互に事へよ。一四 それ律法の全體は「おのれの如く、なんぢの隣を愛すべし」との一言にて全うせらるるなり。一五 心せよ、若し互に咬み食はば相共に亡されん。

我いふ、御靈によりて歩め、さらば肉の慾を遂げざるべし。一七 肉の望むところは御靈にさからひ、御靈の望むところは肉にさからひて互に相戾ればなり。これ汝らの欲する所をなし得ざらしめん爲なり。一八 汝等もし御靈に導かれなば、律法の下にあらじ。一九 それ肉の行爲はあらはなり。即ち淫行・汚穢・好色・偶像崇拜・

呪術・怨恨・紛争・嫉妬・憤恚・徒黨・分離・異端・猜忌・醉酒・宴樂などの如し。我すでに警めたるごとく、今また警む。斯ることを行ふ者は神の國を嗣ぐことなし。二三 然れど御靈の果は愛・喜悅・平和・寛容・仁慈・善良・忠信・柔和・節制なり。斯るものを禁ずる律法はあらず。二四 キリスト・イエスに屬する者は肉ともにも其の情と慾とを十字架につけたり。

もし我ら御靈に由りて生きなば、御靈に由りて歩むべし。二六 互に挑み、互に妬みて、虚しき譽を求むることを爲な。

第六章

兄弟よ、もし人の罪を認むることあらば、御靈に感じたる者、柔和なる心をもて之を正すべし、且おのおの自ら省みよ、恐らくは己も誘

はるる事あらん。なんぢら互に重を負へ、而してキリストの律法を全うせよ。三 人もし有ること無くして自ら有りとせば、是みづから欺くなり。四 各自おのが行爲を驗し見よ、さらば誇るところは、他にあらで、ただ己にあらん。五 各自おのが荷を負ふべければなり。

御言を教へらるる人は教ふる人と凡ての善き物を共にせよ。七 自ら欺くな、神は侮るべき者にあらず、人の播く所は、その刈る所とならん。八 己が肉のために

播く者は肉によりて滅亡を刈りとり、御霊のために播く者は御霊によりて永遠の生命を刈りとらん。われら善をなすに倦まざれ、もし撓まずば、時いたりて刈り取るべし。この故に機に随ひて、凡ての人、殊に信仰の家族に善をおこなへ。視よ、われ手づから如何に大なる文字にて汝らに書き贈るか。凡そ肉において美しき外観をなさんと欲する者は、汝らに割禮を強ふ。これ唯キリストの十字架の故によりて責められざらん爲のみ。そは割禮をうくる者すら自ら律法を守らず、而も汝らに割禮をうけしめんと欲するは、汝らの肉につきて誇らんが爲なり。然れど我には我らの主イエス・キリストの十字架のほかに誇る所あらざれ。之によりて世は我に對して十字架につけられたり、我が世に對するも亦然り。それ割禮を受くるも受けぬも、共に數ふるに足らず、ただ貴きは新に造らるる事なり。此の法に循ひて歩む凡ての者の上に、神のイスラエルの上に、平安と隣憫とあれ。

一七いま 今よりのち誰も我を煩はすな、我はイエスの印を身に佩びたるなり。
一八きやうだい 兄弟よ、願くは我らの主イエス・キリストの恩恵、なんぢらの靈とともに在らんことを、アアメン。

エペソ人への書

第一章

神の御意によりてキリスト・イエスの使徒となれるパウロ、書をエペソに居る聖徒、キリストに在りて忠實なる者に贈る。願くは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜ふ恩恵と平安と汝らに在らんことを。讚むべきかな、我らの主イエス・キリストの父なる神、かれはキリストに由りて靈のもろもろの祝福をもて天の處にて我らを祝し、御前にて潔く瑕なからしめん爲に、世の創の前より我等をキリストの中を選び、御意のままにイエス・キリストに由り愛をもて己が子となさんことを定め給へり。是その愛しみ給ふ者によりて我らに賜ひたる恩恵の榮光に譽あらん爲なり。我らは彼にありて恩恵の富に隨ひ、その血に頼りて贖罪、すなはち罪の赦を得たり。神は我らに諸般の智慧と聰明とを與へてその恩恵を充しめ、御意の奥義を御意のままに示し給へり。即ち時満ちて經綸にしたがひ、天に在るもの、地にあるものを悉とくキリストに在りて一つに歸せしめ給ふ。これ自ら定め給ひし所なり。我らは凡ての事を御意の思慮のままに行ひたまふ者の御旨によりて預じめ定められ、キリストに在りて神

の産業と爲られたり。 ^{二三}これ夙くよりキリストに希望を置きし我らが神の榮光の譽とならん爲なり。 ^{二四}汝等もキリストに在りて眞の言、すなはち汝らの救の福音をきき、彼を信じて約束の聖靈にて印せられたり。 ^{二五}これは我らが受くべき嗣業の保證にして、神に屬けるものの贖はれ、かつ神の榮光に譽あらん爲なり。

^{二六}この故に我も汝らが主イエスに對する信仰と凡ての聖徒に對する愛とを聞き、絶えず汝らのために感謝し、わが祈のうちに汝らを憶え、 ^{二七}我らの主イエス・キリストの神、榮光の父、なんぢらに智慧と黙示との靈を與へて、神を知らしめ、 ^{二八}汝らの心の眼を明かにし、神の召にかかはる望と聖徒にある神の嗣業の榮光の富と、 ^{二九}神の大能の勢威の活動によりて信ずる我らに對する能力の極めて大なるとを知らしめ給はんことを願ふ。 ^{三〇}神はその大能をキリストのうちに働かせて、之を死人の中より甦へらせ、天の所にて己の右に坐せしめ、 ^{三一}もろもろの政治・權威・能力・支配また營に此の世のみならず、來らんとする世にも稱ふる凡ての名の上に置き、 ^{三二}萬の物をその足の下に服はせ、彼を萬の物の上に首として教會に與へ給へり。 ^{三三}この教會は彼の體にして萬の物をもて萬の物に満し給ふ者の満つる所なり。

第二章

^一汝ら前には咎と罪によりて死にたる者にして、 ^二この世の習慣に従ひ、空中の權を執る宰、すなはち不從順の子らの中に今なほ働く靈の宰にしたがひて歩めり。 ^三我等もみな前には彼らの中に在り、肉の慾に従ひて日をおくり肉と心との欲する隨をなし、 ^四他の者のごとく生れながら怒の子なりき。 ^五されど神は憐憫に富み給ふが故に我らを愛する大なる愛をもて、 ^六咎によりて死にたる我等をすらキリスト・イエスに由りてキリストと共に活かし、 ^七汝らの救はれしは恩恵によれり。 ^八共に甦へらせ、共に天の處に坐せしめ給へり。 ^九これキリスト・イエスに由りて我らに施したまふ仁慈をもて、 ^{一〇}其の恩恵の極めて大なる富を、來らんとする後の世々に顯さんとてなり。 ^{一一}汝らは恩恵により、信仰によりて救はれたり、是おのれに由るにあらず、神の賜物なり。 ^{一二}行爲に由るにあらず、これ誇る者のなからん爲なり。 ^{一三}我らは神に造られたる者にして、神の預じめ備へ給ひし善き業に歩むべく、キリスト・イエスの中に造られたるなり。 ^{一四}されば記憶せよ、肉によりては異邦人にして、手にて肉に行ひたるかの割禮ありと稱ふる者に無割禮と稱へらるる汝ら、 ^{一五}曩にはキリストなく、イスラエルの民籍に遠く、約束に屬する諸般の契約に與りなく、世に在りて希望なく、神なき者

なりき。されど前に遠かりし汝ら今キリスト・イエスに在りて、キリストの血によりて近づくことを得たり。彼は我らの平和にして己が肉により、様々の誠命の規より成る律法を廢して二つのものを一つとなし、怨なる隔の中籬を毀ち給へり。これは二つのものを己に於て一つの新しい人に造りて平和をなし、十字架によりて怨を滅ぼし、また之によりて二つのものを一つの體となして神と和がしめん爲なり。かつ來りて、遠かりし汝等にも平和を宣べ、近きものにも平和を宣へ給へり。そはキリストによりて我ら二つのもの一つ御靈にありて父に近づくことを得たればなり。然れば汝等はもはや、旅人また寄寓人にあらず、聖徒と同じ國人また神の家族なり。汝らは使徒と預言者との基の上に建てられたる者にして、キリスト・イエス自らその隅の首石たり。おのおのの建造物、かれに在りて建て合せられ、彌増に聖なる宮、主のうちに成るなり。汝等もキリストに在りて共に建てられ、御靈によりて神の御住となるなり。

第三章

この故に汝ら異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となれる我らにウロ——汝等のために我に賜ひたる神の恩恵の經綸は汝ら聞きしならん、即ち我まへに簡單に書きおくりし如く、この奥義は默示にて我に示された

り。汝等これを讀みてキリストの奥義にかかはる我が悟を知ることを得べし。この奥義は今御靈によりて聖使徒と聖預言者と共に顯されし如くに、前代には人の子らに示されざりき。即ち異邦人が福音によりキリスト・イエスに在りて共に世嗣となり、共に一體となり、共に約束に與る者となる事なり。我はその福音の役者とせらる。これ神の能力の活動に隨ひて我に賜ふ恵の賜物によるなり。我は凡ての聖徒のうちの最小き者よりも小き者なるに、キリストの測るべからざる富を異邦人に傳へ、また萬物を造り給ひし神のうちに世々隠れたる奥義の經綸の如何なるもの乎をあらはす恩恵を賜はりたり。いま教會によりて神の豊なる智慧を天の處にある政治と權威とに知らしめん爲なり。これは永遠より我らの主キリスト・イエスの中に、神の定め給ひし御旨によるなり。我らは彼に在りて彼を信ずる信仰により、臆せず疑はずして神に近づくことを得るなり。されば汝らに請ふ、わが汝等のために受くる患難に就きて落膽すな、是なんぢらの譽なり。この故に我は天と地とに在る諸族の名の起るところの父に跪づきて願ふ。父その榮光の富にしたがひて、御靈により力をもて汝らの内なる人を強くし、信仰によりてキリストを汝らの心に住はせ、汝らをして愛に根ざし、愛を基とし、

ての聖徒とともにキリストの愛の廣さ・長さ・高さ・深さの如何許なるかを悟り、
一九 その測り知る可らざる愛を知ることを得しめ、凡て神に満てる者を汝らに満しめ
給はん事を。
二〇 願くは我らの中にはたらく能力に隨ひて、我らの凡て求むる所、すべて思ふ

所よりも甚く勝る事をなし得る者に、
二一 榮光世々限りなく教會によりて、又キリス
ト・イエスによりて在らんことを、アアメン。

第四章

一 されば主に在りて囚人たる我なんぢらに勸む。汝ら召されたる召に
適ひて歩み、
二 事毎に謙遜と柔和と寛容とを用ひ、愛をもて互に忍
び、
三 平和の繋のうちに勉めて御靈の賜ふ一致を守れ。
四 體は一つ、御靈は一つな
り。汝らが召にかかはる一つ望をもて召されたるが如し。
五 主は一つ、信仰は一
つ、バプテスマは一つ、
六 凡ての者の父なる神は一つなり。
七 神は凡てのものの上に
在し、凡てのものを貫き、凡てのもの内に在したまふ。
八 我等はキリストの賜物
の量に隨ひて、おのおの恩恵を賜はりたり。
九 されば云へることあり、『かれ高き
處に昇りしとき、多くの虜をひきゐ、人々に賜物を賜へり』と。
一〇 既に昇りしと云
へば、まづ地の低き處まで降りしにあらざや。
一一 降りし者は即ち萬の物に満たん爲

に、もろもろの天の上に昇りし者なり。
一二 彼は或人を使徒とし、或人を預言者と
し、或人を傳道者とし、或人を牧師・教師として與へ給へり。
一三 これ聖徒を全うし
て職を行はせ、キリストの體を建て、
一四 我等をしてみな信仰と神の子を知る知識と
に一致せしめ、全き人、すなはちキリストの満足れるほどに至らせ、
一五 また我等は
もはや幼童ならず、人の欺騙と誘惑の術たる悪巧とより起る様々の教の風に吹き
まはされず、
一六 ただ愛をもて眞を保ち、
一七 育ちて凡てのこと、首なるキリストに達せ
ん爲なり。
一八 彼を本とし全身は凡ての節々の助にて整ひ、
一九 かつ聯り、肢體おのおの
量に應じて働くにより、その體成長し、自ら愛によりて建てらるるなり。

二〇 されば我これを言ひ、主に在りて證す、なんぢら今よりのち異邦人のその心
の虚無に任せて歩むが如く歩むな。
二一 彼らは念暗くなりて其の内なる無知により、
二二 心の頑固によりて神の生命に遠ざかり、
二三 恥を知らず、
二四 放縱に凡ての汚穢を行はんと
して己を好色に付せり。
二五 されど汝らは斯の如くならん爲にキリストを學べるにあ
らず。
二六 汝らは彼に聞き、
二七 彼に在りてイエスにある眞理に循ひて教へられしなら
ん。
二八 即ち汝ら誘惑の慾のために亡ぶべき前の動作に屬ける舊き人を脱ぎすて、
二九 心の靈を新にし、
三〇 眞理より出づる義と聖とにて、
三一 神に象り造られたる新しき人

を著るべきことなり。

二五 されば虚偽をすてて各自その隣に實をかたれ、我ら互に肢なればなり。二六 汝ら怒るとも罪を犯すな、憤恚を日の入るまで續くな。二七 悪魔に機會を得さすな。

二八 盗する者は今よりのち盗すな、寧ろ貧しき者に分け與へ得るために手づから働きて善き業をなせ。二九 惡しき言を一切、なんぢらの口より出すな、ただ時に隨ひて人の徳を建つべき善き言を出して聽く者に益を得させよ。三〇 神の聖靈を憂ひしむな、

汝らは贖罪の日のために聖靈にて印せられたるなり。三一 凡ての苦・憤恚・怒・喧噪・誹謗、および凡ての惡意を汝等より棄てよ。三二 互に仁慈と憐憫とあれ、キリストに在りて神の汝らを救し給ひしごとく汝らも互に救せ。

三三 凡ての淫行のもの、汚れたるもの、貪るもの、即ち偶像を拜む者等のキリストと神との國の世嗣たること

第五章

一 されば汝ら愛せらるる子供のごとく、神に效ふ者となれ。二 又キリストの汝らを愛し、我らのために己を馨しき香の獻物とし犠牲として、神に獻げ給ひし如く愛の中をあゆめ。三 聖徒たるに適ふごとく、淫行、もろもろの汚穢、また慳貪を汝らの間にて稱ふる事だに爲な。四 また恥づべき言・愚なる話・戯言を言ふな、これ宜しからぬ事なり、寧ろ感謝せよ。五 凡て淫行のもの、

汚れたるもの、貪るもの、即ち偶像を拜む者等のキリストと神との國の世嗣たること

とを得ざるは、汝らの確く知る所なり。六 汝ら人の虚しき言に欺かるな、神の怒はこれらの事によりて不從順の子らに及ぶなり。七 この故に彼らに與する者となるな。八 汝ら舊は闇なりしが、今は主に在りて光となれり、光の子供のごとく歩め。九 (光の結ぶ實はもろもろの善と正義と誠實となり) 一〇 主の喜び給ふところの如何なるかを辨へ知れ。一一 實を結ばぬ暗き業に與する事なく反つて之を責めよ。一二 彼らが隠れて行ふことは之を言ふだに恥づべき事なり。一三 凡て斯る事は責めらるると

き、光にて顯さる、顯さるる者はみな光となるなり。一四 この故に言ひ給ふ、『眠れる者よ、起きよ、死人の中より立ち上れ。然らばキリスト汝を照し給はん』

一五 されば慎みてその歩むところに心せよ、智からぬ者の如くせず、智き者の如くし、また機會をうかがへ、そは時惡しければなり。一七 この故に愚とならず、主の御意の如何を悟れ。一八 酒に酔ふな、放蕩はその中にあり、寧ろ御靈にて滿され、

詩と讚美と靈の歌とをもて語り合ひ、また主に向ひて心より且うたひ、かつ讚美せよ。一九 凡ての事に就きて常に我らの主イエス・キリストの名によりて父なる神に感謝し、

二〇 妻たる者よ、主に服ふごとく己の夫に服へ、二三 キリストは自ら體の救主にし

二三 妻たる者よ、主に服ふごとく己の夫に服へ、二三 キリストは自ら體の救主にし

二三 妻たる者よ、主に服ふごとく己の夫に服へ、二三 キリストは自ら體の救主にし

二三 妻たる者よ、主に服ふごとく己の夫に服へ、二三 キリストは自ら體の救主にし

二三 妻たる者よ、主に服ふごとく己の夫に服へ、二三 キリストは自ら體の救主にし

て教會の首なるごとく、夫は妻の首なればなり。教會のキリストに服ふごとく、妻も凡てのこと夫に服へ。夫たる者よ、キリストの教會を愛し、之がために己を捨て給ひしごとく汝らも妻を愛せよ。キリストの己を捨て給ひしは、水の洗をもて言によりて教會を潔め、これを聖なる者として、汚點なく皺なく、凡て斯のとき類なく、潔き瑕なき尊き教會を、おのれの前に建てん爲なり。斯のごとく夫はその妻を己の體のごとく愛すべし、妻を愛するは己を愛するなり。己の身を憐む者は曾てあることなし、皆これを育て養ふ、キリストの教會に於けるも亦かくの如し。我らは彼の體の肢なり、『この故に人は父母を離れ、その妻に合ひて二人のもの一體となるべし』この奥義は大なり、わが言ふ所はキリストと教會とを指せるなり。汝等おのおの己のごとく其の妻を愛せよ、妻も亦その夫を敬ふべし。

第六章 = 子たる者よ、なんぢら主にありて兩親に順へ、これ正しき事なり。『なんぢの父母を敬へ（これ約束を加へたる誠命の首なり）』然らば、なんぢ幸福を得、また地の上に壽長からん』父たる者よ、汝らの子供を怒らすな、ただ主の薰陶と訓戒とをもて育てよ。

僕たる者よ、キリストに従ふごとく畏れをののき、眞心をもて肉につける主

人に従へ。人を喜ばする者の如く、ただ目の前の事のみを勤めず、キリストの僕のごとく心より神の御旨をおこなひ、人に事ふる如くせず、主に事ふるごとく快くつかへよ。そは奴隷にもあれ、自主にもあれ、各自おこなふ善き業によりて主より其の報を受くることを汝ら知ればなり。主人たる者よ、汝らも僕に對し斯く行ひて威嚇を止めよ、そは彼らと汝らとの主は天に在して偏り視給ふことなきを汝ら知ればなり。

終に言はん、汝ら主にありて其の大能の勢威に頼りて強かれ。惡魔の術に向ひて立ち得んために、神の武具をもて鎧ふべし。我らは血肉と戦ふにあらず、政治・權威、この世の暗黒を掌どるもの、天の處にある惡の靈と戦ふなり。この故に神の武具を執れ、汝ら惡しき日に遭ひて仇に立ちむかひ、凡ての事を成就して立ち得んためなり。汝ら立つに誠を帯として腰に結び、正義を胸當として胸に當て、平和の福音の備を靴として足に穿け。この他なほ信仰の盾を執れ、之をもて惡しき者の凡ての火矢を消すことを得ん。また救の冑および御靈の劍、すなはち神の言を執れ。常にさまざまの祈と願とをなし、御靈によりて祈り、また目を覺して凡ての聖徒のためにも願ひて倦まざれ。又わが口を開くとき、言を賜はり、

憚らずして福音の奥義を示し、^{三〇}語るべき所を憚らず語り得るやうに、我がためにも祈れ、我はこの福音のために使者となりて鎖に繋がれたり。^{三一}
 愛する兄弟、主^{二二}に在りて忠實なる役者^{三二}テキコ、我が情況、わが爲す所のこと^{三三}を具に汝らに知らせん。われ彼を遣すは、我が事を汝らに知らせ、汝らの心を慰めしめん爲なり。^{三四}
 願くは父なる神および主イエス・キリストより賜ふ平安と信仰に伴へる愛と、兄弟たちに在らんことを。願くは朽ちぬ愛をもて我らの主イエス・キリストを愛する凡ての者に御恵あらんことを。

ピリピ人への書

第一章

キリスト・イエスの僕たる我ら、パウロとテモテと、書をピリピに贈る。願くは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜ふ恩恵と平安

と、汝らに在らんことを。

われ汝らを憶ふごとに、我が神に感謝し、常に汝ら衆のために、願のつどつど喜びて願をなす。是なんぢら初の日より今に至るまで福音を弘むることに與るが故なり。我は汝らの衷に善き業を始め給ひし者の、キリスト・イエスの日まで之を全うし給ふべきことを確信す。わが斯くも汝ら衆を思ふは當然の事なり、我が縲縲にある時にも、福音を辯明して之を堅うする時にも、汝らは皆われと共に恩恵に與るによりて、我が心になればなり。我いかにキリスト・イエスの心をもて汝ら衆を戀ひ慕ふか、その證をなし給ふ者は神なり。我は祈る、汝らの愛、知識ともろもろの悟とによりて彌が上にも増加り、善惡を辨へ知り、キリストの日に至るまで潔よくして躓くことなく、イエス・キリストによる義の果を充して、神の榮光と譽とを顯さん事を。

兄弟よ、我はわが身にありし事の反つて福音の進歩の助となりしを汝らが知らんことを欲するなり。即ち我が縲縲のキリストの爲なることは、近衛の全營にも、他の凡ての人にも顯れ、かつ兄弟のうちの多くの者は、わが縲縲によりて主を信ずる心を厚くし、懼るる事なく、ますます勇みて神の言を語るに至れり。或

者は嫉妬と分争とによりて、キリストを宣傳へ、あるものは善き心によりて之を宣傳ふ。これは福音を辯明するために我が立てられたることを知り、愛によりてキリストを宣べ、かれは我が縲綆に患難を加へんと思ひ、誠意によらず、徒黨によりて之を宣ぶ。さらば如何ん、外貌にもあれ、眞にもあれ、孰も宣ぶる所はキリストなれば、我これを喜ぶ、また之を喜ばん。そは此のこの汝らの祈とイエス・キリストの御靈の賜物とによりて我が救となるべきを知らばなり。これは我が何事をも恥ぢずして、今も常のごとく聊かも臆することなく、生くるにも死ぬるにも我が身によりて、キリストの崇められ給はんことを切に願ひ、また望むところに適へるなり。我にとりて、生くるはキリストなり、死ぬるもまた益なり。されど若し肉體にて生くる事、わが勤勞の果となるならば、孰を選ぶべきか、我これを知らず。我はこの二つの間に介まれたり。わが願は世を去りてキリストと偕に居らんことなり、これ遙に勝るなり。されど我なほ肉體に留るは汝らの爲に必要なり。我これを確信する故に、なほ存へて汝らの信仰の進歩と喜悅とのために汝等すべての者と偕に留らんことを知る。これは我が再び汝らに到ることにより、汝らキリスト・イエスに在りて我にかかはる誇を増さん爲なり。汝等ただキリス

トの福音に相應しく日を過せ、然らば我が往きて汝らを見るも、離れゐて汝らの事をきくも、汝らが靈を一つにして堅く立ち、心を一つにして福音の信仰のために共に戦ひ、凡ての事において逆ふ者に驚かされぬを知ることを得ん。その驚かされぬは、彼らには亡の兆、なんぢらには救の兆にて此は神より出づるなり。汝等はキリストのために營に彼を信する事のみならず、また彼のために苦しむ事をも賜りたればなり。汝らが遭ふ戦闘は、曩に我の上に見しところ、今また我に就きて聞くところに同じ。

第二章

この故に若しキリストによる勸、愛による慰安、御靈の交際、また憐憫と慈悲とあらば、なんぢら念を同じうし、愛を同じうし、心を合せ、思ふことを一つにして、我が喜悅を充たしめよ。何事にまれ、徒黨また虚榮のために爲な、おのおの謙遜をもて互に人を己に勝れりと爲よ。おのおの己が事のみを顧みず、人の事をも顧みよ。汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。即ち彼は神の貌にて居給ひしが、神と等しくある事を固く保たんとは思はず、反つて己を空しうし僕の貌をとりて人の如くなれり。既に人の状にて現れ、己を卑らして死に至るまで、十字架の死に至るまで順ひ給へり。この故に神は彼を

高く上げて、之に諸般の名にまさる名を賜ひたり。一〇 これ天に在るもの、地に在るもの、地の下にあるもの、悉とくイエスの名によりて膝を屈め、二〇 且もろもろの舌の『イエス・キリストは主なり』と言ひあらはして、榮光を父なる神に歸せん。爲なり。

三三 されば我が愛する者よ、なんぢら常に服ひしごとく、我が居る時のみならず、我が居らぬ今もますます服ひ、畏れ戰きて己が救を全うせよ。二三 神は御意を成さんために汝らの衷にはたらき、汝等をして志望をたて、業を行はしめ給へばなり。二四 なんぢら咳かず、疑はずして凡ての事をおこなへ。一五 是なんぢら責むべき所なく素直にして此の曲れる邪惡なる時代に在りて神の瑕なき子とならん爲なり。汝らは生命の言を保ちて、世の光のごとく此の時代に輝く。二六 斯て我が走りしところ、勞せしところ、空しからず、キリストの日に、われ誇ることを得ん。二七 さらば汝らの信仰の供物と祭とに加へて、我が血を灌ぐとも我は喜ばん、なんぢら衆と共に喜ばん。二八 斯く汝等もよろこべ、我とともに喜べ。一九 われ汝らの事を知りて慰安を得んとて、速かにテモテを汝らに遣さんことを主イエスに頼りて望む。三〇 そは彼のほかに我と同じ心をもて眞實に汝らのことを慮

ばかる者なければなり。三一 人は皆イエス・キリストの事を求めず、唯おのれの事のみを求む。三二 されどテモテの鍊達なるは、汝らの知る所なり、即ち子の父に於ける如く我とともに福音のために勤めたり。三三 この故に我わが身の成行を見れば、直ちに彼を遣さんことを望む。三四 我もまた速かに往くべきを主によりて確信す。三五 されど今は先われと共に働き、共に戦ひし兄弟、すなはち汝らの使として我が窮乏を補ひしエパフロデトを汝らに遣すを必要のことと思ふ。三六 彼は汝等すべての者を戀ひしたひ、又おのが病みたることの汝らに聞えしを以て悲しみ居るに因りてなり。三七 彼は實に病にかかりて死ぬるばかりなりしが、神は彼を憐みたまへり、雷に彼のみならず、我をも憐み、憂に憂を重ねしめ給はざりき。三八 この故に急ぎて彼を遣す、なんぢらが再び彼を見て喜ばん爲なり。又わが憂を少うせん爲なり。三九 されば汝ら主にありて歡喜を盡して彼を迎へ、かつ斯のごとき人を尊べ。四〇 彼は汝らが我を助くるに當り、汝らの居らぬを補はんとて、己が生命を賭け、キリストの事業のために死ぬるばかりに爲りたればなり。

第三章

終に言はん、我が兄弟よ、なんぢら主に在りて喜べ。なんぢらに同じことを書きおくるは、我に煩はしきことなく、汝等には安然なり。

二 なんぢら犬に心せよ、悪しき労働人に心せよ、肉の割禮ある者に心せよ。
 三 神の御靈によりて禮拜をなし、キリスト・イエスによりて誇り、肉を恃まぬ我ら
 四 は眞の割禮ある者なり。されど我は肉にも恃むことを得るなり。もし他の人、肉
 五 に恃む所ありと思はば、我は更に恃む所あり。我は八日めに割禮を受けたる者に
 六 して、イスラエルの血統、ベニヤミンの族、ヘブル人より出でたるヘブル人なり。
 七 律法に就きてはパリサイ人、熱心につきては教會を迫害したるもの、律法によれ
 八 る義に就きては責むべき所なかりし者なり。されど曩に我が益たりし事はキリス
 九 トのために損と思ふに至れり。然り、我はわが主キリスト・イエスを知ることの
 一〇 優れたるために、凡ての物を損なりと思ひ、彼のために既に凡ての物を損せしが、
 一一 之を塵芥のごとく思ふ。これキリストを獲、かつ律法による己が義ならで、唯キ
 一二 リストを信ずる信仰による義、すなはち信仰に基きて神より賜る義を保ち、キリス
 一三 トに在るを認められ、キリストとその復活の力とを知り、又その死に效ひて彼の
 一四 苦難にあづかり、如何もして死人の中より甦へることを得んが爲なり。われ既
 一五 に取れり、既に全うせられたりと言ふにあらず、唯これを捉へんとて追求む。キリ
 一六 ストは之を得させんとて我を捉へたまへり。兄弟よ、われは既に捉へたりと思は

一 ず、唯この一事を務む、即ち後のものを忘れ、前のものに向ひて勵み、標準を指
 二 して進み、神のキリスト・イエスに由りて上に召したまふ召にかかはる褒美を得ん
 三 とて之を追求む。されば我等のうち成人したる者は、みな斯のごとき思を懐くべ
 四 し、汝等もし何事にても異なる思を懐き居らば、神これをも示し給はん。ただ我
 五 等はその至れる所に隨ひて歩むべし。
 六 兄弟よ、なんぢら諸共に我に效ふものとなれ、且なんぢらの模範となる我ら
 七 に循ひて歩むものを視よ。そは我しは汝らに告げ、今また涙を流して告ぐる
 八 如く、キリストの十字架に敵して歩む者おほければなり。彼らの終は滅亡なり。
 九 おのが腹を神となし、己が恥を光榮となし、ただ地の事のみを念ふ。されど我ら
 一〇 の國籍は天に在り、我らは主イエス・キリストの救主として其の處より來りたまふ
 一一 を待つ。彼は萬物を己に服はせ得る能力によりて、我らの卑しき狀の體を化へて
 一二 己が榮光の體に象らせ給はん。

第四章

一 この故に我が愛するところ、慕ふところの兄弟、われの喜悅、われ
 二 の冠冕たる愛する者よ、斯のごとく主にありて堅く立て。
 三 我ユウオデヤに勧め、セントケに勧む、主にありて心を同じうせんことを。

三 また眞實に我と軛を共にする者よ、なんぢに求む。この二人の女を助けよ、彼らはクレメンヌ其のほか生命の書に名を録されたる我が同勞者と同じく、福音のため我とともに勤めたり。

汝ら常に主にありて喜べ、我また言ふ、なんぢら喜べ。凡ての人に汝らの寛容を知らしめよ、主は近し。何事をも思ひ煩ふな、ただ事ごとに祈をなし、願をなし、感謝して汝らの求を神に告げよ。さらば凡て人の思にすぐる神の平安は汝らの心と思とをキリスト・イエスによりて守らん。

終に言はん兄弟よ、凡そ眞なること、凡そ尊ぶべきこと、凡そ正しきこと、凡そ潔よきこと、凡そ愛すべきこと、凡そ令聞あること、如何なる徳、いかなる譽にても汝等これを念へ。なんぢら我に學びしところ、受けしところ、聞きしところ、見し所を皆おこなへ、然らば平和の神、なんぢらと偕に在さん。

汝らが我を思ふ心の今また萌したるを、われ主にありて甚く喜ぶ。汝らは固より我を思ひたるなれど、機を得ざりしなり。われ窮乏によりて之を言ふにあらず、我は如何なる狀に居るとも、足ることを學びたればなり。我は卑賤に在る道を知り、富に在る道を知る。また飽くことにも、飢うることにも、富むことに

も、乏しき事にも、一切の秘訣を得たり。我を強くし給ふ者によりて、凡ての事をなし得るなり。されど汝らが我が患難に與りしは善き事なり。ピリピ人よ、汝らも知る、わが汝らに福音を傳ふる始、マケドニヤを離れ去るとき授受して我が事に與りしは、汝等のみにして他の教會には無かりき。汝らは我がテサロニケに居りし時に、一度ならず二度までも我が窮乏に物贈れり。これ贈物を求むるにあらず、唯なんぢらの益となる實の繁からんことを求むるなり。我には凡ての物そなはりて餘りあり、既にエパフロデトより汝らの贈物を受けたれば、飽き足れり。これは馨しき香にして神の享け給ふところ、喜びたまふ所の供物なり。斯て、わが神は己の富に隨ひ、キリスト・イエスによりて、汝らの凡ての窮乏を榮光のうち

に補ひ給はん。願くは榮光世々限りなく、我らの父なる神にあれ、アマメン。汝らキリスト・イエスに在りて聖徒おのおのに安否を問へ、我と偕にある兄弟たち、汝らに安否を問ふ。凡ての聖徒、殊にカイザルの家のもの、汝らに安否を問ふ。

願くは主イエス・キリストの恩恵、なんぢらの靈と偕に在らんことを。

コロサイ人への書

第一章

神の御心によりてキリスト・イエスの使徒となれるパウロ及び兄弟
テモテ、書をコロサイに居る聖徒、キリストにありて忠實なる兄弟
に贈る。願くは我らの父なる神より賜ふ恩恵と平安と汝らに在らんことを。

我らは常に汝らの爲に祈りて我らの主イエス・キリストの父なる神に感謝
す。これキリスト・イエスを信ずる汝らの信仰と凡ての聖徒に對する汝らの愛と
につきて聞きたればなり。斯く聖徒を愛するは、汝らの爲に天に蓄へあるものを
望むに因る。この望のことは汝らに及べる福音の眞の言によりて汝らが曾て聞きし
所なり。この福音は全世界にも及び、果を結びて増々大になれり。汝らが神の
恩恵をききて、眞に之を知りし日より、汝らの中に然りしが如し。汝らが、我ら
と共に僕たる愛するエパfrasより學びたるは、この福音なり。彼は汝らの爲にキ
リストの忠實なる役者にして、汝らが御靈によりて懐ける愛を我らに告げたり。

この故に我らこの事を聞きし日より汝等のために絶えず祈り、かつ求むる
は、汝ら靈のもろもろの智慧と穎悟とをもて神の御意を具に知り、凡てのこと主
を悦ばせんが爲に、その御意に従ひて歩み、凡ての善き業によりて果を結び、いよ
いよ神を知り、また神の榮光の勢威に隨ひて賜ふもろもろの力によりて強くな
り、凡ての事よろこびて忍び、かつ耐へ、而して我らを光にある聖徒の嗣業に與
るに足る者とし給ひし父に感謝せん事なり。父は我らを暗黒の權威より救ひ出し
て、その愛しみ給ふ御子の國に遷したまへり。我らは御子に在りて贖罪すなはち
罪の赦を得るなり。彼は見得べからざる神の像にして、萬の造られし物の先に生
れ給へる者なり。萬の物は彼によりて造らる、天に在るもの、地に在るもの、見
ゆるもの、見えぬもの、或は位、あるひは支配、あるひは政治、あるひは權威、み
な彼によりて造られ、彼のために造られたればなり。彼は萬の物より先にあり、
萬の物は彼によりて保つことを得るなり。而して彼はその體なる教會の首なり、
彼は始にして死人の中より最先に生れ給ひし者なり。これ凡ての事に就きて長とな
らん爲なり。神は凡ての満足れる徳を彼に宿して、その十字架の血によりて平
和をなし、或は地にあるもの、或は天にあるもの、萬の物をして己と和がしむるを
善しと爲給ひたればなり。汝等もとは惡しき業を行ひて神に遠かり、心にて其の
敵となりしが、今は神キリストの肉の體をもて其の死により汝等をして己と和が

三〇

二〇

しめ、潔く瑕なく責むべき所なくして、己の前に立しめんと爲給ふなり。二三 汝等も
 し信仰に止り、之に基きて堅く立ち福音の望より移らずば、斯く爲らるることを得
 べし。此の福音は汝らの聞きし所、また天の下なる凡ての造られし物に宣傳へられ
 たるものにして、我パウロはその役者となれり。

二四 われ今なんぢらの爲に受くる苦難を喜び、又キリストの體なる教會のために
 我が身をもてキリストの患難の缺けたるを補ふ。二五 われ神より汝等のために與へら
 れたる職に隨ひて教會の役者となれり。二六 これ神の言、すなはち歴世歴代かくれて
 今神の聖徒に顯れたる奥義を宣傳へんとてなり。二七 神は聖徒をして異邦人の中なる
 この奥義の榮光の富の如何許なるかを知らしめんと欲し給へり、此の奥義は汝らの
 中に在すキリストにして榮光の望なり。二八 我らは此のキリストを傳へ、智慧を盡し
 て凡ての人を訓戒し、凡ての人を教ふ。これ凡ての人をしてキリストに在り、全く
 なりて神の前に立つことを得しめん爲なり。二九 われ之がために我が衷に能力をもて
 働き給ふものの活動にしたがひ、力を盡して勞するなり。

第二章

一 我なんぢら及びラオデキヤに居る人々、その他すべて我が肉體の顔
 をまだ見ぬ人のために如何に苦心するかを汝らの知らんことを欲す。

二 斯く苦心するは、彼らが心慰められ、愛をもて相列り、全き穎悟の凡ての富を得
 て、神の奥義なるキリストを知らん爲なり。三 キリストには智慧と知識との凡ての
 寶藏れあり。四 我これを言ふは、巧なる言をもて人の汝らを欺くこと勿らん爲な
 り。五 われ肉體にては汝らと離れ居れど、靈にては汝らと偕に居りて喜び、また汝
 らの秩序あるとキリストに對する信仰の堅きとを見るなり。

六 汝らキリスト・イエスを主として受けたるにより、其のごとく彼に在りて歩
 め。七 また彼に根ざして、その上に建てられ、かつ教へられし如く信仰を堅くし、
 八 溢るるばかり感謝せよ。

九 なんぢら心すべし、恐くはキリストに従はずして人の言傳と世の小學とに従
 ひ、人を惑す虚しき哲學をもて汝らを奪ひ去る者あらん。一〇 それ神の満足れる徳は
 ことごとく形體をなしてキリストに宿れり。一〇 汝らは彼に在りて満足れるなり。彼
 は凡ての政治と權威との首なり。一一 汝らまた彼に在りて手をもて爲ざる割禮を受け
 たり、即ち肉の體を脱ぎ去るものにして、キリストの割禮なり。一二 汝らバプテスマ
 を受けしとき、彼とともに葬られ、又かれを死人の中より甦へらせ給ひし神の活動
 を信ずるによりて、彼と共に甦へらせられたり。一三 汝ら前には諸般の咎と肉の割禮

なきとに因りて死にたる者なりしが、神は汝らを彼と共に生かし、我らの凡ての咎を救し、^{二四} かつ我らを責むる規の證書、すなはち我らに逆ふ證書を塗抹し、これを中間より取り去りて十字架につけ、^{一五} 政治と權威とを褫ぎて之を公然に示し、十字架によりて凱旋し給へり。

然れば汝ら食物あるひは飲物につき、祭あるひは月朔あるひは安息日の事につきて、誰にも審かるな。^{一七} 此等はみな來らんとする者の影にして、其の本體はキリストに屬けり。^{一八} 殊更に謙遜をよそほひ、御使を拜する者に汝らの褒美を奪はるな。斯る者は見し所のものに基づき、肉の念に隨ひて徒らに誇り、^{一九} 首に屬くことを爲ざるなり。全體は、この首によりて節々維々に助けられ、相聯り、神の育にて生長するなり。

汝等もしキリストと共に死にて此の世の小學を離れしならば何ぞなほ世に生ける者のごとく人の誠命と教とに循ひて^{二二} 『捫るな、味ふな、觸るな』と云ふ規の下に在るか。^{二三} (此等はみな用ふれば盡くる物なり)^{二三} これらの誠命は、みづから定めたる禮拜と謙遜と身を惜まぬ事によりて智慧あるごとく見ゆれど實は肉慾の放縱を防ぐ力なし。

第三章

汝等もしキリストと共に甦へらせられしならば、上にあるものを求めよ、キリスト彼處に在りて神の右に坐し給ふなり。^二 汝ら上にあるものを念ひ、地に在るものを念ふな、^三 汝らは死にたる者にして其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。^四 我らの生命なるキリストの現れ給ふとき、汝らも之とともに榮光のうちに現れん。

されば地にある肢體、すなはち淫行・汚穢・情慾・惡慾、また慳貪を殺せ、慳貪は偶像崇拜なり。^六 神の怒は、これらの事によりて不從順の子らに來るなり。^七 汝らも斯る人の中に目を送りし時は、これらの惡しき事に歩めり。^八 然れど今は凡て此等のこと及び怒・憤恚・惡意を棄て、^九 譏と恥づべき言とを汝らの口より棄てよ。^{一〇} 互に虚言をいふな、汝らは既に舊き人とその行爲とを脱ぎて、^{一〇} 新しき人を著たればなり。この新しき人は、これを造り給ひしものの像に循ひ、いよいよ新になりて知識に至るなり。^{一二} 斯てギリシヤ人とユダヤ人、割禮と無割禮、あるひは夷狄・スクテヤ人・奴隸・自主の別ある事なし、それキリストは萬の物なり、萬のものの中にあり。

この故に汝らは神の選民にして聖なる者また愛せらるる者なれば、慈悲の

心・仁慈・謙遜・柔和・寛容を著よ。^{一三} また互に忍びあひ、若し人に責むべき事あらば互に恕せ、主の汝らを恕し給へる如く汝らも然すべし。^{一四} 凡て此等のものの上に愛を加へよ、愛は徳を全うする帯なり。^{一五} キリストの平和をして汝らの心を掌どらしめよ、汝らの召されて一體となりたるは、これが爲なり、汝ら感謝の心を懐け。^{一六} キリストの言をして豊に汝らの衷に住ましめ、凡ての智慧によりて、詩と讚美と靈の歌とをもて、互に教へ、互に誠戒し、恩恵に感じて心のうちに神を讚美せよ。^{一七} また爲す所の凡ての事あるひは言あるひは行爲みな主イエスの名に頼りて爲し、彼によりて父なる神に感謝せよ。^{一八}

妻たる者よ、その夫に服へ、これ主にある者のなすべき事なり。^{一九} 夫たる者よ、その妻を愛せよ、苦をもて之を待ふな。^{二〇} 子たる者よ、凡ての事みな兩親に順へ、これ主の喜びたまふ所なり。^{二一} 父たる者よ、汝らの子供を怒らすな、或は落膽することあらん。^{二二} 僕たる者よ、凡ての事みな肉につける主人にしたがへ、人を喜ばする者の如く、ただ眼の前の事のみを勤めず、主を畏れ、眞心をもて從へ。^{二三} 汝ら何事をなすにも人に事ふる如くせず、主に事ふる如く心より行へ。^{二四} 汝らは主より報として嗣業を受くることを知ればなり。汝らは主キリストに事ふる者なり。

不義を行ふ者はその不義の報を受けん、主は偏り視給ふことなし。^{二五}

第四章

主人たる者よ、汝らも天に主あるを知れば、義と公平とをもて其の僕をあしらへ。

汝ら感謝しつつ目を覺まして祈を常にせよ。^三 また我らの爲にも祈りて、神

の我らに御言を傳ふる門をひらき、我等をしてキリストの奥義を語らしめ、^四 之を我が語るべき如く顯させ給はんことを願へ、我はこの奥義のために繋れたり。^五 汝ら機をうかがひ、外の人に對し智慧をもて行へ。汝らの言は常に恵を用ひ、

鹽にて味つけよ、然らば如何して各人に答ふべきかを知らん。

愛する兄弟、忠實なる役者、主にありて我とともに僕たるテキコ、我がこと

を具に汝らに知らせん。^八 われ殊に彼を汝らに遣すは、我らの事を知らしめ、又な

んぢらの心を慰めしめん爲なり。^九 汝らの中の一人、忠實なる愛する兄弟オネシモ

を彼と共につかはす、彼等この處の事を具に汝に知らせん。

我と共に囚人となれるアリストタルコ及びバルナバの從弟なるマルコ、汝らに

安否を問ふ。此のマルコに就きては汝ら既に命を受けたり、彼もし汝らに到らば之を接けよ。^二 またユストと云へるイエス汝らに安否を問ふ。割禮の者の中ただ此の

三人のみ神の國のために働く我が同勞者にして我が慰安となりたる者なり。一三 汝らの中の一人にてキリスト・イエスの僕なるエバフラス汝らに安否を問ふ。彼は常に汝らの爲に力を盡して祈をなし、汝らが全くなり、凡て神の御意を確信して立たんことを願ふ。一三 我かれが汝らとラオデキヤ及びヒエラポリスに在る者との爲に甚く心を勞することを證す。一四 愛する醫者ルカ及びデマス汝らに安否を問ふ。一五 汝らラオデキヤにある兄弟とヌンバ及びその家にある教會とに安否を問へ。一六 この書を汝らの中にて讀みたらば、之をラオデキヤ人の教會にも讀ませ、汝等はまたラオデキヤより來る書を讀め。一七 アルキポに言へ『主において受けし職を慎みて盡せ』と。一八 我パウロ手づから安否を問ふ。わが縲綯を記憶せよ。願くは御惠なんぢらと偕に在らんことを。

テサロニケ人への前の書

第一章 パウロ、シルワノ、テモテ、書を父なる神および主イエス・キリス

トにあるテサロニケ人の教會に贈る。願くは恩恵と平安と汝らに在らんことを。二 われら祈のときに、汝らを憶えて、常に汝ら衆人のために神に感謝す。三 我れ汝らが信仰のはたらき、愛の勞苦、主イエス・キリストに對する望の忍耐を、我らの父なる神の前に絶えず念ふに因りてなり。四 神に愛せらるる兄弟よ、また汝らの選ばれたることを知るに因りてなり。五 それ我らの福音の汝らに至りしは、言にのみ由らず、能力と聖靈と大なる確信とに由れり。且われらが汝らの中にありて汝らの爲に如何なる行爲をなししかは、汝らの知る所なり。六 斯て汝らは、大なる患難のうちにも、聖靈による喜悅をもて御言をうけ、我ら及び主に效ふ者となり、而してマケドニヤ及びアカヤに在る凡ての信者の模範となれり。七 それは主のことは汝等より出でて營にマケドニヤ及びアカヤに響きしのみならず、神に對する汝らの信仰のことは諸方に弘まりたるなり。八 然れば之に就きては、何をも語るに及ばず。九 人々、親しく我らが汝らの中に入りし狀を告げ、また汝らが偶像を棄てて神に歸し、活ける眞の神に事へ、一〇 神の死人の中より甦へらせ給ひし御子、すなはち我らを來らんとする怒より救ひ出すイエスの、天より降りたまふを待ち望むことを告ぐればなり。

第二章

兄弟よ、我らの汝らに到りしことの空しからざりしは、汝ら自ら知る。前に我らは汝らの知ることく、ピリピにて苦難と侮辱を受けたれど、我らの神に頼りて大なる紛争のうちに、憚らず神の福音を汝らに語れり。我らの勸は、迷より出でず、汚穢より出でず、詭計を用ひず、神に嘉せられて福音を委ねられたる者なれば、人を喜ばせんとせず、我らの心を鹽給ふ神を喜ばせ奉つらんとして語るなり。我らは汝らの知ることく何時にても詔諛の言を用ひず、事によせて慳貪をなさず、(神これを證し給ふ) キリストの使徒として重んぜらるべき者なれども、汝らにも他の者にも人よりは譽を求めず、汝らの中にありて優しきこと、母の己が子を育てやしなふ如くなりき。斯く我らは汝らを戀ひ慕ひ、なんぢらは我らの愛する者となりたれば、常に神の福音のみならず、我らの生命をも與へんと願へり。兄弟よ、なんぢらは我らの勞と苦難とを記憶す、我らは汝らの中の一人をも累はすまじとて、夜晝、工をなし、勞しつゝ福音を宣傳へたり。また信じたる汝等にむかひて、如何に潔く正しく、責むべき所なく行ひしかは、汝らも證し、神も證し給ふなり。汝らは知る、我らが父のその子に對するごとく各人に對し、御國と榮光とに招きたまふ神の心に適ひて歩むべきことを勸

め、また勵し、また諭したるを。

斯てなほ我ら神に感謝して已まざるは、汝らが神の言を我らより聞きし時、これを人の言とせず、神の言として受けし事なり。これは誠に神の言にして、汝ら信ずる者のうちに働くなり。兄弟よ、汝らはユダヤに於けるキリスト・イエスにある神の教會に效ふ者となれり、彼らのユダヤ人に苦しめられたる如く、汝らも己が國人に苦しめられたるなり。ユダヤ人は主イエスをも預言者をも殺し、我らを追ひ出し、我らが異邦人に語りて救を得させんとするを拒み、神を悦ばせず、かつ萬民に逆ひ、斯して常に己が罪を充すなり。而して神の怒は、かれらに臨みてその極に至れり。

兄弟よ、われら心は離れねど、顔にて暫時なんぢらと離れ居れば、汝らの顔を見んことを愈々切に願ひて、(我パウロは一度ならず再度までも)なんぢらに到らんと爲たれど、サタンに妨げられたり。我らの主イエスの來り給ふとき、御前における我らの希望、また喜悅、また誇の冠冕は誰ぞ、汝らならずや。實に汝らは我らの光榮、我らの喜悅なり。

第三章

この故に、もはや忍ぶこと能はず、我等のみアテンスに留ることに

決し、^二キリストの福音において神の役者たる我らの兄弟テモテを汝らに遣せり。これは汝らを堅うし、また信仰につきて勧め、^三この患難によりて動さるる者の無からん爲なり。患難に遭ふことの我らに定りたるは、汝等みづから知る所なり。^四我らが患難に遭ふべきことは、汝らと偕に在りしとき預じめ告げたるが、今果して汝らの知るごとく然か成れり。^五この故に最早われ忍ぶこと能はず、試むる者の汝らを試みて、我らの勞の空しくならんことを恐れ、なんぢらの信仰を知らんとて人を遣せり。^六然るに今テモテ汝らより歸りて、汝らの信仰と愛とにつきて喜ばしき音信を聞かせ、又なんぢら常に我らを懇ろに念ひ、我らに逢はんことを切に望み居るは、我らが汝らに、逢はんことを望むに等しと告げたるによりて、兄弟よ、われらは諸般の苦難と患難との中にも汝らの信仰によりて慰安を得たり。^八汝等もし主に在りて堅く立たば我らは生くるなり。^九汝等につきて我らの神の前によるこぶ大なる喜悅のために如何なる感謝をか神に獻ぐべき。^{一〇}我らは夜晝、祈りて汝らの顔を見んことと、汝らの信仰の足らぬ所を補はんことを切に願ふ。^{一一}願くは我らの父なる神みづからと我らの主なるイエスと、我らを導きて汝らに到らせ給はんことを。^{一二}願くは主、なんぢら相互の愛および凡ての人に對する愛

を増し、かつ豊にして、我らが汝らを愛する如くならしめ、^{一三}斯して汝らの心を堅うし、我らの主イエスの、凡ての聖徒と偕に來りたまふ時、われらの父なる神の前に潔くして責むべき所なからしめ給はんことを。

第四章

されば兄弟よ、終に我ら、主イエスによりて汝らに求め、かつ勸む。なんぢら如何に歩みて神を悦ばすべきかを我等より學びし如く、また歩みをる如くに増々進まんことを。^二我らが主イエスに頼りて如何なる命令を與へしかは、汝らの知る所なり。^三それ神の御旨は、なんぢらの潔からんことにして、即ち淫行をつつしめ、各人おのが妻を得て、潔く、かつ貴くし、^四神を知らぬ異邦人のごとく情慾を放縱にすまじきを知り、^五斯る事によりて兄弟を欺き、また掠めざらんことなり。凡て此等のことを行ふ者に主の報し給ふは、わが既に汝らに告げ、かつ證せしごとし。^六神の我らを招き給ひしは、汚穢を行はしめん爲にあらず、潔からしめん爲なり。^七この故に之を拒む者は人を拒むにあらず、汝らに聖靈を與へたまふ神を拒むなり。^八兄弟の愛につきては汝らに書きおくるに及ばず。汝らは互に相愛する事を親しく神に教へられ、^九また既にマケドニヤ全國に在るすべての兄弟を愛するに因り

てなり。然れど兄弟よ、なんぢらに勧む。ますます之を行ひ、^二我らが前に命ぜしごとく力めて安靜にし、己の業をなし、手づから働け。^三これ外の人に對して正しく行ひ、また自ら乏しきことなからん爲なり。^{一三}

兄弟よ、既に眠れる者のことに就きては、汝らの知らざるを好まず、希望なき他の人のごとく歎かざらん爲なり。^{一四}我らの信ずる如く、イエスもし死にて甦へり給ひしならば、神はイエスによりて眠に就きたる者を、イエスと共に連れきたり給ふべきなり。^{一五}われら主の言をもて汝らに言はん、我等のうち主の來りたまふ時に至るまで生きて存れる者は、既に眠れる者に決して先だたじ。^{一六}それ主は、號令と御使の長の聲と神のラツパと共に、みづから天より降り給はん。その時キリストにある死人まづ甦へり、^{一七}後に生きて存れる我らは彼らと共に雲のうちに取り去られ、空中にて主を迎へ、斯ていつまでも主と偕に居るべし。^{一八}然れば此等の言をもて互に相慰めよ。

第五章

兄弟よ、時と期とに就きては汝らに書きおくるに及ばず。^二汝らは主の日の盜人の夜きたるが如くに來ることを、自ら詳細に知ればなり。^三人々の、平和無事なりと言ふほどに、滅亡、にはかに彼らの上に来らん、妊

める婦に産の苦痛の臨むがごとし、必ず遁るることを得じ。^四されど兄弟よ、汝らは暗に居らざれば、盜人の來るごとく其の日なんぢらに追及くことなし。^五それ汝等は、みな光の子ども晝の子供なり。我らは夜に屬く者にあらず、暗に屬く者にあらず。^六されば他の人のごとく眠るべからず、目を覺して慎むべし。^七眠る者は夜眠り、酒に酔ふ者は夜酔ふなり。^八されど我らは晝に屬く者なれば、信仰と愛との胸當を著け、救の望の兜をかむりて慎むべし。^九それ神は我らを怒に遣せんとにあらず、主イエス・キリストに頼りて救を得させんと定め給へるなり。^{一〇}主の我等のために死に給へるは、我等をして寤めをも眠りをるとも己と共に生くることを得しめん爲なり。^{一一}此の故に互に勧めて各自の徳を建つべし、これ汝らが常に爲す所なり。

兄弟よ、汝らに求む。なんぢらの中に勞し、主にありて汝らを治め、汝らを訓戒する者を重んじ、^{一二}その勤勞によりて厚く之を愛し敬へ、また互に相和ぐべし。^{一四}兄弟よ、汝らに勧む、妄なる者を訓戒し、落膽せし者を勵し、弱き者を扶け、凡ての人に對して寛容なれ。^{一五}誰も人に對し惡をもて惡に報いぬやう慎め。ただ相互に、また凡ての人に對して常に善を追ひ求めよ。^{一六}常に喜べ、^{一七}絶えず祈

れ、^{一八} 凡てのこと感謝せよ、これキリスト・イエスに由りて神の汝らに求め給ふ所なり。^{一九} 御靈を熄すな、^{二〇} 預言を蔑すな、^{二一} 凡てのこと試みて善きものを守り、^{二二} 凡て惡の類に遠ざかれ。

^{二三} 願くは平和の神、みづから汝らを全く潔くし、汝らの靈と心と體とを全く守りて、^{二四} 我らの主イエス・キリストの來り給ふとき責むべき所なからしめ給はん事を。^{二五} 汝らを召したまふ者は眞實なれば、之を成し給ふべし。

^{二六} 兄弟よ我らのために祈れ。^{二七} 主によりて汝らに命ず、この書を凡ての兄弟に讀み聞かせよ。^{二八} 願くは主イエス・キリストの恩恵、なんぢらと偕に在らんことを。

テサロニケ人への後の書

第一章 パウロ、シルワノ、テモテ、書を我らの父なる神および主イエス・

キリストに在るテサロニケ人の教會に贈る。^一 願くは父なる神および主イエス・キリストより賜ふ恩恵と平安と、汝らに在らんことを。

^二 兄弟よ、われら汝等につきて常に神に感謝せざるを得ず、これ當然の事なり。そは汝らの信仰おほいに加はり、各自みな互の愛を厚くしたればなり。^三 然れば我らは汝らが忍べる凡ての迫害と患難との中にありて保ちたる忍耐と信仰とを神

の諸教會の間に誇る。^四 これ神の正しき審判の兆にして汝らが神の國に相應しき者とならん爲なり。今その御國のために苦難を受く。^五 汝らに患難を加ふる者に患難

をもて報い、患難を受くる汝らに、我らと共に安息をもて報い給ふは、神の正しき事なり。^六 即ち主イエス・キリストの中にその能力の御使たちと共に天より顯れ、^七 神を知

らぬ者と我らの主イエスの福音に服はぬ者と共に報をなし給ふとき、^八 斯る者どもは主の顔と、その能力の榮光とを離れて、^九 限りなき滅亡の刑罰を受くべし。^{一〇} その時

は主おのが聖徒によりて崇められ、^{一一} 凡ての信ずる者（なんぢらも我らの證を信じた者なり）によりて讚められんとて來りたまふ日なり。^{一二} これに就きて我ら常に汝

らのために祈るは、^{一三} 我らの神の汝等をして召に適ふ者となし、能力をもて汝らの凡て善に就ける願と信仰の業とを成就せしめ給はんことなり。^{一四} これ我らの神および

主イエス・キリストの恵によりて、我らの主イエスの御名の汝らの中に崇められ、又なんぢらも彼に在りて崇められん爲なり。

第二章

兄弟よ、我らの主イエス・キリストの來り給ふこと、又われらが主の許に集ふことに就きては、汝らに求む。或は靈により、或は言により、或は我等より出てし如き書により、主の日すでに來れりとして容易く心を動かし、かつ驚かさざらん事を。誰が如何にすとも、それに欺かるな。その日の前に背教の事あり、不法の人、すなはち滅亡の子あらはれざるを得ず、彼はすべて神と稱ふる者、および人の拜む者に逆ひ、此等よりも己を高くし、遂に神の聖所に坐し己を神として見する者なり。われ汝らと偕に在りし時、これらの事を告げしを汝ら憶えぬか。彼をして己が時に至りて顯れしめんために、彼を阻めざる者を汝らは知る。不法の秘密は既に働けり、然れど此はただ阻めざる者の除かるるまでなり。斯て其のとき不法の者あらはれん、而して主イエス御口の氣息をもて彼を殺し、降臨の輝耀をもて彼を亡し給はん。彼はサタンの活動に従ひて來り、もろもろの虚偽なる力と徴と不思議と、不義のもろもろの誑惑とを行ひて、亡ぶる者どもに向はん、彼らは眞理を愛する愛を受けずして、救はるることを爲さればなり。

この故に神は、彼らが虚偽を信ぜんために惑をその中に働かせ給ふ。これ眞理を信ぜず不義を喜ぶ者の、みな審かれん爲なり。

されど主に愛せらるる兄弟よ、われら常に汝等のために神に感謝せざるを得ず。神は御靈によれる潔と眞理に對する信仰とをもて始めより汝らを救に選び、また我らの主イエス・キリストの榮光を得させんとて、我らの福音をもて汝らを招き給へばなり。されば兄弟よ、堅く立ちて我らの言あるひは書に由りて教へられたる傳を守れ。

我らの主イエス・キリスト及び我らを愛し恩恵をもて永遠の慰安と善き望とを與へ給ふ我らの父なる神、願くは汝らの心を慰めて、凡ての善き業と言とに堅う爲給はんことを。

第三章

終に言はん、兄弟よ、我らの爲に祈れ、主の言の汝らの中における如く、疾く弘まりて崇められん事と、われらが無法なる悪人より救はれんことを祈れ。そは人みな信仰あるに非ざればなり。然れど神は眞實なれば、汝らを堅うし、汝らを護りて悪しき者より救ひ給はん。斯て我らの命することを汝らが今も行ひ、後もまた行はんことを、主によりて信ずるなり。願くは

主、なんぢらの心を、神の愛とキリストの忍耐とに導き給はんことを。

兄弟よ、我らの主イエス・キリストの名によりて汝らに命ず。我等より受けし傳に従はずして妄に歩む凡ての兄弟に遠ざかれ。如何にして我らに效ふべきかは、汝らの自ら知る所なり。我らは汝らの中にありて妄なる事をせず、價なしに人のパンを食せず、反つて汝等のうち一人をも累はさざらんために勞と苦難とをもて、夜晝はたらけり。これは權利なき故にあらず、汝等をして我らに效はしめん爲に、自ら模範となりたるなり。また汝らと偕に在りしとき、人もし働くことを欲せずば、食すべからずと命じたりき。聞く所によれば、汝等のうちに妄に歩みて何の業をもなさず、徒事にたづさはる者ありと。我ら斯のごとき人に、靜に業をなして己のパンを食せんことを、我らの主イエス・キリストに由りて命じ、かつ勸む。兄弟よ、なんぢら善を行ひて倦むな。もし此の書にいへる我らの言に従はぬ者あらば、その人を認めて交ることを爲な、彼みづから恥ぢんためなり。然れど彼を仇の如くせず、兄弟として、訓戒せよ。

願くは平和の主、みづから何時にても凡ての事に平和を汝らに與へ給はんことを。願くは主なんぢら凡ての者と偕に在さん事を。

テモテへの前の書

我パウロ手づから筆を執りて汝らの安否を問ふ。これ我がすべての書の記章なり。わが書けるものは斯の如し。願くは我らの主イエス・キリストの恩恵なんぢら凡ての者と偕ならんことを。

第一章

我らの救主なる神と我らの希望なるキリスト・イエスとの命によりてキリスト・イエスの使徒となれるパウロ、書を信仰に由りて我が眞實の子たるテモテに贈る。願くは父なる神および我らの主キリスト・イエスより賜ふ恩恵と憐憫と平安と、汝に在らんことを。

我マケドニヤに往きしとき汝に勧めし如く、汝なほエペソに留り、或る人々に命じて異なる教を傳ふことなく、昔話と窮りなき系圖とに心を寄する事なからしめよ。此等のことは信仰に基ける神の經綸の助とならず、反つて議論を生ずるなり。命令の目的は、清き心と善き良心と偽りなき信仰とより出づる愛にあ

り。或る人々これらの事より外れて虚しき物語にうつり、律法の教師たらんと欲して反つて其の言ふ所、その確證する所を自ら悟らず。律法は道理に循ひて之を用ひば善き者なるを我らは知る。律法を用ふる者は律法の、正しき人の爲にあらずして、不法のもの、服従せぬもの、敬虔ならぬもの、罪あるもの、潔からぬもの、妄なるもの、父を撃つもの、母を撃つもの、人を殺す者、淫行のもの、男色を行ふもの、人を誘拐すもの、偽る者、いつはり誓ふ者の爲、そのほか健全なる教に逆ふ凡ての事のために設けられたるを知るべし。これは我に委ね給ひし幸福なる神の榮光の福音に循へるなり。

我に能力を賜ふ我らの主キリスト・イエスに感謝す。われ曩には瀆す者、迫害する者、暴行の者なりしに、我を忠實なる者として、この職に任じ給ひたればなり。われ信ぜぬ時に知らずして行ひし故に憐憫を蒙れり。而して我らの主の恩恵は、キリスト・イエスに由れる信仰および愛とともに溢るるばかり彌増せり。『キリスト・イエス罪人を救はん爲に世に來り給へり』とは、信すべく正しく受くべき言なり、其の罪人の中にて我は首なり。然るに我が憐憫を蒙りしは、キリスト・イエス我を首に寛容をことごとく顯し、この後、かれを信じて永遠の生命を受

けんとする者の模範となし給はん爲なり。願くは萬世の王、すなはち朽ちず見えざる唯一の神に、世々限りなく尊貴と榮光とあらん事を、アマメン。わが子テモテよ、汝を指したる凡ての預言に循ひて我この命令を汝に委ぬ。これ汝がその預言により信仰と善き良心とを保ちて、善き戦鬪を戦はん爲なり。或人よき良心を棄てて信仰の破船をなせり。その中にヒメナオとアレキサンデルとあり、彼らに瀆すまじきことを學ばせんとて我これをサタンに付せり。

第二章

つもの爲におのおの願、祈禱、とりなし、感謝せよ。是われら敬虔と謹嚴とを盡して安かに靜に一生を過さん爲なり。斯くするは、美事にして我らの救主なる神の御意に適ふことなり。神は凡ての人の救はれて、眞理を悟るに至らんことを欲し給ふ。それ神は唯一なり、また神と人との間の中保も唯一にして、人なるキリスト・イエスはなり。彼は己を與へて凡ての人の贖價となり給へり、時至りて證せらる。我これが爲に立てられて宣傳者となり、使徒となり（我は眞を言ひて虚偽を言はず）また信仰と眞とをもて異邦人を教ふる教師となれり。この故に、われ望む。男は怒らず争はず、何れの處にても潔き手をあげて祈

らんことを。また女は恥を知り、慎みて宜しきに合ふ衣にて己を飾り、編みたる頭髮と金と眞珠と價貴き衣とを飾とせず、善き業をもて飾とせんことを。これ神を敬はんと公言する女に適へる事なり。女は凡てのこと従順にして靜に道を學ぶべし。われ女の教ふることと男の上に權を執ることとを許さず、ただ靜に爲べし。それアダムは前に造られ、エバ後に造られたり。アダムは惑はされず、女は惑はされて罪に陥りたるなり。然れど女もし慎みて信仰と愛と潔とに居らば、子を生むことに因りて救はるべし。

第三章

「人もし監督の職を慕はば、これ善き業を願ふなり」とは、信ずべき言なり。それ監督は責むべき所なく、一人の妻の夫にして自ら制し、慎み、品行正しく、旅人を懇ろに待し、能く教へ、酒を嗜まず、人を打たず、寛容にし、争はず、金を貪らず、善く己が家を理め、謹嚴にして子女を従順ならしむる者たるべし。(人もし己が家を理むることを知らずば、争てか神の教會を扱ふことを得ん) また新に教に入りし者ならざるべし、恐らくは傲慢になりて悪魔と同じ審判を受くるに至らん。外の人にも令聞ある者たるべし、然らずば誹謗と悪魔の罠とに陥らん。執事もまた同じく謹嚴にして、言を二つにせず、大

酒せず、恥づべき利をとらず、潔き良心をもて信仰の奥義を保つものたるべし。先づ彼らを試みて責むべき所なくば、執事の職に任ずべし。女もまた謹嚴にして人を誇らず、自ら制して凡ての事に忠實なる者たるべし。執事は一人の妻の夫にして子女と己が家とを善く理むる者たるべし。善く執事の職をなす者は良き地位を得、かつキリスト・イエスに於ける信仰につきて大なる勇氣を得るなり。

われ速かに汝に往かんことを望めど、今これらの事を書きおくるは、若し遅からんとき人の如何に神の家に行ふべきかを汝に知らしめん爲なり。神の家は活ける神の教會なり、眞理の柱、眞理の基なり。實に大なるかな、敬虔の奥義、『キリストは肉にて顯され、靈にて義とせられ、御使たちに見られ、もろもろの國人に宣傳へられ、世に信ぜられ、榮光のうちに上げられ給へり』

第四章

然れど御靈あきらかに、或人の後の日に及びて、惑す靈と悪鬼の教とに心を寄せて、信仰より離れんことを言ひ給ふ。これ虚偽をいふ者の偽善に由りてなり。彼らは良心を燒金にて烙かれ、婚姻するを禁じ、食を斷つことを命ず。されど食は神の造り給へる物にして、信じ、かつ眞理を知る者の感謝して受くべきものなり。神の造り給へる物はみな善し、感謝して受くる時は棄

つべき物なし。五
それは神の言と祈によりて潔めらるるなり。

汝もし此等のことを兄弟に教へば、信仰と汝の従ひたる善き教との言にて養はるる所のキリスト・イエスの良き役者たるべし。七
されど妄なる談と老いたる女の昔話とを捨てよ、また自ら敬虔を修行せよ。八
體の修行も聊かは益あれど、敬虔は今生命と後の生命との約束を保ちて凡の事に益あり。九
これ信すべく、正しく受くべき言なり。一〇
我らは之がために勞し、かつ苦心す、それは我ら凡ての人、殊に信する者の救主なる活ける神に望を置けばなり。

一、汝これらの事を命じ、かつ教へよ。二、なんぢ年若きをもて人に輕んぜらる

な、反つて言にも、行狀にも、愛にも、信仰にも、潔にも、信者の模範となれ。

三、わが到るまで、讀むこと勸むること教ふる事に心を用ひよ。四、なんぢ長老たちの

按手を受け、預言によりて賜はりたる賜物を等閑にすな。五、なんぢ心を傾けて此等

のことを専ら務めよ。汝の進歩の明かならん爲なり。一六、なんぢ己とおのれの教とを

慎みて此等のことに怠るな、斯くなして己と聽く者とを救ふべし。

第五章

一、老人を譴責すな、反つて之を父のごとく勸め、若き人を兄弟の如くに、
二、老いたる女を母の如くに勸め、若き女を姉妹の如くに全き貞潔

をもて勸めよ。三、寡婦のうちの眞の寡婦を敬へ。四、されど寡婦に子もしくは孫あら

ば、彼ら先づ己の家に孝を行ひて親に恩を報ゆることを學ぶべし。これ神の御意に

かなふ事なり。五、眞の寡婦にして獨残りたる者は望を神におきて、夜も晝も絶えず

願と祈とを爲す。六、されど佚樂を放恣にする寡婦は生けりと雖も死にたる者なり。

七、これらの事を命じて彼らに責むべき所なからしめよ。八、人もし其の親族、殊に己

が家族を顧みずば、信仰を棄てたる者にて不信者よりも更に惡しきなり。九、六十歳

以下の寡婦は寡婦の籍に記すべからず、記すべきは一人の夫の妻たりし者にして、

一〇、善き業の聲聞あり、或は子女をそだて、或は旅人を宿し、或は聖徒の足を洗ひ、

或は憐める者を助くる等、もろもろの善き業に従ひし者たるべし。一一、若き寡婦は籍

に記すな、彼らキリストに背きて心亂るる時は嫁ぐことを欲し、一二、初め誓約を棄つ

るに因りて批難を受くべければなり。一三、彼等はまた懶惰に流れて家々を遊びめぐ

る、當に懶惰なるのみならず、言多くして徒事にたづさはり、言ふまじき事を言

ふ。一四、されば若き寡婦は嫁ぎて子を生み、家を理めて敵に少しにても誇るべき機を

與へざらんことを我は欲す。一五、彼らの中には既に迷ひてサタンに従ひたる者あり。

一六、信者たる女もし其の家に寡婦あらば自ら之を助けて教會を煩はすな。これ眞の

寡婦を教會の助けん爲なり。

一七 善く治むる長老、殊に言と教とをもて勞する長老を一層尊ぶべき者とせよ。

一八 聖書に『穀物を碾す牛に口籠を繋ぐべからず』また『勞動人のその價を得るは相應しきなり』と云へばなり。

一九 長老に對する訴訟は二三人の證人なくば受くべからず。

二〇 罪を犯せる者をば衆の前にて責めよ、これ他の人をも懼れしめんためなり。

二一 われ神とキリスト・イエスと選ばれたる御使たちとの前にて嚴かに汝に命ず、何事をも偏り行はず、偏頗なく此等のことを守れ、

二二 輕々しく人に手を按くな、人の罪に與るな、自ら守りて潔くせよ。

二三 今よりのち水のみを飲まず、胃のため、又しばしば病に罹る故に、少しく葡萄酒を用ひよ。

二四 或人の罪は明かにして先だちて審判に往き、或人の罪は後にしたがふ。

二五 斯のごとく善き業も明かなり、然らざる者も遂には隠るること能はず。

第六章

一 おほよそ軌の下にありて奴隸たる者は、おのれの主人を全く尊ぶべき者とすべし。

二 これ神の名と教との譏られざらん爲なり。

三 主人を有てる者は、その兄弟なるに因りて之を輕んぜず、反つて彌増々これに事ふべし。

三 汝これらの事を教へ、かつ勧めよ。もし異なる教を傳へて健全なる言、すな

はち我らの主イエス・キリストの言と敬虔にかなふ教とを肯はぬ者あらば、

四 その人は傲慢にして何をも知らず、ただ議論と言争とのみ耽るなり、之によりて

五 嫉妬・争闘・誹謗・惡しき念おこり、また心腐りて眞理をはなれ、敬虔を利益の

六 道とおもふ者の争論おこるなり。然れど足ることを知りて敬虔を守る者は、大なる

七 利益を得るなり。我らは何をも携へて世に來らず、また何をも携へて世を去る

八 こと能はざればなり。ただ衣食あらば足れりとせん。然れど富まんを欲する者

九 は、誘惑と罾また人を滅亡と沈淪とに溺す愚にして害ある各様の慾に陥るなり。

一〇 それ金を愛するは諸般の惡しき事の根なり、或る人々これを慕ひて信仰より迷

一 び、さまざまの痛をもて自ら己を刺しとほせり。

二 神の人よ、なんぢは此等のことを避けて義と敬虔と信仰と愛と忍耐と柔和と

三 を追求め、信仰の善き戦闘をたたかへ、永遠の生命をとらへよ。汝これが爲に召

四 を蒙り、また多くの證人の前にて善き言明をなせり。

五 われ凡ての物を生したまふ神のまへ及びポンテオ・ピラトに向ひて善き言明をなし給ひしキリスト・イエスの

六 前にて汝に命ず。

責むべき所なく、誠命を守れ。一五
 王、もろもろの主の主、これを顯し給はん。一六
 主は唯一とり不死を保ち近づきがた
 き光に住み、人の未だ見ず、また見るこ
 能はぬ者なり。願くは尊貴と限りなき
 權力と彼にあらんことを、アアメン。

一七
 汝この世の富める者に命ぜよ。高ぶりたる
 思をもたず、定めなき富を恃まず
 して唯われらを樂ませんとて萬の物を
 豊に賜ふ神に依頼み、一八
 善をおこなひ、善き
 業に富み、惜みなく施し、分け與ふ
 ことを喜び、一九
 斯て己のために善き基を蓄
 へ、未來の備をなして眞の生命を捉
 ふることを爲よと。

二〇
 テモテよ、なんぢ委ねられたる事を守
 り、妄なる虚しき物語また偽りて知
 識と稱ふる反對論を避けよ。二一
 或る人々この知識を装ひて信仰より
 外れたり。願くは御惠、なんぢと偕に
 在らんことを。

テモテへの後の書

第一章

一
 神の御意により、キリスト・イエスに
 ある生命の約束に循ひて、キ
 リスト・イエスの使徒となれるパウロ、
 二
 書を我が愛する子テモテに
 贈る。願くは父なる神および我らの主
 キリスト・イエスより賜ふ恩恵と憐憫
 と平安
 と、汝に在らんことを。

三
 われ夜も晝も祈の中に絶えず汝を思
 ひて、わが先祖に效ひ清き良心をも
 て事
 ふる神に感謝す。四
 我なんぢの涙を憶え、わが歡喜の満
 ちん爲に汝を見んことを欲
 す。五
 是なんぢに在る虚偽なき信仰をおも
 ひ出すに因りてなり。その信仰の曩に
 汝
 の祖母ロイス及び母ユニケに宿りし
 ごとく、汝にも然るを確信す。六
 この故に、わ
 が按手に由りて汝の内に得たる神の賜
 物をますます熾んにせんことを勸む。七
 そは
 神の我らに賜ひたるは、臆する靈にあ
 らず、能力と愛と謹慎との靈なれば
 なり。八
 されば汝われらの主の證をなす事と
 主の囚人たる我とを恥とすな、ただ
 神の能力
 に隨ひて福音のために我とともに苦
 難を忍べ。九
 神は我らを救ひ聖なる召をも
 て召
 し給へり。是われらの行爲に由るに
 ならず、神の御旨にて創世の前にキ
 リスト・イ
 エスをもて我らに賜ひし恩恵に由る
 なり。一〇
 この恩恵は今われらの救主
 キリスト・イ
 エスの現れ給ふに因りて顯れたり。彼
 は死をほろぼし、福音をもて生命と朽
 ちざ

る事とを明かに爲給へり。二一 われはこの福音のために立てられて宣傳者・使徒・教師となれり。二二 これ之がために我これらの苦難に遭ふ。されど之を恥とせず、我わが依頼む者を知り、且わが委ねたる者を、かの日に至るまで守り得給ふことを確信すればなり。二三 なんぢ汝キリスト・イエスにある信仰と愛とをもて我より聞きし健全なる言の模範を保ち、二四 かつ委ねられたる善きものを我等のうち宿りたまふ聖靈に頼りて守るべし。

一五 ア ज्याに居る者みな我を棄てしは、汝の知る所なり、その中にフゲロとヘルモゲネとあり。一六 わが願くは主オネシポロの家に憐憫を賜はんことを。彼はしばしば我を慰め、又わが鎖を恥とせず。一七 そのロマに居りし時には懇ろに尋ね來りて遂に我に逢ひたり。一八 わが願くは主かの日にいたり主の憐憫を彼に賜はんことを、彼がエペソにて我に事へしことの如何許なりしかは、汝の能く知るところなり。

第二章

わが子よ、汝キリスト・イエスにある恩恵によりて強かれ。二九 且おほくの證人の前にて我より聞きし所のことを他の者に教へ得る忠實なる人々に委ねよ。三〇 なんぢ汝キリスト・イエスのよき兵卒として我とともに苦難を忍べ。四一 兵卒を務むる者は生活のために纏はるる事なし、これ募れる者を喜ばせんと爲れ

ばなり。五 技を競ふ者、もし法に随ひて競はずば冠冕を得ず。六 勞する農夫まづ實の分配を得べきなり。七 なんぢ汝わが言ふ所をおもへ、主なんぢに凡ての事に就きて悟を賜はん。八 わが福音に云へる如くダビデの裔にして死人の中より甦へり給へるイエス・キリストを憶えよ。九 われはこの福音のために苦難を受けて悪人のごとく繋がるるに至れり、然れど神の言は繋かれたるにあらず。一〇 この故に我えらばれたる者のために凡ての事を忍ぶ。これ彼等をして永遠の光榮と共にキリスト・イエスによる救を得しめんとなり。一一 爰に信すべき言あり『我等もし彼と共に死にたる者ならば、彼と共に生くべし。一二 もし耐へ忍ばば彼と共に王となるべし。若し彼を否まば、彼も我らを否み給はん。一三 我らは眞實ならずとも、彼は絶えず眞實にましますり、彼は己を否み給ふこと能はざればなり』

一四 なんぢ汝かれらに此等のことを思出さしめ、かつ言争する事なきやう神の前にて嚴かに命ぜよ、言争は益なくして聞く者を滅亡に至らしむ。一五 なんぢ眞理の言を正しく教へ、恥づる所なき勞動人となりて神の前に鍊達せる者とならんことを勵め。一六 また妄りなる虚しき物語を避けよ。斯る者はますます不敬虔に進み、その言は脱疽のごとく腐れひろがるべし、ヒメナヨとピレトとは斯のごとき者の中にあり。

一八かれ 彼らは眞理より外れ、復活ははぎ過ぎたりと云ひて或る人々の信仰を覆へすな
 一九 されど神の据ゑ給へる堅き基は立てり、之に印あり、記して曰ふ『主おのれ
 の者を知り給ふ』また『凡て主の名を稱ふる者は不義を離るべし』と。二〇おほい 大なる家
 の中には金銀の器あるのみならず、木また土の器もあり、貴きに用ふるものあり、
 また賤しきに用ふるものあり、二一ひも 人もし賤しきものを離れて自己を潔よくせば貴き
 二二に用ひらるる器となり、淨められて主の用に適ひ、凡ての善き業に備へらるべし。
 二三なんぢ 汝わかき時の慾を避け、主を清き心にて呼び求むる者とともに義と信仰と愛と平
 二四和とを追求めよ。愚なる無學の議論を棄てよ、これより分争の起るを知ればな
 二五り。主の僕は争ふべからず、凡ての人に優しく能く教へ、忍ぶことをなし、逆
 二六ふ者をば柔和をもて戒むべし、神あるひは彼らに悔改むる心を賜ひて眞理を悟らせ
 二七給はん。彼ら一度は悪魔に囚れたれど、醒めてその羅をのがれ神の御意を行ふに
 二八至らん。

第三章

一 されど汝これを知れ、末の世に苦しき時きたらん。二 人々おのれを
 三 愛する者・金を愛する者・誇るもの・高ぶる者・罵るもの・父母に
 四 逆ふもの・恩を忘るる者・潔からぬ者、無情なる者・怨を解かぬ者・譏る者・節

制なき者・殘刻なる者・善を好まぬ者、友を賣る者・放縱なる者・傲慢なる者・
 神よりも快樂を愛する者、敬虔の貌をとりてその徳を捨つる者とならん、斯る類
 の者を避けよ。彼らの中には人の家に潜り入りて愚なる女を擄にする者あり、斯
 くせらるる女は罪を積み重ねて各様の慾に引かれ、常に學べども眞理を知る知識
 に至ること能はず。彼の者らはヤンネとヤンブレとがモーセに逆ひし如く、眞理
 に逆ふもの、心の腐れたる者、また信仰につきて棄てられたる者なり。されど此
 の上になほ進むこと能はじ、そはかの二人のごとく彼らの愚なる事も亦すべての人
 に顯るべければなり。汝は我が教誨・品行・志望・信仰・寛容・愛・忍耐・迫
 害、および苦難を知り、またアンテオケ、イコニオム、ルステラにて起りし事、
 わが如何なる迫害を忍びしかを知る。主は凡てこれらの中より我を救ひ出したまへ
 り。凡そキリスト・イエスに在りて敬虔をもて一生を過さんと欲する者は迫害を受
 受くべし。悪しき人と人を欺く者とは、ますます悪にすすみ、人を惑し、また人
 に惑されん。然れど汝は學びて確信したる所に常に居れ。なんぢ誰より之を學び
 しかを知り、また幼き時より聖なる書を識りし事を知ればなり。この書はキリス
 ト・イエスを信ずる信仰によりて救に至らしむる智慧を汝に與へ得るなり。聖書

はみな神の感動によるものにして教誨と譴責と矯正と義を薰陶するとに益あり。
これ神の人の全くなりて諸般の善き業に備を全うせん爲なり。

第四章

われ神の前また生ける者と死にたる者とを審かんとし給ふキリス

ト・イエスの前にてその顯現と御國とおもひて嚴かに汝に命ず。
二 なんぢ御言を宣傳へよ、機を得るも機を得ざるも常に勵め、寛容と教誨とを盡して責め、戒め、勧めよ。
三 人々健全なる教に堪へず、耳痒くして私慾のまにまに己がために教師を増加へ、
四 耳を眞理より背けて昔話に移るとき來らん。
五 されど汝は何事にも愼み苦難を忍び、傳道者の業をなし、なんぢの職を全うせよ。
六 われは今、供物として血を灑がんとす、わが去るべき時は近づけり。
七 われ善き戦闘をたかひ、走るべき道程を果し、信仰を守れり。
八 今よりのち義の冠冕わが爲に備はれり。かの日に至りて正しき審判主なる主、これを我に賜はん、
九 啻に我のみならず、凡てその顯現を慕ふ者にも賜ふべし。
十 なんぢ勉めて速かに我に來れ。
十一 デマスは此の世を愛し、我を棄ててテサロニケに往き、クレスケンスはガラテヤにテトスはダルマテヤに往きて、
十二 唯ルカのみ我とともに居るなり。
十三 汝マルコを連れて共に來れ、彼は職のために我に益あれば

二 我テキコをエペソに遣せり。
三 汝きたる時わがトロアスにてカルポの許に遺し置きたる外衣を携へきたれ、また書物、殊に羊皮紙のものを携へきたれ。
四 金細工人アレキサンデル大に我を惱せり。
五 主はその行爲に隨ひて彼に報いたまふべし。
六 汝もまた彼に心せよ、かれは甚だしく我らの言に逆ひたり。
七 わが始の辯明のとき誰も我を助けず、みな我を棄てたり、
八 願くはこの罪の彼らに歸せざらんことを。
九 されど主われと偕に在して我を強めたまへり。
十 これ我によりて宣教の全うせられ、凡ての異邦人のこれを聞かん爲なり。
十一 而して我は獅子の口より救ひ出されたり。
十二 また主は我を凡ての惡しき業より救ひ出し、その天の國に救ひ入れたまは

一 願くは榮光、世々限りなく彼にあらん事を、アアメン。
二 汝プリスカ及びアクラ、またオネシポロの家に安否を問へ。
三 エラストはコリントに留れり。
四 トロピモは病ある故に我かれをミレトに遣せり。
五 なんぢ勉めて冬のまへに我に來れ、ユプロ、プデス、リノス、クラウデヤ、及び凡ての兄弟、なんぢに安否を問ふ。
六 願くは主、なんぢの靈と偕に在し、御惠なんぢらと偕に在らんことを。

第一章

神の僕またイエス・キリストの使徒パウロ——我が使徒となれるは、永遠の生命の望に基きて神の選民の信仰を堅うし、また彼らを敬虔にかなふ眞理を知る知識に至らしめん爲なり。偽りなき神は、創世の前に、この生命を約束し給ひしが、時いたりて御言を宣教にて顯さんとし、その宣教を我らの救主たる神の命令をもて我に委ねたまへり——われ書を同じ信仰によりて我が眞實の子たるテトスに贈る。願くは父なる神、および我らの救主キリスト・イエスより賜ふ恩恵と平安と、汝にあらんことを。

わが汝をクレテに遣し置きたる故は、汝をして缺けたる所を正し、且わが命ぜしごとく町々に長老を立てしめん爲なり。長老は責むべき所なく、一人の女の夫にして、子女もまた放蕩をもて訴へらるる事なく、服従せぬことなき信者たるべきなり。それ監督は神の家司なれば、責むべき所なく、放縦ならず、軽々しく怒らず、酒を嗜まず、人を打たず、恥づべき利を取らず、反つて旅人を懇ろに待ひ、善を愛し、謹慎あり、正しく潔く節制にして、教に適ふ信すべき言を守る者

たるべし。これ健全なる教をもて人を勧め、かつ言ひ逆ふ者を言伏することを得んためなり。

服従せず、虚しき事をかたり、人の心を惑す者おほし、殊に割禮ある者のうちに多し。彼らの口を箝がしむべし、彼らは恥づべき利を得んために、教ふまじき事を教へて全家を覆へすなり。クレテ人の中なる或る預言者いふ、『クレテ人は常に虚偽をいふ者、あしき獸、また懶惰の腹なり』この證は眞なり、然れば汝きびしく彼らを責めよ、彼らがユダヤ人の昔話と眞理を棄てたる人の誠命とに心を寄することなく、信仰を健全にせん爲なり。潔き人には凡ての物きよく、汚れたる人と不信者とは一つとして潔き物なし、彼らは既に心も良心も汚れたり。みづから神を知ると言ひあらはせど、其の行爲にては神を否む。彼らは憎むべきもの、服はぬ者、すべての善き業に就きて棄てられたる者なり。

第二章

されど汝は健全なる教に適ふことを語れ。老人には自ら制することと謹嚴と謹慎とを勧め、また信仰と愛と忍耐とに健全ならんことを勧めよ。老いたる女にも同じく、清潔にかなふ行爲をなし、人を誇らず、大酒の奴隷とならず、善き事を教ふる者とならんことを勧めよ。かつ彼等をして若き女

に夫を愛し、子を愛し、^五 謹慎と貞操とを守り、家の務をなし、仁慈をもち、己が夫に服はんことを教へしめよ。これ神の言の汚されざらん爲なり。^六 若き人にも同じく、^七 謹慎を勧め、^八 なんぢ自ら凡ての事につきて善き業の模範を示せ。教をなすには邪曲なきことと謹厳と、^九 責むべき所なき健全なる言とを以てすべし。これ逆ふ者をして、^{一〇} 我らの悪を言ふに由なく、自ら恥づる所あらしめん爲なり。奴隷には己が主人に服ひ、^{一一} 凡ての事において之を喜ばせ、之に言ひ逆はず、^{一二} 物を盗まざ、^{一三} 反つて全き忠信を顯すべきことを勧めよ。これ凡ての事において我らの救主なる神の教を飾らん爲なり。^{一四} 凡ての人に救を得さする神の恩恵は既に顯れて、^{一五} 敬虔と世の愆とを棄てて謹慎と正義と敬虔とをもて此の世を過し、^{一六} 幸福なる望すなはち大なる神、^{一七} われらの救主イエス・キリストの榮光の顯現を待つべきを、我らに教ふ。^{一八} キリストは我等のために己を與へたまへり。是われらを諸般の不法より贖ひ出して、^{一九} 善き業に熱心なる特選の民を己がために潔めんとてなり。^{二〇} なんぢ全き權威をもて此等のことを語り、^{二一} 勧め、^{二二} また責めよ、^{二三} なんぢ人に輕んぜらるな。

第三章 汝かれらに司と權威ある者にとに服し、かつ従ひ、凡ての善き業をお

こなふ備をなし、^一 人を誇らず、^二 争はず、^三 寛容にし、^四 常に柔和を、^五 すべての人に顯すべきことを思ひ出させよ。^六 我らも前には愚なるもの、^七 順はぬもの、^八 迷へる者、^九 さまたまの愆と快樂とに事ふるもの、^{一〇} 悪意と嫉妬とをもて過すもの、^{一一} 憎むべき者、^{一二} また互に憎み合ふ者なりき。^{一三} されど我らの救主なる神の仁慈と人を愛したまふ愛との顯れしとき、^{一四} 我らの行ひし義の業にはよらて、^{一五} 唯その憐憫により、^{一六} 更生の洗と我らの救主イエス・キリストをもて、^{一七} 豊に注ぎたまふ聖靈による維新とにて我らを救ひ給へり。^{一八} これ我らが其の恩恵によりて義とせられ、^{一九} 永遠の生命の望にしたがひて世嗣とならん爲なり。^{二〇} この言は信すべきなれば、^{二一} 我なんぢが此等につきて確證せんことを欲す。^{二二} 神を信したる者をして慎みて善き業を務めしめん爲なり。^{二三} 斯するは善き事にして人に益あり。^{二四} されど愚なる議論・系圖・争闘、^{二五} また律法に就きての分争を避けよ。これらは益なくして空しきものなり。^{二六} 異端の者をば一度もしくは二度、^{二七} 訓戒して後これを棄てよ。^{二八} 斯る者は汝の知るごとく、^{二九} 邪曲にして自ら罪を認めつつ尙これを犯すなり。^{三〇}

我アルテマス或はテキコを汝に遣さん、^{三一} その時なんぢ急ぎてニコポリなる我がもとに來れ。^{三二} われ彼處にて冬を過さんと定めたり。^{三三} 教法師ゼナス及びアポロを

懇ろに送りて、乏しき事なからしめよ。一四 斯て我らの伴侶も善き業を務めて必要を
 資けんことを學ぶべし、これ果を結ばぬ事なからん爲なり。
 一五 我と偕に居る者みな汝に安否を問ふ。信仰に在りて我らを愛する者に安否を
 問へ。

願くは御惠、なんぢら凡ての者と偕にあらん事を。

ピレモンへの書

一 キリスト・イエスの囚人たるパウロ及び兄弟テモテ、書を我らが愛する同勞
 者ピレモン、二 我らの姉妹アピヤ、我らと共に戰闘をなせるアルキポ及び汝の家に
 ある教會に贈る。三 願くは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜ふ恩惠
 と平安と、汝らに在らんことを。
 四 われ祈るとき常に汝をおぼえて我が神に感謝す。五 これ主イエスと凡ての聖
 徒とに對する汝の愛と信仰とを聞きたればなり。六 願ふところは、汝の信仰の交際

の活動により、人々われらの中なる凡ての善き業を知りて、榮光をキリストに歸す
 るに至らんことなり。七 兄弟よ、我なんぢの愛によりて大なる歡喜と慰安とを得た
 り。聖徒の心は汝によりて安んぜられたればなり。

八 この故に、われキリストに在りて、汝になすべき事を、聊かも憚らず命じ得
 れど、九 寧ろ愛の故によりて汝にねがふ。一〇 既に年老いて今はキリスト・イエスの
 囚人となれる我パウロ縲綯の中にて生みし我が子オネシモの事を、なんぢに願ふ。

二 かれ前には汝に益なき者なりしが、今は汝にも我にも益ある者となれり。三 我か
 れを汝に歸す、かれは我が心なり。四 我は彼を、わが許に留めおきて、我が福音の
 ために縲綯にある間、なんぢに代りて我に事へしめんと欲したれど、五 なんぢの承
 諾を経ずして斯くするを好まざりき、是なんぢの善の止むを得ざるに出でずして心
 より出でんことを欲したればなり。六 彼が暫時なんぢを離れしは、或は汝かれを
 永遠に保ち、七 もはや奴隸の如くせず、奴隸に勝りて愛する兄弟の如くせん爲なり
 しやも知るべからず。八 我は殊に彼を愛す、況して汝は肉によりても主によりても、
 九 これを愛せざる可んや。一〇 汝もし我を友とせば、請ふ、われを納るごとく彼を納れ
 よ。一一 彼もし汝に不義をなし、または汝に負債あらば、之を我に負はせよ。一二 我バ

ウロ手づから之を記す、われ償はん、汝われに身を以て償ふべき負債あれど、我これを言はず。兄弟よ、請ふ、なんぢ主に在りて我に益を得させよ、キリストに在りて我が心を安んぜよ。

我なんぢの從順を確信して之を書き贈る。わが言ふところに勝りて汝の行はんことを知るなり。而して我がために宿を備へよ、我なんぢらの祈により、遂に我が身の汝らに與へられんことを望めばなり。

キリスト・イエスに在りて我とともに囚人となれるエパfras、及び我が同勞者マルコ、アリストタルコ、デマス、ルカ皆なんぢに安否を問ふ。願くは主イエス・キリストの恩恵、なんぢらの靈と偕にあらんことを。

ヘブル人への書

第一章

神むかしは預言者等により、多くに分ち、多くの方法をもて先祖たちに語り給ひしが、この末の世には御子によりて、我らに語り給へ

り。神は曾て御子を立てて萬の物の世嗣となし、また御子によりて諸般の世界を造り給へり。御子は神の榮光のかがやき、神の本質の像にして、己が權能の言をもて萬の物を保ちたまふ。また罪の潔をなして、高き處にある稜威の右に坐し給へり。その受け給ひし名の御使の名に勝れるごとく、御使よりは更に勝る者となり給へり。神は孰の御使に曾て斯くは言ひ給ひしぞ、『なんぢは我が子なり、われ今日なんぢを生めり』と。また『われ彼の父となり、彼わが子とならん』と。また初子を再び世に入れ給ふとき、『神の凡ての使は之を拜すべし』と言ひ給ふ。また御使たちに就ては、『神は、その使たちを風となし、その事ふる者を焔となす』と言ひ給ふ。されど御子に就ては、『神よ、なんぢの御座は世々限りなく、汝の國の杖は正しき杖なり。なんぢは義を愛し、不法をにくむ。この故に神なんぢの神は、歡喜の油を汝の友に勝りて汝にそそぎ給へり』と。また『主よ、なんぢ太初に地の基を置きたまへり、天も御手の業なり。これらは滅びん、然れど汝は常に存へたまはん。此等はみな衣のごとく舊びん。而して汝これらを袍のごとく疊み給はん、此等は衣のごとく變らん。然れど汝は變り給ふことなく、汝の齡は終らざるなり』と言ひたまふ。又いづれの御使に曾て斯くは言ひ給ひしぞ、『われ

汝の仇を汝の足臺となすまでは、我が右に坐せよ」と。御使はみな事へまつる靈にして救を嗣がんとする者のために職を執るべく遣されたる者にあらずや。

第二章

この故に我ら聞きし所をいよいよ篤く慎むべし、恐らくは流れ過ぐと不従順とみな正しき報を受けたらんに、我ら斯のごとき大なる救を等閑にして争でか遁るることを得ん。この救は初め主によりて語り給ひしものにして聞きし者ども之を我らに確うし、神また徴と不思議とさまざまの能力ある業と御旨のままに分ち與ふる聖靈とをもて證を加へたまへり。

それ神は我らの語るところの來らんとする世界を御使たちには服はせ給はざりき。或篇に人、證して言ふ、『人は如何なる者なれば、之を御心にとめ給ふか。人の子は如何なる者なれば、之を顧み給ふか。汝これを御使よりも少しく卑うし、光榮と尊貴とを冠らせ、萬の物をその足の下に服はせ給へり』と。既に萬の物を之に服はせ給ひたれば、服はぬものは一つだに残さるる事なし。されど今もなほ我らは萬の物の之に服ひたるを見ず。ただ御使よりも少しく卑くせられしイエスの、死の苦難を受くるによりて榮光と尊貴とを冠らせられ給へるを見る。これ神

の恩恵によりて萬民のために死を味ひ給はんとてなり。それ多くの子を光榮に導くに、その救の君を苦難によりて全うし給ふは、萬の物の歸するところ、萬の物を造りたまふ所の者に相應しき事なり。潔めたまふ者も、潔めらるる者も、皆ただ一つより出づ。この故に彼らを兄弟と稱ふるを恥とせずして言ひ給ふ、『われ御名を我が兄弟たちに告げ、集會の中にて汝を讚め歌はん』また『われ彼に依り頼まん』又『視よ、我と神の我に賜ひし子等とは……』と。子等はともに血肉を具ふれば、主もまた同じく之を具へ給ひしなり。これは死の權力を有つもの、即ち悪魔を死によりて亡し、かつ死の懼に由りて生涯、奴隷となりし者どもを解放し給はんためなり。實に主は御使を扶けずしてアブラハムの裔を扶けたまふ。この故に神の事につきて憐憫ある忠實なる大祭司となりて民の罪を贖はんために凡ての事において兄弟の如くなり給ひしは宜なり。主は自ら試みられて苦しみ給ひたれば、試みらるる者を助け得るなり。

第三章

されば共に天の召を蒙れる聖なる兄弟よ、我らが言ひあらはす信仰の使徒たり大祭司たるイエスを思ひ見よ。彼の己を立て給ひし者に忠實なるは、モーセが神の全家に忠實なりしが如し。家を造る者の家より勝りて

尊ばるる如く、彼もモーセに勝りて大なる榮光を受くるに相應しき者とせられ給へり。家は凡て之を造る者あり、萬の物を造り給ひし者は神なり。モーセは後に語り傳へられんと爲ることの證をせんために、僕として神の全家に忠實なりしが、キリストは子として神の家を忠實に掌どり給へり。我等もし確信と希望の誇とを終まで堅く保たば、神の家なり。この故に聖靈の言ひ給ふごとく、『今日なんぢら神の聲を聞かば、その怒を惹きし時のごとく、荒野の嘗試の日のごとく、心を頑固にする勿れ。彼處にて汝らの先祖たちは我を試みて驗し、かつ四十年の間、わが業を見たり。この故に我この代の人を憤りて云へり、「彼らは常に心迷ひ、わが途を知らざりき」と。われ怒をもて「彼らは我が休に入るべからず」と誓へり。兄弟よ、心せよ、恐らくは汝等のうち活ける神を離れんとする不信仰の悪しき心を懐く者あらん。汝等のうち誰も罪の誘惑によりて頑固にならぬやう、今日と稱ふる間に日々互に相勧めよ。もし始の確信を終まで堅く保たば、我らはキリストに與かる者となるなり。それ『今日なんぢら神の聲を聞かば、その怒を惹きし時のごとく、心を頑固にする勿れ』と云へり。然れば聞きてなほ怒を惹きし者は誰なるか、モーセによりてエジプトを出てし凡ての人にあらざや。また四十年

のあひだ、神は誰に對して憤り給ひしか、罪を犯してその死屍を荒野に横たへし人々にあらずや。又かれらは我が安息に入るべからずとは、誰に對して誓ひ給ひしか、不從順なる者にあらずや。之によりて見れば、彼らの入ること能はざりしは、不信仰によりてなり。

第四章

然れば我ら懼るべし、その安息に入るべき約束はなほ遺れども、恐らくは汝らの中これに達せざる者あらん。それは彼等のごとく我らも善き音信を傳へられたり、然れど彼らには聞きし所の言益なかりき。聞くもの之に信仰をまじへざりしに因る。われら信じたる者は、かの休に入ることを得るなり。『われ怒をもて「彼らは、わが休に入るべからず」と誓へり』と云ひ給ひしが如し。されど世の創より御業は既に成れるなり。或篇に七日めに就きて斯く云へり『七日めに神その凡ての業を休みたまへり』と。また茲に『かれらは、我が休に入るべからず』と云へり。然れば之に入るべき者なほ在り、曩に善き音信を傳へられし者らは、不從順によりて入ることを得ざりしなれば、久しきを経てのち復、日を定めダビデによりて『今日』と言ひ給ふ。曩に記したるが如し。曰く、『今日なんぢら神の聲を聞かば、心を頑固にする勿れ』若しヨシヤ既に休を彼ら

に得しめしならば、神はその後、ほかの日につきて語り給はざりしならん。然れば神の民の爲になほ安息は遺れり。既に神の休に入りたる者は、神のその業を休み給ひしごとく、己が業を休めり。されば我等はこの休に入らんことを努むべし、是かの不従順の例にならひて誰も墮つることなからん爲なり。神の言は生命あり、能力あり、兩刃の劍よりも利くして、精神と靈魂、關節と骨髓を透して之を割ち、心の念と志望とを験すなり。また造られたる物に一つとして神の前に顯れぬはなし、萬の物は我らが係れる神の目のまへに裸にて露るるなり。

我等には、もろもろの天を通り給ひし偉なる大祭司、神の子イエスあり。然れば我らが言ひあらはす信仰を堅く保つべし。我らの大祭司は我らの弱を思ひ遣ること能はぬ者にあらず、罪を外にして凡ての事、われらと等しく試みられ給へり。この故に我らは憐憫を受けんが爲、また機に合ふ助となる恵を得んがために、憚らずして恵の御座に來るべし。

第五章

凡そ大祭司は人の中より選ばれ、罪のために供物と犠牲とを獻げんとして、人にかはりて神に事ふることを任ぜらる。彼は自らも弱に纏はるるが故に無知なるもの、迷へる者を思ひ遣ることを得るなり。之によりて民

のために爲すごとく、また己のためにも罪に就きて獻物をなさざるべからず。又この貴き位はアロンのごとく神に召さるるにあらずば、誰も自ら之を取る者なし。斯の如くキリストも己を崇めて自ら大祭司となり給はず。之に向ひて、『なんぢは我が子なり、われ今日なんぢを生めり』と語り給ひし者、これを立てたり。また他の篇に、『なんぢは永遠にメルキゼデクの位に等しき祭司たり』と言ひ給へるが如し。キリストは肉體にて在ししとき、大なる叫と涙とをもて、己を死より救ひ得る者に祈と願とを獻げ、その恭敬によりて聽かれ給へり。彼は御子なれど、受けし所の苦難によりて従順を學び、かつ全うせられたれば、凡て己に順ふ者のために永遠の救の原となりて、神よりメルキゼデクの位に等しき大祭司と稱へられ給へり。

之に就きて我ら多くの言ふべき事あれど、汝ら聞くに鈍くなりたれば釋き難し。なんぢら時を経ること久しければ、教師となるべき者なるに、今また神の言の初歩を人より教へられざるを得ず、汝らは堅き食物ならて乳を要する者となれり。おほよそ乳を用ふる者は幼児なれば、未だ義の言に熟せず、堅き食物は智力を練習して善悪を辨ふる成人の用ふるものなり。

第六章

この故に我らはキリストの教の初歩に止まることなく、再び死にた
 る行為の悔改と神に對する信仰との基、^二 また各様のバプテスマと按
 手と死人の復活と永遠の審判との教の基を置かずして完全に進むべし。^三 神もし許
 し給はば、我ら之をなさん。^四 一たび照されて天よりの賜物を味ひ、^五 聖靈に與る者
 となり、^六 神の善き言と來世の能力とを味ひて後、^七 墮落する者は更にまた自ら神
 の子を十字架に釘けて肆し者とする故に、再びこれを悔改に立返らること能はざ
 るなり。^八 それ地しばしば其の上に降る雨を吸入れて耕す者の益となるべき作物を
 生ぜば、神より祝福を受く。^九 されど茨と薊とを生ぜば、棄られ、かつ詛に近く、
 その果は焚かるるなり。^{一〇}

愛する者よ、われら斯くは語れど、汝らには更に善きこと、^一 即ち救にかかは
 る事あるを深く信ず。^二 神は不義に在さねば、汝らの勤勞と、前に聖徒につかへ、
 今もなほ之に事へて御名のために顯したる愛とを忘れ給ふことなし。^三 我らは汝等
 がおのおの終まで前と同じ勵をあらはして全き望を保ち、^四 怠ることなく、信仰と
 耐忍とをもて約束を嗣ぐ人々に效はんことを求む。^五

それ神はアブラハムに約し給ふとき、^一 指して誓ふべき己より大なる者なき故

第七章

己を指して誓ひて言ひ給へり、^一 『われ必ず、なんぢを恵み恵まん、なんぢを殖
 し殖さん』と、^二 斯の如くアブラハムは耐忍びて約束のものを得たり。^三 おほよそ
 人は己より大なる者を指して誓ふ、その誓はすべての争論を罷むる保證たり。^四 こ
 の故に神は約束を嗣ぐ者に御旨の變らぬことを充分に示さんと欲して誓を加へ給へ
 り。^五 これ神の諛ること能はぬ二つの變らぬものによりて、己の前に置かれたる
 希望を捉へんとて遁れたる我らに強き獎勵を與へん爲なり。^六 この希望は我らの
 靈魂の錨のごとく安全にして動かず、かつ幔の内に入る。^七 イエス我等のために前
 驅し、永遠にメルキゼデクの位に等しき大祭司となりて、その處に入り給へり。^八

此のメルキゼデクはサレムの王にて至高き神の祭司たりしが、王た
 ちを破りて還るアブラハムを迎へて祝福せり。^九 アブラハムは彼に凡
 ての物の十分の一を分與へたり。^{一〇} その名を釋けば第一に義の王、次にサレムの王、
 すなはち平和の王なり。^{一一} 父なく、母なく、系圖なく、齣の始なく、生命の終な
 く、神の子の如くにして限りなく祭司たり。^{一二}

先祖アブラハム分捕物のうち十分の一、最も善き物を之に與へたれば、その
 人の如何に尊きかを思ふべし。^{一三} レビの子等のうち祭司の職を受くる者は、律法に

よりて民、即ちアブラハムの腰より出てたる己が兄弟より十分の一を取ること命ぜらる。六 されど此の血派にあらぬ彼は、アブラハムより十分の一を取りて約束を受けし者を祝福せり。七 それ小なる者の大なる者に祝福せらるるは論なき事なり。八 かつ此所にては死ぬべき者十分の一を受くれども、彼處にては『活くるなり』と證せられたる者、これを受く。九 また十分の一を受くるレビすら、アブラハムに由りて十分の一を納めたりと云ふも可なり。一〇 そはメルキゼデクのアブラハムを迎へし時に、レビはなほ父の腰に在りたればなり。二

もしレビの系なる祭司によりて全うせらるる事ありしならば（民は之によりて律法を受けたり）何ぞなほ他にアロンの位に等しからぬメルキゼデクの位に等しき祭司の起る必要あらんや。一三 祭司の易る時には律法も亦必ず易るべきなり。一四 此等のことは曾て祭壇に事へたることなき他の族に屬する者をさして云へるなり。二四 それ我らの主のユダより出て給へるは明かにして、此の族につき、モーセは聊かも祭司に係ることを云はざりき。一五 又メルキゼデクのごとき他の祭司おこり、肉の誠命の法に由らず、朽ちざる生命の能力によりて立てられたれば、我が言ふ所いよいよ明かなり。一七 そは『なんぢは永遠にメルキゼデクの位に等しき祭司たり』と證

せられ給へばなり。一八 前の誠命は弱く、かつ益なき故に廢せられ、一九（律法は何をも全うせざりしなり）更に優れたる希望を置かれたり、この希望によりて我らは神に近づくなり。二〇 かの人は誓なくして祭司とせられたれども、彼は誓なくしては爲られず、誓をもて祭司とせられ給へり。二一 即ち彼に就きて、『主ちかひて悔い給はず、』なんぢは永遠に祭司たり』と言ひ給ひしが如し。二二 イエスは斯くも優れたる契約の保證となり給へり。二三 かの人は死によりて永くその職に留ることを得ざる故に祭司となりし者の數多かりき。二四 されど彼は永遠に在せば易ることなき祭司の職を保ちたまふ。二五 この故に彼は己に頼りて神にきたる者のために執成をなさんとて常に生くれば、之を全く救ふことを得給ふなり。二六

斯のごとき大祭司こそ我らに相應しき者なれ、即ち聖にして悪なく、穢なく、罪人より遠ざかり、諸般の天よりも高くせられ給へり。二七 他の大祭司のごとく先づ己の罪のため、次に民の罪のために日々犠牲を獻ぐるを要し給はず、そは一たび己を獻げて之を成し給ひたればなり。二八 律法は弱みある人々を立てて大祭司となせれども、律法の後なる誓の御言は、永遠に全うせられ給へる御子を大祭司となせり。

第八章

今いふ所の要點は斯のごとき大祭司の我らにある事なり。彼は天に
 稜威の御座の右に坐し、聖所および眞の幕屋に事へたまふ。この
 幕屋は人の設くるものにあらず、主の設けたまふ所なり。おほよそ大祭司の立
 らるるは供物と犠牲とを獻げん爲なり、この故に彼もまた獻ぐべき物あるべきな
 り。然るに若し地に在さば既に律法に循ひて供物を獻ぐる祭司等あるによりて祭
 司とはなり給はざるべし。彼らの事ふるは、天にある物の型と影となり。モーセ
 が幕屋を建てんとする時に「愼め、山にて汝が示されたる式に效ひて凡ての物を造
 れ」との御告を受けしが如し。されどキリストは更に勝れる約束に基きて立てら
 れし勝れる契約の中保となりたれば、更に勝る職を受け給へり。かつ初の契約も
 し虧くる所なくば、第二の契約を求むる事なかりしならん。然るに彼らを咎めて
 言ひ給ふ、「主いひ給ふ「視よ、我イスラエルの家とユダの家とに、新しき契約を
 設くる日來らん。この契約は我かれらの先祖の手を執りて、エジプトの地より導
 き出しし時に立てし所の如きに非ず。彼らは我が契約に止まらず、我も彼らを顧み
 ざりしなり」と、主いひ給ふ。「然れば、かの日の後に我がイスラエルの家と立つ
 る契約は是なり」と主いひ給ふ。「われ我が律法を彼らの念に置き、その心に之を

第九章

記さん、また我かれらの神となり、彼らは我が民とならん。彼等また各人その國
 人に、その兄弟に教へて、なんぢ主を知れと言はざるべし。そは少より大に至るま
 で、皆われを知らん。我もその不義を憐み、この後また其の罪を思出でざるべ
 し」と。既に「新し」と言ひ給へば、初のものを舊しとし給へるなり、舊びて衰
 ふるものは、消失せんとするなり。

初一の契約には禮拜の定と世に屬する聖所とありき。設けられたる
 幕屋あり、前なるを聖所と稱へ、その中に燈臺と案と供のパンとあ
 り。また第二の幕の後に至聖所と稱ふる幕屋あり。その中に金の香壇と金にて
 徧く覆ひたる契約の櫃とあり、この中にマナを納れたる金の壺と芽したるアロンの
 杖と契約の石碑とあり、櫃の上に榮光のケルビムありて贖罪所を覆ふ。これらの
 物に就きては今、一々言ふこと能はず、此等のもの斯く備りたれば、祭司たちは
 常に前なる幕屋に入りて禮拜をおこなふ。されど奥なる幕屋には大祭司のみ年に
 一度おのれと民との過失のために獻ぐる血を携へて入るなり。之によりて聖靈は
 前なる幕屋のなほ存するあひだ、至聖所に入る道の未だ顯れざるを示し給ふ。こ
 の幕屋はその時のために設けられたる比喻なり、之に循ひて獻げたる供物と犠牲と

は、禮拜をなす者の良心を全うすること能はざりき。此等はただ食物・飲物さまざまの濯事などに係り、肉に屬する定にして、改革の時まで負せられたるのみ。然れどキリストは來らんとする善き事の大祭司として來り、手にて造らぬ此の世に屬せぬ更に大なる全き幕屋を経て、山羊と犢との血を用ひず、己が血をもて只一たび至聖所に入りて、永遠の贖罪を終へたまへり。もし山羊および牡牛の血、牝牛の灰などを穢れし者にそそぎて其の肉體を潔むることを得ば、まして永遠の御靈により瑕なくして己を神に獻げ給ひしキリストの血は、我らの良心を死にたる行爲より潔めて活ける神に事へしめざらんや。この故に彼は新しき契約の中保なり。これ初の契約の下に犯したる咎を贖ふべき死あるによりて、召されたる者に約束の永遠の嗣業を受けさせん爲なり。それ遺言は必ず遺言者の死を要す。遺言は遺言者死にてのち始めて効あり、遺言者の生くる間は効なきなり。この故に初の契約も血なくして立てしにあらず。モーセ律法に循ひて諸般の誠命をすべての民に告げてのち、犢と山羊との血、また水と緋色の毛とヒソブとをとりて書および凡ての民にそそぎて言ふ、『これ神の汝らに命じたまふ契約の血なり』と。また同じく幕屋と祭のすべての器とに血をそそげり。おほよそ律法によれば、

萬のものの血をもて潔めらる。もし血を流すことなくば、赦さるることなし。この故に天に在るものに象りたる物は此等にて潔められ、天にある物は此等に勝りたる犠牲をもて潔めらるべきなり。キリストは眞のものに象れる、手にて造りたる聖所に入らず、眞の天に入りて今より我等のために神の前にあらはれ給ふ。これ大祭司が年ごとに他の物の血をもて聖所に入ることく、屢次おのれを獻ぐる爲にあらず。もし然らずば世の創より以來しばしば苦難を受け給ふべきなり。然れど今、世の季にいたり、己を犠牲となして罪を除かんとす。一たび現れたまへり。一たび死ぬることと死にてのち審判を受くることとの人に定りたる如く、キリストも亦おほくの人の罪を負はんが爲に一たび獻げられ、復罪を負ふことなく、己を待望む者に再び現れて救を得させ給ふべし。第一〇章 それ律法は來らんとする善き事の影にして眞の形にあらねば、年毎にたえず獻ぐる同じ犠牲にて、神にきたる者を何時までも全うするこ

とを得ざるなり。もし之を得ば、禮拜をなす者、一たび潔められて復、心に罪を憶えねば、獻ぐることを止めしならん。然れど犠牲によりて、年ごとに罪を憶ゆるなり。これ牡牛と山羊との血は罪を除くこと能はざるに因る。この故にキリ

スト世に来るとき言ひ給ふ、『なんぢ犠牲と供物とを欲せず、唯わが爲に體を備へたまへり。なんぢ燔祭と罪祭とを悦び給はず、その時われ言ふ「神よ我なんぢの御意を行はんとて来る」我につきて書の巻に録されたるが如し』と。先には『汝いけにへと供物と燔祭と罪祭と（即ち律法に循ひて獻ぐる物）を欲せず、また悦ばず』と言ひ、後に『視よ、我なんぢの御意を行はんとて来る』と言ひ給へり。その後なる者を立てん爲に、その先なる者を除き給ふなり。この御意に適ひてイエス・キリストの體の一たび獻げられしに由りて我らは潔められたり。すべの祭司は日毎に立ちて事へ、いつまでも罪を除くこと能はぬ同じ犠牲をしはば獻ぐ。然れどキリストは罪のために一つの犠牲を獻げて限りなく神の右に坐し、斯て己が仇の己が足臺とせられん時を待ちたまふ。それは潔めらるる者を一つの供物にて限りなく全うし給ふなり。聖霊も亦われらに之を證して、『この日の後、われ彼らと立つる契約は是なり』と主いひ給ふ。また「わが律法をその心に置き、その念に銘さん』と、言ひ給ひて、『この後また彼らの罪と不法とを思ひ出でざるべし』と言ひたまふ。斯る赦ある上は、もはや罪のために獻物をなす要なし。

然れば兄弟よ、我らはイエスの血により、その肉體たる幔を経て我らに開き給へる新しき活ける路より憚らずして至聖所に入ることを得、かつ神の家を治むる大なる祭司を得たれば、心は濯がれて良心の咎をさり、身は清き水にて洗はれ、眞の心と全き信仰とをもて神に近づくべし。また約束し給ひし者は忠實なれば、我ら言ひあらはす所の望を動かさずして堅く守り、互に相顧み愛と善き業とを勵まし、集會をやむる或人の習慣の如くせず、互に勧め合ひ、かの日のいよいよ近づくを見て、ますます斯の如くすべし。我等もし眞理を知る知識をうけたる後、ことさらに罪を犯して止めずば、罪のために犠牲、もはや無し。ただ畏れつつ審判を待つことと、逆ふ者を焚きつくす烈しき火とのみ遺るなり。モーセの律法を蔑する者は慈悲を受くることなく、二三人の證人によりて死に至る。まして神の子を踏みつけ、己が潔められし契約の血を潔からずとなし、恩恵の御霊を侮る者の受くべき罰の重きこと如何許とおもふか。『仇を復すは我に在り、われ之を報いん』と言ひ、また『主その民を審かん』と言ひ給ひし者を我らは知るなり。活ける神の御手に陥るは畏るべきかな。なんぢら御光を受けしち苦難の大なる戦闘に耐へし前の日を思ひ出でよ。

三三〇 或は誹謗と患難とに遭ひて觀物にせられ、或は斯ることに遭ふ人の友となれり。
 三四 また囚人となれる者を思ひやり、永く存する尤も勝れる所有の己にあるを知りて、我が所有を奪はるるをも喜びて忍びたり。三三
 確信を投げすつな。三三六 なんぢら神の御意を行ひて約束のものを受けん爲に必要なるは忍耐なり。三七
 『いま暫くせば、來るべき者きたらん、遅からじ。三三八 我に屬ける義人は、信仰によりて活くべし。もし退かば、わが心これを喜ばじ』三三九 然れど我らは退きて滅亡に至る者にあらず、靈魂を得るに至る信仰を保つ者なり。

第一章

一 それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を眞實とするなり。二 古へ世界の神の言にて造られ、見ゆる物の顯る物より成らざるを悟る。四 信仰によりてアベルはカインよりも勝れる犠牲を神に獻げ、之によりて正しと證せられたり。神その供物につきて證し給へばなり。彼は死ぬれども、信仰によりて今なほ語る。五 信仰に由りてエノクは死を見ぬやうに移されたり。神これを移し給ひたれば見出されざりき。その移さるる前に神に喜ばるることを證せられたり。六 信仰なくしては神に悦ばるること能はず、そは神に來る者は、神の在すことと神の己を求むる者

七 報い給ふこととを、必ず信ずべければなり。七 信仰に由りてノアは、未だ見ざる事につきて御告を蒙り、畏みてその家の者を救はん爲に方舟を造り、かつ之によりて世の罪を定め、また信仰に由る義の世嗣となれり。八 信仰に由りてアブラハムは召されしとき嗣業として受くべき地に出で往けとの命に遵ひ、その往く所を知らずして出で往けり。九 信仰により異國に在ることと約束の地に寓り、同じ約束を嗣ぐべきイサクとヤコブと共に幕屋に住めり。一〇 これ神の營み造りたまふ基礎ある都を望めばなり。一一 信仰に由りてサラも約束したまふ者の忠實なるを思ひし故に、年邁ぎたれど胤をやどす力を受けたり。一二 この故に死にたる者のごとき一人より天の星のごとく、また海邊の數へがたき砂のごとく夥多しく生れ出でたり。一三 彼等はみな信仰を懷きて死にたり。未だ約束の物を受けざりしが、遙にこれを見て迎へ、地にては旅人また寓れる者なるを言ひあらはせり。一四 斯く言ふは、己が故郷を求むることを表すなり。一五 若しその出でし處を念はば、歸るべき機ありしなるべし。一六 されど彼らの慕ふ所は天にある更に勝りたる所なり。この故に神は彼らの神と稱へらるるを恥とし給はず、そは彼等のために都を備へ給へばなり。一七 信仰に由りてアブラハムは試みられし時イサクを獻げたり、彼は約束を喜び

受けし者なるに、その獨子を獻げたり。彼に對しては『イサクより出づる者なんぢの裔と稱へらるべし』と云ひ給ひしなり。かれ思へらく、神は死人の中より之を甦へらすることを得給ふと、乃ち死より之を受けしが如くなりき。信仰に由りてイサクは來らんとする事につきヤコブとエサウとを祝福せり。信仰に由りてヤコブは死ぬる時ヨセフの子等をおのおの祝福し、その杖の頭によりて禮拜せり。信仰に由りてヨセフは生命の終らんとする時、イスラエルの子らの出て立つことに就きて語り、又おのが骨のことを命じたり。信仰に由りて兩親はモーセの生れたる時、その美しき子なるを見て王の命をも畏れずして三月の間これを匿したり。信仰に由りてモーセは人と成りしときパロの女の子と稱へらるるを否み、罪のはかなき歡樂を受けんよりは、寧ろ神の民とともに苦まんことを善しとし、キリストに因る謗はエジプトの財寶にまさる大なる富と思へり、これ報を望めばなり。信仰に由りて彼は王の憤恚を畏れずしてエジプトを去れり。これ見えざる者を見るがごとく耐ふる事をすればなり。信仰に因りて彼は過越と血を灑ぐことを行へり、これ初子を滅す者の彼らに觸れざらん爲なり。信仰に由りてイスラエル人は紅海を乾ける地のごとく渡りしが、エジプト人は然せんと試みて溺れ死にたり。

信仰に由りて七日のあひだ廻りたればエリコの石垣は崩れたり。信仰に由りて遊女ラハブは平和をもて間者を接けたれば、不從順の者とともに亡びざりき。この外なにを言ふべきか、ギデオン、バラク、サムソン、エフタ、またダビデ、サムエル及び預言者たちに就きて語らば、時足らざるべし。彼らは信仰によりて國々を服へ、義をおこなひ、約束のものを得、獅子の口をふさぎ、火の勢力を消し、劍の刃をのがれ、弱よりして強くせられ、戰爭に勇ましくなり、異國人の軍勢を退かせたり。女は死にたる者の復活を得、ある人は更に勝りたる復活を得んために免さるることを願はずして極刑を甘んじたり。その他の者は嘲笑と鞭と、また縲紲と牢獄との試鍊を受け、或者は石にて撃たれ、試みられ、鐵鋸にて挽かれ、劍にて殺され、羊・山羊の皮を纏ひて經あるき、乏しくなり、惱まされ、苦しめられ、(世は彼らを置くに堪へず)荒野と山と洞と地の穴とに徨へり。彼等はみな信仰に由りて證せられたれども約束のものを得ざりき。これ神は我らの爲に勝りたるものを備へ給ひし故に、彼らも我らと偕ならざれば、全うせらるる事なきなり。

第一二章

この故に我らは斯く多くの證人に雲のごとく圍まれたれば、凡ての

重荷と纏へる罪とを除け、忍耐をもて我らの前に置かれたる馳場をはしり、
 信仰の導師また之を全うする者なるイエスを仰ぎ見るべし。彼はその前に置かれたる
 歡喜のために、恥をも厭はずして十字架をしのび、遂に神の御座の右に坐し給へ
 り。なんぢら倦み疲れて心を喪ふこと莫らんとために罪人らの斯く己に逆ひしこと
 を忍び給へる者をおもへ。汝らは罪と闘ひて未だ血を流すまで抵抗しことなし。
 五 また子に告ぐるごとく汝らに告げ給ひし勸言を忘れたり。曰く「わが子よ、主の
 懲戒を輕んずるなかれ、主に戒めらるるとき、倦むなかれ。六
 七 汝らの忍ぶは懲戒の爲
 者懲しめ、凡てその受け給ふ子を鞭ち給へばなり」と。汝らの忍ぶは懲戒の爲
 なり、神は汝らの子のごとく待ひたまふ、誰か父の懲しめぬ子あらんや。八
 九 凡ての
 人の受くる懲戒、もし汝らに無くば、それは私生兒にして實の子にあらず、
 我らの肉體の父は、我らを懲しめし者なるに尙これを敬へり、況して靈魂の父に服
 ひて生くることを爲ざらんや。一〇
 一〇 彼は肉體の父は暫くの間その心のままに懲しむる
 ことを爲しが、靈魂の父は我らを益するのために、その聖潔に與らせんとて懲しめ給
 へばなり。一二
 一二 凡ての懲戒、今は喜ばしと見え、反つて悲しと見ゆ、されど後これ
 によりて練習する者に、義の平安なる果を結ばしむ。一三
 一三 されば衰へたる手、弱りた

る膝を強くし、足蹇たる者の履み外すことなく、反つて醫されんために汝らの足
 に直なる途を備へよ。
 一四 力めて凡ての人と和ぎ、自ら潔からんことを求めよ。もし潔からずば、主を
 見ること能はず。一五
 一五 なんぢら慎め、恐らくは神の恩恵に至らぬ者あらん。恐らくは
 苦き根はえいてて汝らを惱まし、多くの人これに由りて汚されん。一六
 一六 恐らくは淫行
 のもの或は一飯のために長子の特權を賣りしエサウの如き妄なるもの起らん。一七
 一七 汝
 らの知ることく、彼はそののち祝福を受けんと欲したれども棄てられ、涙を流して
 之を求めたれど回復の機を得ざりき。
 一八 汝らの近づきたるは、火の燃ゆる觸り得べき山・黒雲・黒闇・嵐、
 一九 ラツバ
 の音、言の聲にあらず、この聲を聞きし者は此の上に言の加へられざらんことを願
 へり。二〇
 二〇 此れ『獸すら山に觸れなば、石にて撃るべし』と命ぜられしを、彼らは忍
 ぶこと能はざりし故なり。二一
 二一 彼の現れしところ極めて怖しかりしかばモーセは『わ
 れ甚く怖れ戦けり』と云へり。二二
 二二 されど汝らの近づきたるはシオンの山、活ける神
 の都なる天のエルサレム、千萬の御使の集會、
 二三 天に録されたる長子どもの教會、
 二四 萬民の審判主なる神、全うせられたる義人の靈魂、
 二五 新約の仲保なるイエス及びア

ベルの血に勝りて物言ふ麗の血なり、^{二五} なんぢら心して語りたまふ者を拒むな、もし地にて示し給ひし時これを拒みし者ども遁るる事なかりしならば、況して天より示し給ふとき、我ら之を退けて遁るることを得んや。^{二六} その時、その聲、地を震へり、されど今は誓ひて言ひたまふ『我なほ一たび地のみならず、天をも震はん』と。^{二七} 此の『なほ一度』とは震はれぬ物の存らんために震はるる物、すなはち造られたる物の取り除かるることを表すなり。^{二八} この故に我らは震はれぬ國を受けたれば、感謝して恭敬と畏懼とをもて御心になすべし。^{二九} 我らの神は焼盡す火なればなり。

第一三章

兄弟の愛を常に保つべし。^一 旅人の接待を忘るな、或人これに由り、知らずして御使を舍したり。^二 己も共に繋がるごとく囚人を思へ、また己も肉體に在れば、苦しむ者を思へ。^三 凡ての人、婚姻のことを貴べ、また寢床を汚すな。神は淫行のもの、姦淫の者を審き給ふべければなり。^四 金を愛することなく、有るものを以て足れりとせよ。主みづから『われ更に汝を去らず、汝を捨てじ』と言ひ給ひたればなり。^五 然れば我ら心を強くして斯く言はん。『主わが助主なり、我おそれじ。人われに何をか爲さん』と。^六 神の言を汝らに語りて汝

らを導きし者どもを思へ、その行狀の終を見てその信仰に效へ。^一 イエス・キリストは昨日も今日も永遠までも變り給ふことなし。^二 各様の異なる教のために惑さるな。飲食によらず、恩恵によりて心を堅うするは善し、飲食によりて歩みたる者は益を得ざりき。^三 我らに祭壇あり、幕屋に事ふる者は之より食する權を有たず。大祭司、罪のために活物の血を携へて至聖所に入り、その活物の體は陣營の外にて焼かるるなり。^四 この故にイエスも己が血をもて民を潔めんが爲に門の外にて苦難を受け給へり。^五 されば我らは彼の恥を負ひ、陣營より出てその御許に往くべし。^六 われら此處には永遠の都なくして、ただ來らんとする者を求むればなり。^七 此の故に我らイエスによりて常に讚美の供物を神に獻ぐべし、乃ちその御名を頌むる口唇の果なり。^八 かつ仁慈と施濟とを忘るな、神は斯のごとき供物を喜びたまふ。^九 汝らを導く者に順ひ之に服せよ、彼らは己が事を神に陳ぶべき者なれば、汝らの靈魂のために目を覺しをるなり。彼らを歎かせず、喜びて斯く爲さしめよ、然らずば汝らに益なかるべし。^{一〇} 我らの爲に祈れ、我らは善き良心ありて凡てのこと正しく行はんと欲するを信ずるなり。^{一一} われ速かに汝らに歸ることを得んために、汝らの祈らんことを殊に